天神北遺跡

（山梨県甲府市千塚５丁目 3416 番３ほか地点）

－宅地造成工事に伴う発掘調査報告書－

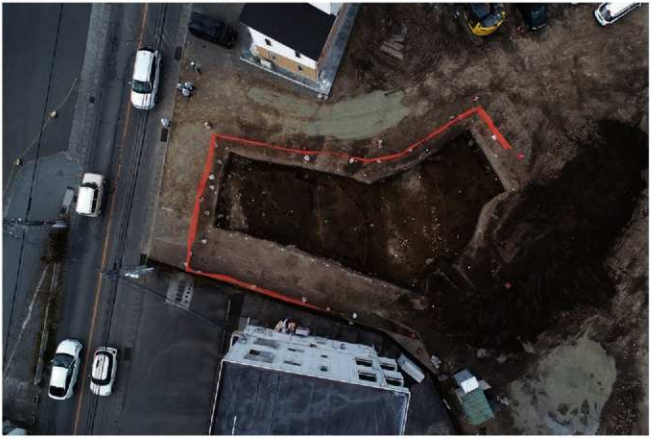
２０２２

西甲府住宅株式会社
甲府市教育委員会
昭和測量株式会社

天神北遺跡出土縄文土器「X字状把手付大甕」

巻頭図版 2

東側より調査地と荒川、北西の山々を望む



2区直上より見た周溝状の溝跡

序

天神北遺跡は、甲府盆地北縁部の甲府市西部の千塚地域、荒川左岸の微高地上に位置します。千塚地域からは、西に南アルプスの山並み、南には富士山が望め、古代から人の集住が確認されています。当遺跡北側には御蔵遺跡、西側に天神西遺跡、南東側に榎田遺跡など、弥生時代から平安時代にかけての遺跡が多くみられます。特に古墳時代には集落が営まれるとともに、現在も山梨県指定文化財加牟那塚古墳、万寿森古墳など古墳時代後期の６世紀代に築かれた古墳がみられ、千塚の地名が残ることからも以前はこの地域一帯には多数の古墳が築かれていました。

天神北遺跡は古墳時代及び平安時代の遺跡として周知されていますが、本調査は初めてです。約 5000 年前の縄文時代中期の埋甕、消滅した古墳の痕跡、洪水で埋没した平安時代中期の住居址、荒川の氾濫の痕跡などが発見されました。この発掘調査の成果は、甲府市の歴史解明のみならず、自然環境の変化を解明する資料としても重要です。今後の研究資料としてご活用していただければ幸甚です。

末筆となりましたが、このような貴重な遺跡発掘調査が実施できましたのも、開発事業者及び関係者のご理解ご協力の賜物であるとともに、発掘調査及び整理作業に従事された皆様方のご努力の成果であります。関係者皆様に感謝申し上げるとともに、今後とも甲府市の文化財保護にご協力をお願い申し上げます。

令和４年９月

甲府市教育委員会

教育長　數野　保秋

例　言

1．本書は、山梨県甲府市千塚５丁目3416番３ほかに所在する天神北遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査は宅地造成工事に伴う土木工事に先立つものであり、事業者である西甲府住宅株式会社の費用負担により実施した。
3．発掘調査と整理報告書作成業務は、西甲府住宅株式会社、甲府市教育委員会、昭和測量株式会社で三者協定を締結し、甲府市教育委員会の指導の下、昭和測量株式会社が調査主体となり実施した。

［調査体制］

調 査 担 当　望月健太・浅川晃一（以上、昭和測量株式会社文化財調査課）
調 査 顧 問　新津健（昭和測量株式会社文化財調査課　研究顧問）
発掘従事者　大塚彰仁、加藤俊哉、齊藤里美、佐野香織、内藤敏夫、中澤保、広瀬ありさ、横山忠以、渡辺俊夫
整理従事者　浅川悠起子、今福ともみ、垣内律子、尾川正美、齊藤里美、佐野香織、広瀬ありさ、三木一恵

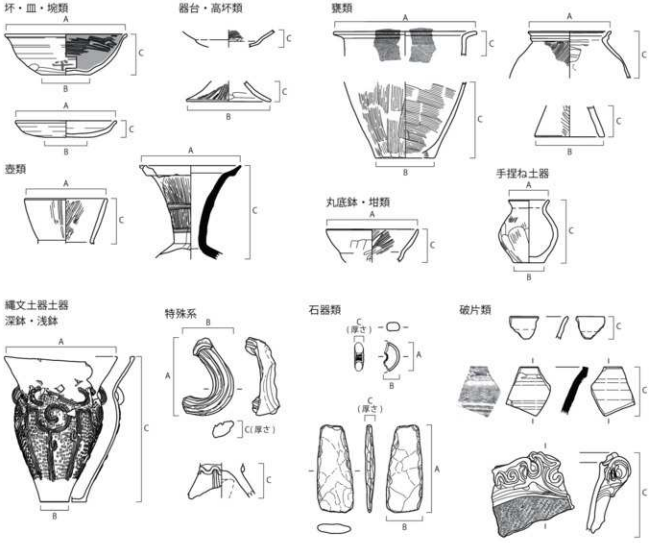
4．試掘確認調査は、甲府市教育委員会歴史文化財課の志村憲一が担当した。本発掘調査は令和３年10月22日から12月20日まで行った。整理報告書作成業務は令和３年12月21日から令和４年９月30日まで、昭和測量株式会社文化財調査課事務所内で行った。
5．本書に関わる遺構写真は望月健太・浅川晃一が撮影し、遺物写真は望月健太が撮影した。
6．本書の編集は望月健太が行った。執筆分担は以下の通りである。
第１章第１節：志村憲一（甲府市教育委員会歴史文化財課　文化財保護係）
その他の執筆は望月健太が行った。
7．発掘調査における基準点測量および空中写真撮影は昭和測量株式会社測量課が行い、基準点測量を早川徹・保坂亮太が、空中写真撮影を吉田奏司・赤池直樹がそれぞれ担当した。
8．発掘調査及び報告書作成にあたり、次の機関および諸氏から御指導と御協力を賜った。深く感謝の意を表する。
有限会社三双建設、河西学（公益財団法人山梨文化財研究所）、小林健二、坂本美夫、平塚洋一　（順不同・敬称略）
9．本書に関わる出土遺物および写真・記録図面類は甲府市教育委員会で保管している。

凡　例

1．本書では、国土交通省国土地理院発行の電子地形図 1/25,000 を用いた。
2．遺構・遺物の挿図縮尺は、各図に表示した。写真図版の縮尺は任意である。
3．遺構平面図の方位は、各図に表示した。方位記号は方眼北を示している。
4．遺構平面図のＸ・Ｙ座標値は、世界測地系の平面直角座標系第Ⅷ系に基づく値である。単位はメートルである。
5．遺構断面図の数値は、標高（T.P.）を示す。単位はメートルである。
6．土層・遺物観察表中の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づいた。
7．本書に掲載した絵図等の資料名は、原則として各資料に表示した。
8．発掘調査では以下の遺構記号を使用した。
　竪穴建物：ＳＩ　溝：ＳＤ　土坑：ＳＫ　小穴：ＳＰ　石列・集石：ＳＳ　旧河道：ＮＲ
9．遺物番号は出土地点にかかわらず連番で付した。本書における挿図・写真図版・遺物分布図・遺物観察表および本文中の遺物番号はそれぞれ対応している。
10. 遺構平面図における破線はサブトレンチ・推定線である。
11. 遺構挿図・遺物挿図で使用したトーンの凡例は以下の通りである。

須恵器断面　焼土範囲（遺構図）　灰釉陶器断面・黒色処理（遺物図）　炭化物範囲（遺構図）　煤（遺物図）　石断面

12. 遺物観察表の法量の計測方法の凡例は以下の通りである。



本文目次

序
例言
凡例
第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘作業の経過 …… 2
　第３節　整理等作業の経過 …… 3
第２章　遺跡の位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　調査の方法と層序 …… 7
　第１節　調査の方法 …… 7
　第２節　基本層序 …… 8
第４章　調査の成果 …… 13
　第１節　１区の調査 …… 13
　　第１項　第１遺構面 …… 13
　　第２項　第２遺構面 …… 15
　第２節　２区の調査 …… 19
　　第１項　第１遺構面 …… 19
　　第２項　第２遺構面 …… 21
第５章　総括 …… 63
　第１節　１区の調査成果と今後の課題 …… 63
　第２節　２区で確認したⅪ層と溝跡の関連性 …… 64

挿図目次

第１図　本調査区と近隣調査状況 …… 1
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 …… 6
第３図　基本層序（１）概略 …… 8
第４図　基本層序（２）１区西壁、２区北西壁 …… 9
第５図　遺構配置図 …… 11
第６図　１区第１遺構面全体図 …… 24
第７図　１区遺構図（１）ＳＩ１ …… 25
第８図　１区遺構図（２）ＳＫ１～８ …… 26
第９図　１区第２遺構面全体図（１）遺構・遺物 …… 27
第10図　１区第２遺構面全体図（２）礫・河道 …… 28
第11図　１区遺構図（３）ＳＫ９～12 …… 29
第12図　１区遺構図（４）ＳＫ13～22、ＳＰ１ …… 30
第13図　２区第１遺構面全体図（１）遺構・遺物 …… 31
第14図　２区第１遺構面全体図（２）礫 …… 32
第15図　２区遺構図（１）ＳＳ１～３、ＳＫ１ …… 33
第16図　２区遺構図（２）ＳＫ２、ＳＤ１～５ …… 34
第17図　２区第２遺構面全体図 …… 35
第18図　２区遺構図（３）ＳＫ４～13 …… 36
第19図　２区遺構図（４）ＳＤ６平面図 …… 37
第20図　２区遺構図（５）ＳＤ６断面図 …… 38
第21図　サブトレンチ４・５ …… 39
第22図　１区出土遺物（１） …… 40
第23図　１区出土遺物（２） …… 41
第24図　１区出土遺物（３） …… 42
第25図　１区出土遺物（４） …… 43
第26図　１区出土遺物（５） …… 44
第27図　１区出土遺物（６） …… 45
第28図　１区出土遺物（７） …… 46
第29図　１区出土遺物（８） …… 47
第30図　１区出土遺物（９） …… 48
第31図　１区出土遺物（10） …… 49
第32図　１区出土遺物（11） …… 50
第33図　２区出土遺物（１） …… 51
第34図　２区出土遺物（２） …… 52
第35図　２区出土遺物（３） …… 53
第36図　２区出土遺物（４） …… 54
第37図　２区出土遺物（５） …… 55
第38図　埋没河道想定範囲 …… 63
第39図　古墳の位置と推定規模 …… 65

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧 …… 6
第２表　出土遺物観察表１（土器類）１ …… 56
第３表　出土遺物観察表２（土器類）２ …… 57
第４表　出土遺物観察表３（土器類）３ …… 58
第５表　出土遺物観察表４（土器類）４ …… 59
第６表　出土遺物観察表５（土器類）５ …… 60
第７表　出土遺物観察表６（土器類）６ …… 61
第８表　出土遺物観察表７（土器類）７ …… 62
第９表　出土遺物観察表８（石製品） …… 62

写真図版目次

巻頭図版１
巻頭図版２
図版１　遺構（１）
図版２　遺構（２）
図版３　遺構（３）
図版４　遺構（４）
図版５　遺構（５）
図版６　遺構（６）
図版７　遺構（７）
図版８　遺構（８）
図版９　遺構（９）
図版10　遺物（１）
図版11　遺物（２）
図版12　遺物（３）
図版13　遺物（４）
図版14　遺物（５）
図版15　遺物（６）
図版16　遺物（７）
図版17　遺物（８）
図版18　遺物（９）
図版19　遺物（10）

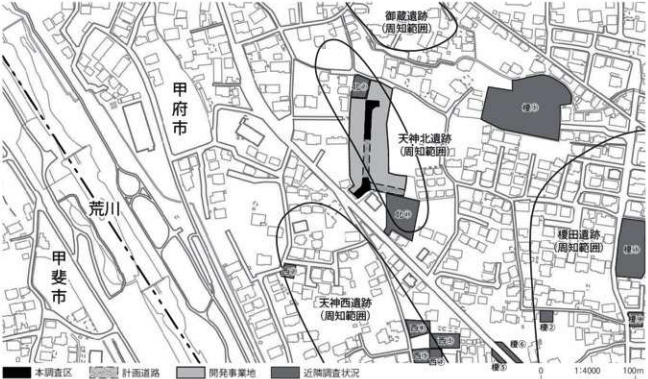
第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯（第１図）

周知の埋蔵文化財包蔵地である天神北遺跡の範囲内において、宅地造成が計画され、土木工事に先立ち令和３年７月７日付で文化財保護法第 93 条第１項に基づく届出が、事業者より甲府市教育委員会へ提出された。それに対して、令和３年７月 13 日付文化第 1659 号で山梨県知事より、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について通知され、令和３年８月 10 日から 11 日にかけ甲府市教育委員会が試掘確認調査を実施した。

試掘確認調査の結果、当該地に埋蔵文化財が遺存することが確認されたため、甲府市教育委員会より事業者へ説明されるとともに、両者による協議が行われた。協議の結果、遺構および遺物が検出された道路部分予定地の北側と南側の２区域に関して、本調査を実施することとなった。

本調査に関しては、令和３年９月 21 日、「山梨県内の記録保存のための埋蔵文化財調査における民間調査組織の利用に関する指針」に基づき、事業者より昭和測量株式会社が発掘調査業務を請け負い、事業者、甲府市教育委員会、昭和測量株式会社で三者協定を締結し、同日付で文化財保護法第 92 条第１項に基づく届出を昭和測量株式会社が提出した。令和３年 10 月５日付文化第 2619 号で山梨県知事より、埋蔵文化財発掘調査の実施について通知され、令和３年 10 月 22 日から発掘調査に着手し、記録保存を行った。



第１図　本調査区と近隣調査状況

第２節　発掘作業の経過

発掘調査は令和３年 10 月 22 日から 12 月 20 日の期間で実施した。準備工を含めた調査経過は下記の調査日誌抄録の通りである。

調査日誌抄録

１区

令和３年

９月 ３日（金）	調査区周辺の既存基準点の現況、搬入路、土砂仮置き場等の確認のため踏査。
10月 ６日（月）	三者協議、着手前の確認事項と、発掘調査計画・宅地造成工事計画の情報共有を行う。
10月18日（月）	既存の農業用水路・擁壁の撤去（造成工事請負業者が対応）。 近隣住宅へ挨拶状を投函。
10月21日（木）	発掘道具搬入、消失観測点の復元と調査区１区の測り出し。 重機の搬入。調査区周辺およびヤードの除草・整地、仮設トイレ設営等の環境整備。
10月22日（金）	重機による表土掘削。
10月25日（月）	試掘トレンチ３～５埋土の除去、サブトレンチを設定し地下状況を確認。 測量基準点３点を事業地内に新設。
10月27～28日	人力による包含層・洪水堆積層の掘削、および遺構プラン検出作業。 遺構外出土遺物の座標計測・取り上げを開始。
10月29日（金）	第１遺構面の遺構プラン検出状況を撮影し、遺構の掘削・図化等記録を開始。
11月 １日（月）	第１遺構面南側の記録を完了し、完掘状況を撮影。 宅地造成工事が事業地外周の擁壁施工から開始される。
11月 ３日（水）	第１遺構面北側の記録を完了し、完掘状況を撮影。 サブトレンチを拡張・新設し、地下状況を確認。
11月 ４日（木）	重機により旧河道および洪水堆積に伴う砂礫層を除去。 人力による第２遺構面の包含層掘削を開始。
11月 ５日（金）	包含層掘削途上に礫群２条を検出。祭祀に伴う配石の可能性を考慮し礫群の水洗を行う。
11月 ８日（月）	礫群に十字ベルトを設定し、覆土の除去・礫輪郭の露出作業を行う。
11月 ９日（火）	降雨につき午前の現場作を業中止し、石和事務所にて出土遺物の洗浄を行う。 午後より人力による包含層掘削を行う。
11月10日（水）	第２遺構面の遺構プラン検出状況を撮影。
11月11日（木）	十字ベルト層断面およびサブトレンチにより、２条の礫群はともに旧河道と判明。
11月12日（金）	第２遺構面の遺構の掘削を開始。西壁の堆積土層断面図を作成。
11月15日（月）	SK ９（埋甕）検出状況を撮影。遺構の図化等記録を開始。東壁の堆積土層断面図を作成。
11月16日（火）	SK ９半截状況を撮影・図化。調査区２区の測り出し。造成工事施工業者と工程打合せ。
11月17日（水）	第２遺構面の記録を完了し、完掘状況を撮影。
11月18日（木）	重機により自然流路（旧河道）を截ち割り、堆積土層断面の記録と流路内遺物を採取。 作業完了後、事業者へ調査区引き渡し。

２区

令和３年

11月17日（水）	調査区周辺およびヤードの除草・整地等の環境整備。造成工事施工業者と工程打合せ。
11月19日（金）	重機による表土掘削。仮囲いの設営と通用路の視覚化。

11月22日（月）　人力による壁面整形と包含層掘削を開始するが、降雨につき現場作業は午前のみとなる。
出土遺物の洗浄、現場図面・写真の整理を、午後より石和事務所にて行う。
11月23日（火）　測量基準点２点を事業地内に移設。
11月24日（水）　包含層掘削・遺構プラン検出作業と並行して、サブトレンチを設定し地下状況を確認。
２区の旧地盤が段で分かれ、各段で堆積が異なることを把握。
11月25日（木）　第１遺構面西側（上段部）の遺構プラン検出状況を撮影。
11月26日（金）　遺構の掘削を開始するとともに、サブトレンチを新設し地下状況を確認。
11月29日（月）　各サブトレンチの堆積土層断面図作成。SS １礫輪郭の露出状況を撮影。
11月30日（火）　第１遺構面中央（中断部）の遺構プラン検出状況を撮影し、構の掘削を開始。
12月 １日（水）　雨水の排水・現場復旧後、引き続き遺構の掘削を行う。
12月 ２日（木）　SD １～４の完掘状況を撮影。SD ２直下にサブトレンチを新設し地下状況を確認。
新設サブトレンチにより、厚い間層を挟み第２遺構面が遺存することを把握。
12月 ３日（金）　第１遺構面の記録を完了し、完掘状況を撮影。
現地にて市教委担当者と次工程の打合せ。
12月 ６日（月）　重機により第２遺構面包含層までの間層を除去。
人力による包含層掘削と遺構プラン検出作業を開始。
12月 ７日（火）　雨水の排水・現場復旧後、引き続き包含層掘削と遺構プラン検出作業を行う。
第２遺構面の遺構プラン検出状況を撮影し、遺構の掘削・図化等記録を開始。
12月 ８日（水）　降雨のため現場作業中止。出土遺物の洗浄、現場図面・写真の整理を石和事務所にて行う。
現場状況を確認し、甲府市整理作業室にて試掘調査における出土遺物の移管を受ける。
12月 ９日（木）　雨水の排水・現場復旧後、遺構の図化等記録を行う。
既存サブトレンチを拡張し、大型の溝状遺構 SD ６の規模や性格、作業量の把握を行う。
12月10日（金）　SD ６覆土上層を除去し、帯状礫群の検出状況を撮影。完掘作業を行う。
ドローン空撮の飛行計画・予告・挨拶状を近隣住居へ投函。
12月13日（月）　SD ６堆積土層断面図の作成・完掘もって、第２遺構面の遺構の記録を完了。
12月14日（火）　調査区・事業地内の清掃、廃土整形等の環境整備後、ドローンによる空撮を行う。
12月15・16日　壁面の堆積土層断面図の作成。
12月20日（月）　仮囲いの撤去、重機・仮設トイレ搬出等の現場撤収作業。
作業完了後、事業者へ調査区引き渡し。
12月23日（木）　埋蔵物発見届・保管請書、埋蔵文化財保管証を提出。

第３節　整理等作業の経過

整理作業および報告書刊行業務は、令和３年 12 月 21 日から令和４年９月 30 日の期間で、山梨県笛吹市石和町に所在する昭和測量株式会社埋蔵文化財調査課の事務所内にて実施した。なお、整理作業中は必要に応じて甲府市教育委員会歴史文化財課と連絡・打合せを行った。

整理作業は出土遺物の水洗・注記の基礎整理から始め、接合・復元ののち報告書掲載遺物を選別した。選別した遺物は原則手書きで実測したのち、デジタルトレース・写真撮影等の記録作業を行い、並行して遺物観察表の作成や、現場で記録した実測図の整理作業を行った。その後、挿図・図版の編集を行い、原稿の執筆、全体の編集と作業を進め、令和４年９月 30 日に発掘調査報告書を刊行した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境（第２図）

山梨県の中央に位置する甲府市は、県を縦断する様な南北に長い市域をしており、東は笛吹市・山梨市、西は甲斐市・昭和町・中央市・北杜市、南は市川三郷町・富士河口湖・身延町、北は長野県川上村と多くの市町村と接している。天神北遺跡の所在する千塚地域は甲府盆地北縁にあたり、甲府市西端を南流する荒川の中流域左岸に位置する。荒川は秩父山地西部の朝日岳（標高 2,581ｍ）、金峰山（標高 2,595ｍ）、国師ヶ岳（標高 2,592ｍ）などを水源とする一級河川で、景勝地として知られる御岳昇仙峡（日本遺産）を経て、甲府盆地底部で笛吹川に合流する。周辺には荒川によって開削された河岸段丘、沖積台地、自然堤防状の微高地が多く見られ、段丘面や微高地上に弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多数確認されている。天神北遺跡はこの様な地形のうち、荒川に沿って南北に長く形成された自然堤防状の微高地上に展開し、遺跡の標高は 308 ～ 311ｍを測る。千塚地域は、『甲斐国志』によると古墳が多く存在したという「千の塚」がその名の由来であるとされ、加年那塚古墳、万寿森古墳といった大型の横穴式石室を持つ円墳が現存するほか、慶長６年（1601）の検地帳には「金井塚」の小字名が見られる。このほか『西山梨郡志』には「手塚」の誤記が千塚になったという説も記載される。

第２節　歴史的環境（第２図・第１表）

旧石器時代

周辺で周知されている遺跡は無いが、三光寺山（標高 365ｍ）東麓の相川扇状地西縁を南流する相川中流域（42 付近）の河床より、ナウマンゾウの臼歯の化石が発見されており、地層の年代研究から、８万年以前のものと推定されている。

縄文時代

調査地周辺では数少なく、西大坂Ａ遺跡（20）、西河原遺跡（67）、居村村上遺跡（69）、米草遺跡（251）のように、周知されている遺跡の大半は散在地と位置づけられる小規模の遺跡で、盆地北縁という立地上、広域な平坦地に乏しく、継続的な大規模集落を形成し難いと考えられる。このうち米草遺跡では平成 12 年の調査で遺構に伴い諸磯ｂ式の土器が出土したことから縄文時代前期末を主体とする集落であることが判明し、遺跡自体も片山南斜面の舌状台地に沿って広がりを持つ可能性が得られた。比較的広域に展開する遺跡としては緑が丘二丁目遺跡（42）が挙げられる。甲府市立北中学校構内より諸磯ｂ式や曽利Ｉ式の土器や石棒が出土しているが、遺構は未確認である。このほか榎田遺跡（17）、塚本遺跡（19）、緑が丘一丁目遺跡（43）で前期後葉から後期の遺物が確認されるものの、ローリングによる摩滅が顕著であり洪水等による流入遺物である可能性が高い。第２図北側図外の荒川上流域（能泉湖［荒川ダム］周辺）には宝町遺跡、草鹿沢町遺跡などの縄文時代中期の遺跡が分布する。

弥生時代

この時期より、稲作の普及とともに狩猟・採集を中心とした縄文時代以前の山間地を離れ、居住域が平坦地の多い盆地底部へ移り変わる。周辺では早期、前期の遺跡は確認されていないものの、八幡東遺跡（27）では平成 26 年の調査で弥生時代後期の竪穴住居 18 基が確認されている。居住域が平坦地となったことから、平安時代まで継続する遺跡が多く見られ、特に榎田遺跡は 14 世紀前葉の中世まで、緑が丘二丁目遺跡は 10 世紀前葉の平安時代までと中世、音羽遺跡（28）は奈良時代まで、塩部遺跡（74）は 10 世紀の平安時代までと、広域かつ長期間営まれた集落遺跡が知られる。

古墳時代

先述のように、弥生時代後期より続く遺跡が多い。緑が丘二丁目遺跡では平成 29 年の調査で、弥生時代後期から中世までの８時期に分けられる遺構の変遷が確認された。塩部遺跡では平成７年の調査で、方形周溝墓の周溝から４世紀後半とされる家畜としては日本最古級のウマの歯が出土している。また、平成 28 年

の調査では古墳時代後期の流路から多数の木製品が出土しており、織機の部材と推定される木製品も報告されている。

6世紀になると、盆地北縁の山麓や山頂に古墳が築造され始め、湯村山（標高446m）の山麓には横穴式石室の円墳としては本県第2・3位の規模を誇る加年那塚古墳（25）や万寿森古墳（35）をはじめ、積石塚である湯村山古墳群西支群（29～31）東支群（32・34・36～39）と多くの古墳が分布する。また、羽黒山（標高490m）山頂には本県最大規模を誇る積石塚である天狗山（山梨県史では「おてんぐさん」）古墳が所在する。千塚の名が示すように、現存する以外にも多数の古墳が存在したとされ、古い地籍図から古墳の形跡を窺うこともできるが、昭和29年以降の開発により消失したものも多い（参1～15）。平成27年に跡部遺跡（18）で実施された発掘調査では、現在墓地となっている円形を呈す高まり付近より、大型の溝と円筒埴輪片が確認されたことから、古墳の可能性が考察されている（参7）。

奈良・平安時代

荒川左岸は平安時代中期の承平年間（931－938）に編纂された『和名類聚抄』にみえる巨麻郡9郷の一つ、青沼郷に属すると推定される地域である。正倉院宝物には「巨麻郡青沼郷物部高嶋調壱匹」と墨書された調絁があり、これは天平勝宝4年（752）に行われた奈良東大寺大仏開眼供養に用いられた伎楽面の袋の裏裂として使用されたという。このことから、奈良時代には青沼郷が成立しており、物部連に関連する人物が居住したことが明らかとなっている。弥生時代後期から続く塩部遺跡では、平成7年の調査で検出された溜池跡から木製の斎串や人型などの祭祀に纏わる遺物が出土している。塚本遺跡では、平成22年の調査で埋没河道より鋼製巡方や緑釉陶器が出土しており、付近に公的施設が存在した可能性が指摘されている。また、平成27年の跡部遺跡の調査で古代瓦が出土したことは、現在の攀桂寺の前身となる古代寺院の存在を窺わせるものである。

中・近世

『甲斐国志』によると、千塚地域は甲府市西部から甲斐市東部にかけて鎌倉期より営まれた志摩荘に属するとされる。志摩荘の成立時期は不明であるが、文献史料としては鎌倉時代の建久7年（1196）6月17日付の源頼朝書状（松尾神社［京都府］文書『鎌倉遺文』）が初出とされる。しかしながら、松ノ尾遺跡（山梨県甲斐市）で出土した9世紀から10世紀の土器に「島□」「嶋西」と読める墨書が認められたことから、平安時代末期には既に志摩荘が成立していた可能性もあり、在地領主としては甲斐源氏一族の武田有義や、安田忠義（志摩四郎）などの平安後期から鎌倉時代初期の人物が考えられている。また、『一蓮寺過去帳』によると永享から文安年間（1429～1449）に供養された衆一坊の注記に「千塚」と認められることから、室町時代後期には既に千塚の名が用いられていたことが判明している。

源義光（新羅三郎義光）を祖とする甲斐武田氏は、甲斐国内外の諸勢力や一族との対立・抗争を繰り返しつつも、18代信虎が甲斐国内を掌握すると、永正16年（1519）に甲府盆地北縁の躑躅ヶ崎の地へ居館（躑躅ヶ崎館）を移すとともに、城下町を整備することで甲斐国の新たな府中とした。扇状地帯に菲崎の躑躅ヶ崎館は、3方を山に囲われた天然の要害を呈し、北方に詰城としての要害城・熊城、西方に湯村山城（33）、南方の一条小山に砦が築かれるとともに、各地に烽火台が設置（33・263・264）された。躑躅ヶ崎館は、信虎・信玄・勝頼の3代の居館となったが、勝頼による天正9年（1581）の新府（山梨県菲崎市）移転後間もなく織田信長の甲州征伐により、天正10年（1582）3月に甲斐武田氏は滅亡することとなる。

調査区西側を南北に延伸する都市計画道路高畑町昇仙峡線は中・近世における金峰山信仰に伴う参道（登拝路）「御嶽道（古道）」の一つである吉沢筋とされており、吉沢筋の起点が接続する穂坂路の延長線上には『古事記』『日本書紀』のヤマトタケル伝承にみられる東海道から東山道への連絡路の変換点である酒折宮や笛吹市春日居所在する初期甲斐国府に通じる。また、吉沢筋の起点付近に所在する跡部遺跡は、武田信虎・晴信（信玄）に仕えた跡部伊賀守信秋が元亀2年（1571）に屋敷地を寄進し再建させたと伝わる曹洞宗寺院の攀桂寺の旧境内域であり、攀桂寺は境内規模を縮小しながらも現存している。なお攀桂寺は元は穀蔵寺といい、跡部信秋が攀桂斎と号したことから文禄3年（1594）に攀桂寺と寺号を改めたと伝わる。

第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

第１表　周辺の遺跡一覧　＊番号は「甲府市遺跡地図」に準じ、「参」は消滅古墳等の参考地を示す。

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	米塚古墳（高畑）	古墳	古墳	27	八幡東遺跡	弥生・古墳	散布地	66	六塚	古墳	古墳	参1	天神塚古墳（高畑）	古墳	古墳
2	山王神遺跡	中世	城館跡	28	首洞遺跡	弥生・古墳	散布地	67	西沢古遺跡	縄文・平安	散布地	参2	天神塚古墳（高畑）	古墳	古墳
3	若宮前遺跡	平安	散布地	29	大平１号墳	古墳	古墳	68	平石遺跡	平安	散布地	参3	無名一号墳（高畑）	古墳	古墳
4	天狗山古墳	古墳	古墳	30	仙沢寺裏無名墳（暮石塚）	古墳	古墳	69	居村村上遺跡	縄文・平安	散布地	参4	子辺塚古墳（高畑）	古墳	古墳
5	梅塚遺跡	平安	散布地	31	大平２号墳	古墳	古墳	70	前田遺跡	中世	散布地	参5	鶴塚古墳（高畑）	古墳	古墳
6	御嶽遺跡	古墳・平安	散布地	32	湯村山４号古墳	古墳	古墳	71	田辺遺跡	平安	散布地	参6	無名二号墳（高畑）	古墳	古墳
15	天神北遺跡	古墳・平安	散布地	33	湯村山城跡	中世	城館跡	72	前田遺跡	平安	散布地	参7	諸田塚古墳（高畑）	古墳	古墳
16	天神西遺跡	古墳	散布地	34	湯村山５号古墳	古墳	古墳	73	富士見遺跡	古墳・平安	散布地	参8	蛇塚古墳（高畑）	古墳	古墳
17	横田遺跡	弥生～平安	散布地	35	万寿森古墳	古墳	古墳	74	国府遺跡	弥生～平安	集落跡	参9	証天宮古墳（高畑）	古墳	古墳
18	諸田遺跡	古墳	散布地	36	湯村山４号古墳	古墳	古墳	251	米塚遺跡	縄文	散布地	参10	鳥塚古墳（高畑）	古墳	古墳
19	塚本遺跡	古墳	散布地	37	湯村山３号古墳	古墳	古墳	253	甲府城下町遺跡	近世	城下町	参11	鼻頭塚古墳（高畑）	古墳	古墳
20	西大坂Ａ遺跡	縄文	散布地	38	湯村山２号古墳	古墳	古墳	259	法泉寺遺跡	中世	散布地	参12	大塚古墳（高畑）	古墳	古墳
21	西大坂Ｂ遺跡	平安	散布地	39	湯村山１号古墳	古墳	古墳	262	八幡前遺跡	古墳	散布地	参13	中之台塚古墳（高畑）	古墳	古墳
22	天神平遺跡	平安	散布地	40	三光寺山遺跡	古墳・平安	祭祀跡	263	和田の城山	中世	城館跡	参14	梅塚古墳（高畑）	古墳	古墳
23	宮裏無名墳（高畑）	古墳	古墳	41	和田無名墳	古墳	古墳	264	法泉寺山の神天台	中世	城館跡	参15	荒神塚古墳（高畑）	古墳	古墳
24	金塚西遺跡	縄文・古墳	散布地	42	緑が丘二丁目遺跡	縄文～平安	集落跡	273	荒川御敷	中世	城館跡				
25	加牟部塚古墳	古墳	古墳	43	緑が丘一丁目遺跡	古墳	集落跡	274	金竹氏屋敷	中世	城館跡				
26	神田遺跡	弥生～平安	散布地	46	村之内遺跡	古墳～平安	散布地	275	横田氏屋敷	中世	城館跡				

第３章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法（第５図）

本調査に先がけ甲府市教育委員会が実施した試掘確認調査では、宅地造成に伴い新設される幅６ｍの道路部分に対し、９か所の試掘トレンチが設定された。このうち北部に設定された３か所の試掘トレンチ（３～５）からは 10 世紀前半の遺構・遺物ないし縄文時代中期の遺物が、南西部に設定された２か所の試掘トレンチ（８・９）からは古墳時代または平安時代の遺物を含む堆積層が確認された。一方、中央部に設定された２か所の試掘トレンチ（６・７）は遺構・遺物は皆無であるとともに、北側に設定された試掘トレンチ５と堆積に連続性が認められなかった。また、南東部の２か所に設定された試掘トレンチ（１・２）からは土師器細片が数点出土したもののローリングによる摩滅が著しいことから、埋蔵文化財が遺存する可能性が否定された。以上のことから、試掘トレンチ６・７付近を除外し北側の１区（約 330㎡）と南西側の２区（約 165㎡）に分けられた約 495㎡が発掘調査による記録保存対象となった。

事業地内で調査と工事を並行して行うことから、事業者・造成工事請負業者（以下工事者）と事前に打合せ、現況の擁壁・農業用水路の撤去や掘削土の運搬を工事者が行うこと、北側の１区から調査に着手すること、調査終了後に即時着工するため埋め戻しは行わないことなどを取り決めた。調査期間中は標識ロープ、コーン・コーンバー、警告灯により通用路や作業エリアを明示し、調査区へはネットフェンスで仮囲いするなど転落防止や視認性向上を図る等の保安対策を講じるほか、工事者の現場責任者と作業工程の打ち合わせを適時行った。このほか、表土掘削等の各種調査工程毎に教育委員会担当者の確認を受け、作業工程の打合せを行った。

重機による表土掘削は、甲府市教育委員会の立会いのもと部分的に深掘りにより堆積土層を観察しつつ掘り下げ、１区については包含層に相当する遺構確認面直上層を約 10㎝残す深さである現地表下 40 ～ 50㎝まで、２区についても包含層を約 10㎝残す深さである現地表下 60 ～ 70㎝まで行った。人力で残る包含層を除去したのち、鋤簾・両刃三角鎌を用い精査し遺構プランの検出を行った。検出した土坑状・小穴状の遺構については、半截し土層の撮影と実測図作成ののち完掘した。また、溝状や竪穴住居状の遺構については、覆土をベルト状に残し、同じく土層の記録ののち完掘した。掘削土は調査区脇に仮置き後、工事者が事業地内低地側に適時運搬し、盛土造成に用いた。

現場での記録は、遺構の土層断面図については原則手書き実測を行い作成した。平面図については SOKKIA 社製トータルステーション「CX-105」・Panasonic 社製屋外型ノートパソコン「TOUGHBOOK CF-19」・cubic 社製遺構実測支援ソフト「遺構くん」による電子平板測量と、SONY 社製ミラーレス一眼カメラ「α 5100 + E 20㎜ F2.8 SEL20F28」・高所撮影用ポール・Agisoft 社製画像処理ソフト「PhotoScan Professionl」による写真測量を併用し作成した。遺構や調査経過の写真は Nikon 社製デジタル一眼レフカメラ「D7100 + AF-S DX NIKKOR 18-105㎜ F3.5-5.6G ED VR」と RICOH 社製デジタル一眼レフカメラ「PENTAX KP + HD PENTAX-DA 15㎜ F4 ED AL Limited」を用い撮影した。また、DJI 社製無人航空機「Phantom 4 Pro」により全体完掘状況および立地環境・景観を撮影した。

整理・報告書作成では、出土遺物の水洗、注記、接合、復元と進め、遺物の実測は原則手描きで行ったが、一部については KEYENCE 社製 3D スキャナ型三次元測定機「VL350 シリーズ」や Agisoft 社製画像処理ソフト「PhotoScan Professionl」を用い作成した三次元モデルを遺物実測に活用した。遺物の写真は Nikon 社製デジタル一眼レフカメラ「D7500 + AF-S NIKKOR 28-300㎜ F3.5-5.6G ED VR」を用い撮影した。また、デジタルトレース、写真補正、挿図・図版作成には adobe 社製「illustratorCC」「PhotoshopCC」を、報告書執筆編集には同じく adobe 社製「InDesignCC」をそれぞれ用いた。

第２節　基本層序（第３～５図）

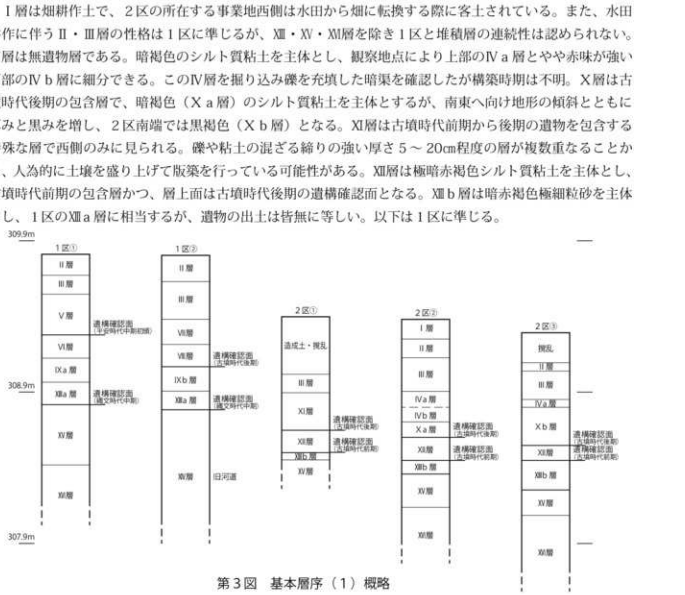
事業地周辺の土地傾向として南東方向へ傾斜をしており、これは荒川の流下方向とほぼ同じ方向である。調査直前の事業地は８面の棚田状水平面で構成されており、事業地内における最大標高差は北西隅（標高309.97m）と南東隅（標高 308.67m）で、水平距離 129.6m、高低差 1.3mを測る（勾配率１%）。

１区

Ⅱ層は水田耕作土で、Ⅲ層は水田床土である。Ⅴ層はにぶい褐色粗粒砂を主体とし、平安時代の包含層に相当するが、遺物はほぼ皆無である。Ⅵ層は 20㎜未満の小礫を含む褐色細粒砂を主体とし、旧河道の筋状の凹地を埋没させる。このⅥ層上面が平安時代中期初頭の遺構確認面となる。Ⅴ・Ⅵ層はともに１区北側にのみ見られる河川性の堆積で、１区中央付近で下層に対し緩やかに乗り上げる。Ⅶ層は１区南側にのみ確認できる無遺物層で、黒褐色粘土を主体とする。Ⅷ層は古墳時代後期の包含層である。黒褐色シルトを主体とする洪水性の堆積で、遺物を含むが炭化物は皆無である。Ⅸ層は無遺物層である。シルトないし極細粒砂の堆積で、色調は１区中央付近を境に北側は赤褐色（Ⅸａ層）、南側は暗褐色（Ⅸｂ層）となる。このうちのⅨｂ層上面が古墳時代後期の遺構確認面である。Ⅻ層は縄文時代中期の包含層である。極暗赤褐色シルト（Ⅹ Ⅲａ層）主体の堆積で、遺物を含むが炭化物はほぼ皆無である。ⅩⅣ層は旧河道の埋土である。黒褐色の粘土と粗粒砂の混合土で、径 10 ～ 80㎝の石を多量に含む。ⅩⅤ層は地山である。径 10 ～ 100㎜の礫を含む褐色極細粒砂を主体とし、酸化鉄分が斑に見られる。以下は地山と色調を同じくする砂礫層（ⅩⅥ層）である。

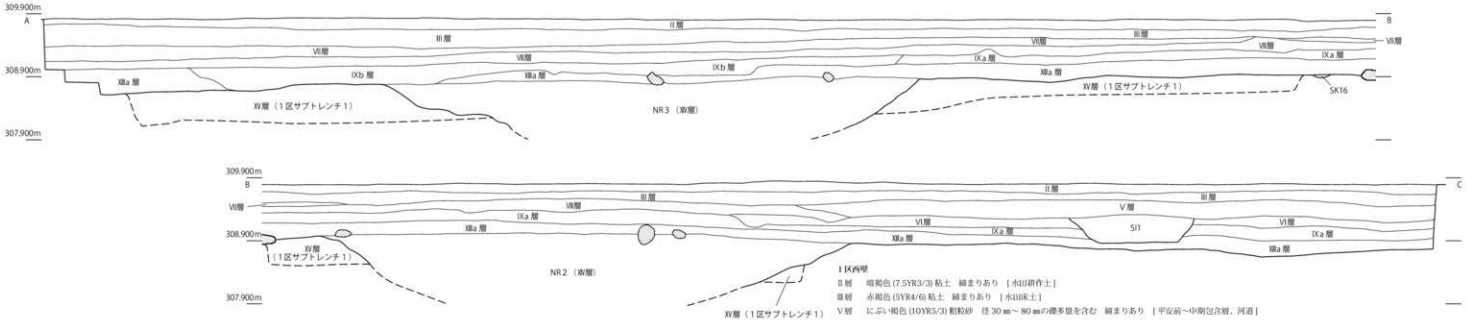
２区

Ⅰ層は畑耕作土で、２区の所在する事業地西側は水田から畑に転換する際に客土されている。また、水田耕作に伴うⅡ・Ⅲ層の性格は１区に準じるが、Ⅻ・ⅩⅤ・ⅩⅥ層を除き１区と堆積層の連続性は認められない。Ⅳ層は無遺物層である。暗褐色のシルト質粘土を主体とし、観察地点により上部のⅣａ層とやや赤味が強い下部のⅣｂ層に細分できる。このⅣ層を掘り込み礫を充填した暗渠を確認したが構築時期は不明。Ⅹ層は古墳時代後期の包含層で、暗褐色（Ⅹａ層）のシルト質粘土を主体とするが、南東へ向け地形の傾斜とともに厚みと黒みを増し、２区南端では黒褐色（Ⅹｂ層）となる。ⅩⅠ層は古墳時代前期から後期の遺物を包含する特殊な層で西側のみに見られる。礫や粘土の混ざる締りの強い厚さ５～ 20㎝程度の層が複数重なることから、人為的に土壌を盛り上げて版築を行っている可能性がある。ⅩⅡ層は極暗赤褐色シルト質粘土を主体とし、古墳時代前期の包含層かつ、層上面は古墳時代後期の遺構確認面となる。ⅩⅢｂ層は暗赤褐色極細粒砂を主体とし、１区のⅩⅢａ層に相当するが、遺物の出土は皆無に等しい。以下は１区に準じる。



第３図　基本層序（１）概略

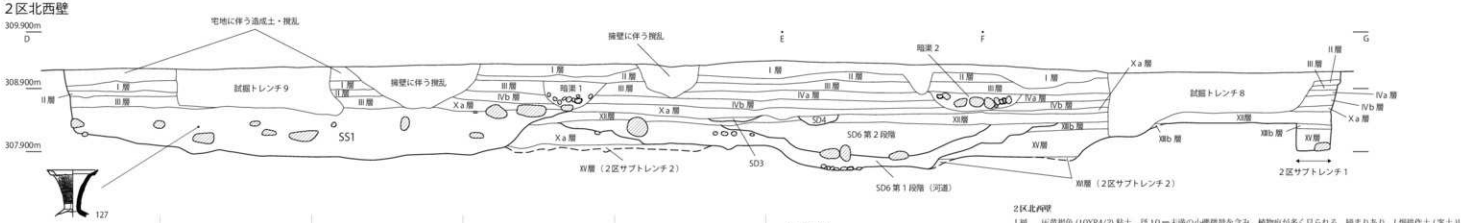
1区西壁

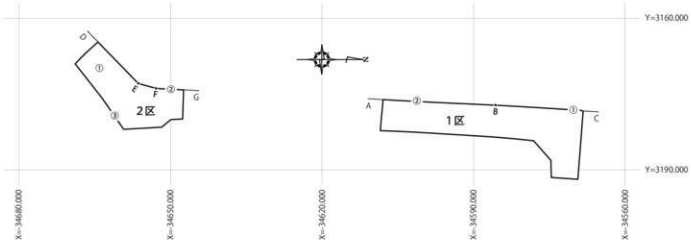


1区西壁

II層　暗褐色 (7.5YR3/3) 粘土　締まりあり　[水田耕作土]
III層　赤褐色 (5YR4/6) 粘土　締まりあり　[水田床土]
V層　にぶい褐色 (10YR5/3) 粗粒砂　径 30 mm～ 80 mmの礫多量を含む　締まりあり　[平安前～中期包含層、河道]
VI層　褐色 (7.5YR4/4) 細粒砂　径 20 mm未満の小礫少量を含む　締まりあり　[河道]
VII層　黒褐色 (10YR3/2) 粘土　炭化物極々微量・褐色 (10YR4/6) ブロックを含み、極暗赤褐色 (5YR2/3) シルトが極微量混じる　締まりあり
VIII層　黒褐色 (5YR2/3) シルト　径 5 mm未満の褐色 (10YR4/6) ブロック多量・径 5 mm未満の小礫微量を含む　締まりあり　[古墳後期包含層]
IXa層　赤褐色 (5YR4/6) 極細粒砂　極暗赤褐色 (5YR2/3) シルトが斑に混じる　締まりあり
IXb層　暗褐色 (10YR3/4) シルト　径 5 ～ 20 mmの小礫を含み、赤褐色 (5YR4/6) シルト・極暗赤褐色 (5YR2/3) シルトが斑に混じる　締まりあり
XIIa層　極暗赤褐色 (5YR2/3) シルト　にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルトが斑・褐色 (10YR4/4) 細粒砂がブロック状に混じる　締まりあり　[縄文中期包含層]
XV層　黒褐色 (10YR3/1) 粘土と粗粒砂の混合　酸化鉄分・径 10 ～ 80 cmの石多量を含む　締まり不均等　[河道]
XV層　褐色 (10YR4/4) 極細粒砂　径 10 ～ 100 mmの礫多量を含む　締まりあり　[地山]

2区北西壁



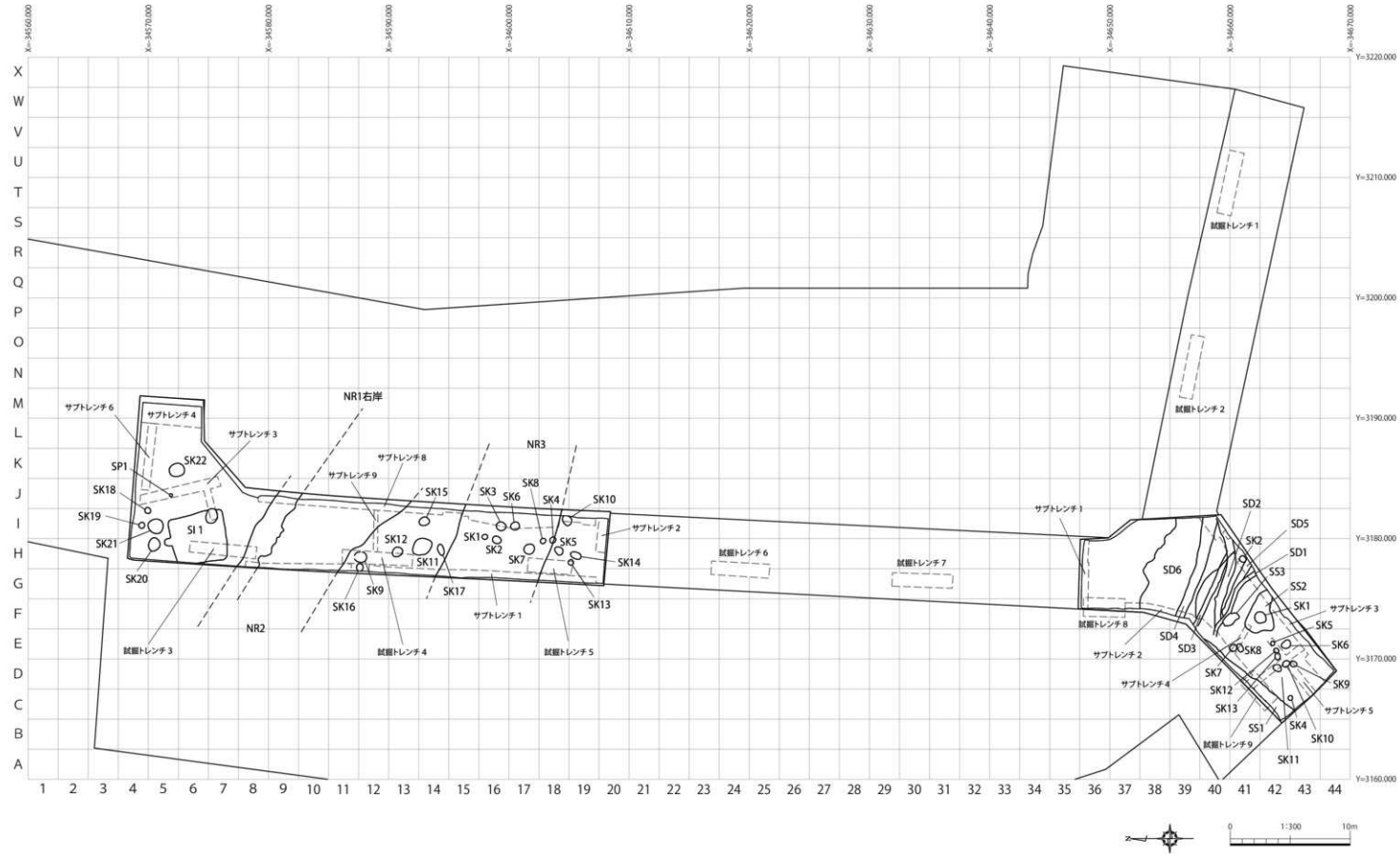


2区北西壁

I層　灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土　径 10 mm未満の小礫微量を含み、植物痕が多く見られる　締まりあり　[畑耕作土 (客土)]
II層　褐色 (7.5YR4/3) 粘土　径 4 mm未満の小礫極微量を含み、極粗粒砂が微量混じる　締まりあり　[水田耕作土]
III層　赤褐色 (5YR4/6) 粘土　径 10 mm未満の小礫極微量を含む　締まりあり　[水田床土]
IVa層　暗褐色 (10YR3/4) シルト質粘土　褐色 (10YR4/6) 粒・径 10 mm未満の小礫極微量を含む　締まりあり
IVb層　暗褐色 (7.5YR3/3) シルト質粘土　褐色 (10YR4/6) 粒・径 10 mm未満の小礫極微量を含む　締まりあり
Xa層　暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土　褐色 (10YR4/6) 粒・中粒砂少量を含む　締まりあり　[古墳中～後期包含層]
XI層　極暗赤褐色 (5YR2/3) シルト質粘土　褐色 (10YR4/6) 粒多量を含む　締まりあり　[古墳前期包含層]
XIIb層　暗赤褐色 (5YR3/6) 極細粒砂　粗粒砂微量を含む　締まりあり
XV層　褐色 (10YR4/4) 極細粒砂　径 10 ～ 100 mmの礫多量を含む　締まりあり　[地山]
XV層　褐色 (10YR4/4) 細粒砂　径 20 ～ 300 mmの礫が大半を占める　締まりあり　[地山 (砂礫層)]

0　1:60　2m

第4図　基本層序（2）1区西壁、2区北西壁


X=34560.000
X=34570.000
X=34580.000
X=34590.000
X=34600.000
X=34610.000
X=34620.000
X=34630.000
X=34640.000
X=34650.000
X=34660.000
X=34670.000
Y=3220.000
Y=3210.000
Y=3200.000
Y=3190.000
Y=3180.000
Y=3170.000
Y=3160.000
X W V U T S R Q P O N M L K J I H G F E D C B A
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44
試掘トレンチ1
試掘トレンチ2
試掘トレンチ3
試掘トレンチ4
試掘トレンチ5
試掘トレンチ6
試掘トレンチ7
試掘トレンチ8
試掘トレンチ9
サブトレンチ1
サブトレンチ2
サブトレンチ3
サブトレンチ4
サブトレンチ5
サブトレンチ6
サブトレンチ8
サブトレンチ9
NR1右岸
NR2
NR3
SP1
SI1
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
SK22
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SS1
SS2
SS3
0
1:300
10m

第５図　遺構配置図

第４章　調査の成果

調査では１区・２区ともに２面の遺構面を確認した。１区・２区合わせた調査区全体では遺構として竪穴住居１基、石列状の集石３条、溝跡６条、土坑 34 基、小穴１基を検出するとともに４条の河道を確認している。遺物としては縄文土器、土製品、石器、土師器、須恵器、甲斐型土器が出土しており総量はプラスチックコンテナ（386 ㎜× 590 ㎜× 207 ㎜）にして９箱分に相当する。遺物の年代・分類は『山梨県史　資料編２原始・古代２（第２章　山梨県の考古学編年）』（県史編年）を基準にしている。

第１節　１区の調査

事業地北側に所在する１区では、遺構として竪穴住居１基、土坑 22 基、小穴１基を検出するとともに、３条の河道を確認した。

第１遺構面では北側で竪穴住居１基と河道１条、南側で土坑８基を検出したが、中央付近では遺構は確認できず、遺物も皆無に等しい。検出地点により時期的に数世紀の隔たりがあるが、平安時代の遺構・遺物は調査区北端付近の埋没河道直上からのみの検出で南側の古墳時代遺構面とは堆積層に連続性が見られないことから、古代と一括して第１遺構面と扱う。遺物は甲斐型土器を含む土師器が主体である。県内において須恵器の流通が確実な時期に属するが、１区では須恵器は一切出土していない。

第２遺構面では調査区を横断する２条の河道を確認し、これら河道を避ける３つ区域から土坑 12 基と小穴１基を検出した。遺物は縄文土器を主体としわずかながら土製品・石器も出土している。遺物の出土は主に河道からで、遺物を伴う遺構は少数であった。

第１項　第１遺構面（第６図）

ＳＩ１（第７・22・23 図、図版１・10）

［位置・重複］グリッドＨ・Ｉ－５～７。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状はＮ－ 12°－Ｗを主軸とする隅丸長方形で、主軸 4.61ｍ、交差軸 4.09ｍを測る。断面形状は皿形で、深さ 42㎝を測る。また、北壁に長さ 59㎝を測る突出部を有する。

［検出状況・埋土］検出はＶ層直下のⅥ層上面である。住居隅の一部が西壁調査区外に延伸するが、ほぼ全容を検出した。埋没河道上に構築され、床面は砂層を掘り固めたのみの簡素なものである。東壁の南東コーナー付近にカマドを有し、カマド北脇に棚状の低い段が付属する。北壁の突出部の性格は不明だが、焼土・炭化物が確認できないためカマドの可能性は否定できる。埋土は細粒砂とシルトを主体とし、礫を多く含む。礫や遺物は低地側の東南コーナー付近、特に住居の東壁・南壁沿いに押し付けられるように集中する様から、住居は洪水被害により埋没した可能性が高い。

［出土遺物］土師器 11 点（報告番号１～ 11）を図示した。１～５は坏、６は皿、７～ 11 は甕である。１は玉縁状口縁・放射状暗文の甲斐型坏で、外面に「平」と墨書される。２は口縁がやや玉縁化した甲斐型坏で暗文は放射状である。３は玉縁状口縁・放射状暗文の甲斐型坏。４は玉縁状口縁・同心円状暗文の甲斐型坏で、内面には黒色処理が施され、外面に「平」と墨書される。５の底部は回転糸切である。６は甲斐型皿で、回転糸切の底部に「平」と墨書される。７～ 11 は内面横ハケ、外面縦ハケの甲斐型長胴甕で、10 は底部に木葉痕が認められる。

［時期］検出状況や出土遺物より平安時代中期初頭、９世紀後半から 10 世紀前半と推定している。

ＮＲ１（第４・６図、図版１）

［位置・重複］グリッドＧ～Ｊ－８～ 13。

［形状・規模］Ｎ－ 65°－Ｗを主軸とすると想定される河道で、調査区内では最大幅 15.4ｍ、最大深 76㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅤ層直下で、Ⅵ層により埋没する。河床は北側調査区外へ傾斜することから、河道中心部は調査区外と想定され、幅は30m以上の可能性がある。

［出土遺物］河道規模に対して遺物出土量は極めて少なく、土師器細片が出土したが図化し得るものはない。

［時期］時期の判定できる遺物はないが、検出層位から平安時代初頭頃には埋没していたと考えられる。また、古墳時代の遺構・遺物はＮＲ１右岸の１区南端付近のからのみの検出であるため、古墳時代には河道として機能していた可能性がある。

ＳＫ１（第８図、図版２）

［位置・重複］グリッドＩ－16。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状はほぼ円形で、長軸47㎝、短軸42㎝を測る。断面形状は椀形で、深さ14㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅧ層直下のⅨｂ層上面である。埋土は黒褐色の砂質土が主体で、小礫を含む。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

ＳＫ２（第８図、図版２）

［位置・重複］グリッドＨ・Ｉ－16。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は楕円形で、長軸74㎝、短軸60㎝を測る。断面形状は皿形で、深さ18㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅧ層直下のⅨｂ層上面である。埋土は黒褐色中粒砂主体である。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

ＳＫ３（第８図、図版２）

［位置・重複］グリッドＩ－16。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は楕円形で、長軸83㎝、短軸73㎝を測る。断面形状は舟形で、深さ18㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅧ層直下のⅨｂ層上面である。埋土は黒褐色中粒砂主体で、底部に径約8㎝の礫が見られる。

［出土遺物・時期］遺物の出土は無いが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

ＳＫ４（第８図、図版２）

［位置・重複］グリッドＨ・Ｉ－18。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は楕円形で、長軸53㎝、短軸47㎝を測る。断面形状は舟形で、深さ９㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅧ層直下のⅨｂ層上面である。埋土は黒褐色中粒砂主体である。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

ＳＫ５（第８・23図、図版２・10）

［位置・重複］グリッドＨ－18。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は不整楕円形で、長軸76㎝、短軸62㎝を測る。断面形状は皿形で、深さ14㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅧ層直下のⅨｂ層上面である。埋土は褐灰色粗粒砂主体で、黒褐色細粒砂が混じる。

［出土遺物］図示した黒曜石（12）のみである。12は石錐と考えられるが、錐部先端は欠損している。

［時期］遺物は黒曜石のみであるが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

ＳＫ６（第８・23図、図版２・10）

［位置・重複］グリッドＩ－17。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状はほぼ円形で、長軸73㎝、短軸65㎝を測る。断面形状は椀形で、深さ29㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅧ層直下のⅨｂ層上面である。埋土は黒褐色極細粒砂主体で、礫を含む。

［出土遺物］図示した土師器（13）のみである。13は甲斐型坏である。

［時期］甲斐型土器が出土しているが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

ＳＫ７（第８・23図、図版２・10）

［位置・重複］グリッドＨ－17。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状はほぼ円形で、長軸92㎝、短軸83㎝を測る。断面形状は皿形で、深さ18㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅧ層直下のⅨｂ層上面である。埋土は褐灰色粗粒砂主体で、小礫を含み、極暗赤褐色シルトが混じる。

［出土遺物］図示した縄文土器（14）のみである。14は曽利Ⅱ式の長胴形深鉢か。

［時期］縄文土器が出土しているが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

ＳＫ８（第８図、図版２）

［位置・重複］グリッドＨ－18。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状はほぼ円形で、長軸48㎝、短軸42㎝を測る。断面形状は皿形で、深さ７㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅧ層直下のⅨｂ層上面である。埋土は褐灰色粗粒砂主体で、小礫を含む。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

遺構外出土遺物（第23図、図版10）

第１遺構面の包含層に相当する堆積層のうち、１区中央付近より南側にのみ見られるⅧ層より古墳時代後期の土師器がわずかに出土したが、北側では遺物の出土は皆無である。計５点を図示した。

15～17は甕の口縁部で、15･16は外面は斜めハケ調整、内面はナデ調整である。17は外面はナデ調整、内面は横ハケ・斜めハケ調整である。18は甕の体部で、内面ナデ調整である。19は甕の底部で、内外面ともにナデ調整であり、底部には網代痕が認められる。

第２項　第２遺構面（第９・10図）

ＳＫ９（埋甕）（第11・24・26図、巻頭図版１、図版３・11）

［位置・重複］グリッドＨ－11・12。ＮＲ２とＮＲ３に挟まれる微高地に位置する。重複する遺構はない。

［形状・規模］堆積土層断面図化部分では、幅84㎝、深さ69㎝を測る断面Ｕ字形の掘方である。

［検出状況・埋土］検出はⅩⅢａ層直下のⅩⅤ層上面である。遺構底部は砂礫層（ⅩⅡ層）に達し、掘方内の礫は除去されている。試掘トレンチ３の深掘り部分と重複するため正確な値は計測できていないが、確認できる無礫範囲から平面形状は楕円形が想定され、南側遺構上端と北側無礫範囲端の間は1.04ｍを測る。埋甕は曽利Ⅱ式のＸ字状把手付大甕が正位で埋納され、底部に穿孔は認められない。埋甕内埋土は、上層の暗褐色細粒砂と下層の極暗赤褐色シルトに大別できる。掘方埋土は、暗褐色極細粒砂を主体とし、下層に向かうにつれ黒みを帯び、埋甕底部付近にやや大ぶりの土器片が集中する。埋甕口縁部の露出はシルト質粘土（第１層）除去後となることから、遺構全体はこの第１層によりパックされるかたちとなる。また、埋甕下半部や口縁部は土圧による圧壊で上下方向に潰れており検出現位置では器高約60㎝を測ったが、接合復元後の埋甕器高の実測値は76.5㎝と遺構の深さより大きい。Ⅱ～ⅩⅢａ層が堆積する過程で、土圧により遺構全体が圧縮されていると考えられる。埋甕内埋土の大部分を採取し篩による選別を行った結果、最下層にあたる第５層から凝灰岩製の小玉を検出した。当遺構は埋葬または祭祀に関わる可能性がある。

［出土遺物］計11点を図示した。20-1は埋甕、20-2は石製小玉である。21～28は曽利式の深鉢、29は有孔鍔付土器である。

［時期］検出層位や状況、出土遺物より縄文時代中期後半である。

ＳＫ10（第11図、図版３）

［位置・重複］グリッドＩ－18・19。ＮＲ３右岸に位置する。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は楕円形が想定され、長軸92㎝以上、短軸71㎝を測る。断面形状は皿形が想定され、深さ21㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅩⅢａ層直下のⅩⅤ層上面である。一部は東壁調査区外に延伸するが、ほぼ全容を検出した。埋土は小礫を含む黒褐色極細粒砂を主体とする。

［出土遺物］縄文土器小片５点が出土したが、図示し得るものはない。

［時期］検出層位や出土遺物より縄文時代中期と言える。

ＳＫ 11（第 11 図、図版３）

［位置・重複］グリッドＨ－ 13・14。ＮＲ２とＮＲ３に挟まれる微高地に位置する。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は不整楕円形で、長軸 1.75m、短軸 1.38m を測る。断面形状は皿形で、深さ 20 ㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅩⅢａ層直下のⅩⅤ層上面である。埋土は上層では極暗褐色極細粒砂が、下層では暗褐色シルトが主体となり、径 5㎜未満の小礫を含む。

［出土遺物］縄文土器小片３点が出土したが、図示し得るものはない。

［時期］検出層位や出土遺物より縄文時代中期と言える。

ＳＫ 12（第 11 図、図版４）

［位置・重複］グリッドＨ－ 13。ＮＲ２とＮＲ３に挟まれる微高地に位置する。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は楕円形で、長軸 92㎝、短軸 78㎝を測る。断面形状は皿形で、深さ 21㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅩⅢａ層直下のⅩⅤ層上面である。埋土は極暗褐色極細粒砂を主体とし、径 10㎜未満の礫と酸化鉄分を含む。

［出土遺物・時期］遺物の出土は無いが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

ＳＫ 13（第 12 図、図版４）

［位置・重複］グリッドＨ－ 19。ＮＲ３右岸に位置する。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は不整円形で長軸 47㎝、短軸 44㎝を測る。断面形状は皿形で、深さ 9㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅩⅢａ層直下のⅩⅤ層上面である。埋土は径５㎜未満の小礫を含む黒褐色極細粒砂を主体とする。

［出土遺物・時期］遺物の出土は無いが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

ＳＫ 14（第 12・25 図、図版４・12）

［位置・重複］グリッドＨ－ 19。ＮＲ３右岸に位置する。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は楕円形で、長軸 92㎝、短軸 55㎝を測る。断面形状は皿形で、深さ 18㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅩⅢａ層直下のⅩⅤ層上面である。極暗褐色極細粒砂を主体とし、径 20㎜未満の小礫を含む。また、底部に拳大の礫が複数見られる。

［出土遺物］計２点を図示した。30 は曽利Ⅱ式の深鉢、31 は縄文時代中期の土器だが型式は不明。

［時期］検出層位や出土遺物より縄文時代中期後半である。

ＳＫ 15（第 12 図、図版４）

［位置・重複］グリッドＩ－ 14。ＮＲ２とＮＲ３に挟まれる微高地に位置する。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は楕円形で、長軸 88㎝、短軸 71㎝を測る。断面形状は皿形で、深さ 11㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅩⅢａ層直下のⅩⅤ層上面である。埋土は極暗褐色極細粒砂を主体とし、にぶい黄褐色シルトがブロック状に混じる。また、遺構内縁には酸化鉄分を含むオリーブ褐色シルトが、底部には拳大の礫が見られる。

［出土遺物］縄文土器１点が出土したが、図示し得るものではない。

［時期］検出層位や出土遺物より縄文時代中期と言える。

ＳＫ 16（第 12・26 図、図版４・12）

［位置・重複］グリッドＧ－ 11・12。ＮＲ２とＮＲ３に挟まれる微高地に位置する。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は楕円形が想定され、長軸 62㎝以上、短軸 55㎝を測る。断面形状は擂鉢形で、深さ 21㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅩⅢａ層直下のⅩⅤ層上面である。一部は西壁調査区外に延伸するが、ほぼ全容を確認した。埋土は極暗褐色極細粒砂を主体とし、径 10㎜未満の小礫を含む。

［出土遺物］図示した 32 はミニチュア土器である。

［時期］検出層位や出土遺物より縄文時代中期である。

ＳＫ 17（第 12 図、図版４）

［位置・重複］グリッドＨ－ 14。ＮＲ２とＮＲ３に挟まれる微高地に位置する。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は楕円形で、長軸 97㎝、短軸 51㎝を測る。断面形状は皿形で、深さ 12㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅩⅢａ層直下のⅩⅤ層上面である。埋土は極暗褐色極細粒砂を主体とし、径 20㎜未満の小礫を含む。

［出土遺物・時期］遺物の出土は無いが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

ＳＫ 18（第 12 図、図版４）

［位置・重複］グリッドＩ・Ｊ－４・５。ＮＲ２左岸に位置する。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は不整円形で、長軸 54㎝、短軸 49㎝を測る。断面形状はＶ字形で、深さ 18㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅩⅢａ層直下のⅩⅤ層上面である。埋土は上層はにぶい黄褐色シルトが混じる極暗褐色シルトを主体とし、下層は黒褐色シルトが混じる黄褐色シルトを主体とする。

［出土遺物・時期］遺物の出土は無いが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

ＳＫ 19（第 12 図、図版４）

［位置・重複］グリッドＩ－４。ＮＲ２左岸に位置する。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は円形で、長軸 52㎝、短軸 49㎝を測る。断面形状は皿形で、深さ 13㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅩⅢａ層直下のⅩⅤ層上面である。埋土はにぶい黄褐色シルトを主体とし、酸化鉄分をわずかに含む。

［出土遺物・時期］遺物の出土は無いが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

ＳＫ 20（第 12 図、図版５）

［位置・重複］グリッドＨ－５。ＮＲ２左岸に位置する。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は楕円形で、長軸 1.15m、短軸 95㎝を測る。断面形状はおおむね皿形だが一部が窪み、深さ 16㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅩⅢａ層直下のⅩⅤ層上面である。埋土は黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色シルトがブロック状に混じる。また窪みには拳大の礫が見られる。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

ＳＫ 21（第 12 図、図版５）

［位置・重複］グリッドＩ－５。ＮＲ２左岸に位置する。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は円形で長軸 1.27m、短軸 1.21mを測る。断面形状はおおむね皿形だが中央がやや窪み、深さ 18㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅩⅢａ層直下のⅩⅤ層上面である。埋土は黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色シルトがブロック状に混じる。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

ＳＫ 22（第 12 図、図版５）

［位置・重複］グリッドＫ－５・６。ＮＲ２左岸に位置する。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は楕円形で、長軸 1.27m、短軸 1.11mを測る。断面形状は皿形で、深さ 15㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅩⅢａ層直下のⅩⅤ層上面である。黒褐色シルトを主体とし、上層ににぶい黄褐色シルトがブロック状に混じる。また径 10㎝～ 20㎝の礫が複数見られる。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

ＳＰ１（第 12 図、図版５）

［位置・重複］グリッドＪ－５。ＮＲ２左岸に位置する。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は不整円形で、長軸 27㎝、短軸 24㎝を測る。断面形状はＶ字形で、深さ 17㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅫa 層直下のⅩⅤ層上面である。埋土は黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色シルトがブロック状に混じる。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

ＮＲ２（第４・10・26・27 図、図版５・12・13）

［位置・重複］グリッドＧ～Ｊ－８～ 13。

［形状・規模］Ｎ－ 60°－Ｗを主軸とする河道で、最大幅 8.2ｍを測る。深さは 1.1ｍ以上を測るが、河床は未確認である。

［検出状況・埋土］検出はⅫa 層直下で、調査区を斜めに横断する。河道は拳～人胴大の礫を多量に含む黒褐色の粘土と粗粒砂の混合土により埋没する。

［出土遺物］計 21 点（33 ～ 53）を図示した。33 は縄文時代前期後半の諸磯式の深鉢である。34 ～ 47 は縄文時代中期後半の深鉢で、46･47 の底部には網代痕が認められる。48 は台付土器、49 は両耳壺である。50 は打製石斧、51 は打製石斧の破片、52・53 は磨＋敲石である。

［時期］出土遺物の主体は縄文時代中期後半の曽利式だが、前期後半の諸磯式が出土しているためＮＲ３より一段階古い可能性がある。

ＮＲ３（第４・10・28 ～ 30 図、図版５・13 ～ 15）

［位置・重複］グリッドＧ～Ｉ－ 15 ～ 18。

［形状・規模］Ｎ－ 77°－Ｗを主軸とする河道で、最大幅 7.9ｍを測る。深さは 1.2ｍ以上を測るが、河床は未確認である。

［検出状況・埋土］検出はⅫa 層直下で、調査区を横断する。河道はⅩⅣ層により埋没する。

［出土遺物］計 40 点（54 ～ 93）を図示した。54 は縄文時代後期前葉の堀之内２式古段階の朝顔形深鉢である。55 ～ 89 は縄文時代中期後半の土器でこのうち 55 ～ 85 は深鉢、86 は浅鉢、87 ～ 89 はＸ字状の把手、90 ～ 93 は打製石斧である。

［時期］出土遺物の主体は縄文時代中期後半の曽利式だが、後期前葉の堀之内式が出土しているためＮＲ２より一段階新しい可能性がある。

遺構外出土遺物（第 13 図、図版 15・16）

第２遺構面の包含層から出土した遺物は縄文時代中期後半の曽利Ⅱ～Ⅲ式が主体で、計 28 点（94 ～ 121）を図示した。94 ～ 98 は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式の深鉢である。99 ～ 117 は縄文時代中期後半の土器でこのうち 99 ～ 115 は深鉢、116 は浅鉢、117 は鉢である。118 は縄文時代晩期の氷Ⅰ式の埦か。119 は打製石斧、120 は磨製石斧、121 は黒曜石製の剥片石器である。

第２節　２区の調査

事業地南西側に所在する２区では、遺構として集石遺構３基、土坑12基、溝６条を検出するとともに河道１条を確認した。

第１遺構面では集石遺構３基、土坑２基、溝５条を検出した。遺構検出面は北から南への傾斜と、西から東への傾斜が合わさる調査区中央付近が最も標高が低くなる。このうち西から東への傾斜はグリッドＥ・Ｆ－41付近で一時的に強くなる。溝跡は２区中央付近の低地のみでの検出である。遺物は土師器が主体であるが、須恵器も出土している。須恵器の出土は１区との明確な相違点である。

第２遺構面では、土坑10基と溝１条を検出した。地形の傾斜は第１遺構面と同様の傾向であり、土坑は西側の高地からの検出である。溝跡は中央の低地での検出で、砂質土により埋没した河道を掘り込み構築される。遺物は土師器が主体で、わずかに縄文土器も出土している。

第１項　第１遺構面（第13・14図）

ＳＳ１（第15・33図、図版６・16）

［位置・重複］グリッドＣ－42～Ｅ－40。重複する遺構はない。

［形状・規模］拳大～人頭大の礫から成る長さ5.62mの石列状の礫群を、長さ9.38m以上、幅91cm以上を測る溝状の掘り込みの立ち上がりに沿って検出した。溝の断面形状は緩やかなＶ字形ないしＵ字形が想定され、深さ63cm以上を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅢ層直下のⅫ層上面である。底部が確認できないことから、溝状の遺構主体部は調査区外に所在し、礫群も同様に延伸すると考えられる。埋土は黒褐色シルト質粘土を主体とし、極暗赤褐色シルトが混じるが、確認できた最下層部付近は粘性が強い。溝状の掘り込みに流水の形跡が見られず、礫の並びがやや弧を描くことから、周溝のような単体で完結する溝の可能性がある。

［出土遺物］土師器２点（122・123）、須恵器４点（124～127）の計６点を図示した。122は蓋坏の身、123は高坏である。124～126は甕で、127は壺または鉢か。

［時期］検出層位や出土遺物より古墳時代後期である。

ＳＳ２（第15図、図版６）

［位置・重複］グリッドＥ～Ｇ－41・42。ＳＫ１に先行する。

［形状・規模］拳大～人頭大の礫から成る長さ1.78mの石列で、Ｎ－77°－Ｗを主軸とする。掘方の平面形状は楕円に近い不整形の溝状で、長さ3.69m以上、幅2.23mを測る。断面形状は皿形で、深さ21cmを測り、石列は遺構の南側立ち上がりに沿う。

［検出状況・埋土］検出はⅪ層直下Ⅻ層上面である。南東壁調査区外に延伸する。埋土は暗褐色シルト・褐灰色シルト・黒褐色シルトがマーブル状に堆積する。

［出土遺物］土師器小片が１点出土したが、図化し得るものではない。

［時期］検出層位や出土遺物より古墳時代後期と考えたい。

ＳＳ３（第15・33図、図版６・16）

［位置・重複］グリッドＦ－40・41。ＳＤ１に後続する。

［形状・規模］長さ1.41m、幅82cm、深さ５cmを測る窪地に拳大～人頭大の礫が、やや帯状に集中する。

［検出状況・埋土］検出はⅪ層直下のⅫ層上面である。窪地部分の埋土は褐灰色粗粒砂である。

［出土遺物］土師器１点（128）、須恵器２点（129・130）、灰釉陶器１点（131）の計４点を図示した。128～130は甕、131はロクロ成型の椀である。

［時期］検出層位や出土遺物より古墳時代後期と考えたいが、灰釉陶器が出土しているため平安時代の可能性もある。

ＳＫ１（第 15 図、図版６）

［位置・重複］グリッドＦ－ 41・42。ＳＳ２に後続する。

［形状・規模］平面形状は不整円形で、長軸 1.02m、短軸 93cmを測る。断面形状は皿形で、深さ 20cmを測る。

［検出状況・埋土］検出はⅪ層直下のＳＳ２埋土上面である。埋土は暗褐色シルト質粘土を主体とする。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位とＳＳ２との先後関係より古墳時代後期以降と言え、ＳＳ３と同時期の可能性もある。

ＳＫ２（第 16 図、図版７）

［位置・重複］グリッドＨ－ 41。

［形状・規模］平面形状は楕円形で、長軸 57cm、短軸 42cmを測る。断面形状は皿形で、深さ６cmを測る。

［検出状況・埋土］検出はＸｂ層直下のⅫ層上面である。埋土は黒褐色シルト質粘土を主体とする。

［出土遺物］土師器細片１点が出土したが、図化し得るものではない。

［時期］検出層位や出土遺物より古墳時代後期と考えたい。

ＳＫ３（欠番）

ＳＤ１（第 16 図、図版７）

［位置・重複］グリッドＥ－ 40 ～ Ｇ－ 41。ＳＳ３に先行し、ＳＤ２・５に後続する。

［形状・規模］Ｎ－ 70°－Ｗを主軸とする溝跡で、長さ 5.8m以上、南東壁付近で最大幅 40cmを測る。断面形状は擂鉢形で、深さ 16cmを測る。

［検出状況・埋土］検出はＸｂ層直下のⅫ層上面である。両端が調査区外に延伸し、グリッドＦ－ 40 とグリッドＧ－ 41 の２か所で屈曲する。埋土は中粒砂の混じる暗褐色シルト質粘土を主体とし、最下層は黒褐色シルト質粘土である。

［出土遺物］土師器９点と須恵器１点が出土したが、いずれも細片で図化し得るものはない。

［時期］検出層位や出土遺物より古墳時代後期と考えたい。

ＳＤ２（第 16・33 図、図版７・17）

［位置・重複］グリッドＦ－ 40 ～ Ｉ－ 40。ＳＤ１に先行し、ＳＤ３に後続する。

［形状・規模］Ｎ－ 73°－Ｗを主軸とする溝跡で、長さ９m以上、ＳＤ３との交差部付近で最大幅 74cmを測る。断面形状は皿形で、深さ 10cmを測る。

［検出状況・埋土］検出はＸｂ層直下のⅫ層上面である。両端が調査区外に延伸する。グリッドＨ－ 41 で北へ 30°進路を変える。埋土はにぶい黄褐色中粒砂を主体とし、暗褐色シルト粘土が混じる。

［出土遺物］土師器２点（132・133）、須恵器１点（134）の計３点を図示した。132 は台付甕の脚台部。133 は直口壺で外面にミガキが施される。134 は甕で内面は扇状の当具痕、外面は格子目のタタキ目である。

［時期］台付甕が出土しているが、検出層位や須恵器より古墳時代後期と考えられる。

ＳＤ３（第 16 図、図版７）

［位置・重複］グリッドＧ－ 39 ～ Ｈ－ 40。ＳＤ２に先行する。

［形状・規模］Ｎ－ 65°－Ｗを主軸とする溝跡で、長さ 6.5m以上、中央付近で最大幅 48cmを測る。断面形状は皿形で、深さ６cmを測る。

［検出状況・埋土］検出はＸｂ層直下のⅫ層上面で、両端が調査区外に延伸する。埋土はにぶい黄褐色中粒砂を主体とし、底部には黒褐色シルト質粘土が堆積する。

［出土遺物］土師器微細片５点が出土したが、図化し得るものはない。。

［時期］検出層位や出土遺物より古墳時代後期である。

ＳＤ４（第 16・34 図、図版７・17）

［位置・重複］グリッドＧ－ 39 ～ Ｉ－ 40。ＳＤ２に先行する。

［形状・規模］N－68°－Wを主軸とする溝跡で、長さ8.7m以上、南東壁付近で最大幅1.22mを測る。断面形状は皿形で、深さ13cmを測る。

［検出状況・埋土］検出はＸｂ層直下のⅫ層上面で、両端が調査区外に延伸する。埋土は中粒砂の混じる暗褐色シルト質粘土を主体とし、最下層は黒褐色シルト質粘土である。

［出土遺物］土師器１点（135）、須恵器２点（136・137）の計３点を図示した。135は甕、136は蓋坏の蓋、137は甕である。

［時期］検出層位や出土遺物より古墳時代後期である。

ＳＤ５（第16・34図、図版７・17）

［位置・重複］グリッドＦ－40～Ｈ－41。ＳＤ１に先行する。

［形状・規模］N－67°－Wを主軸とする溝跡で、長さ5m以上、南東壁付近で最大幅63cmを測る。断面形状は皿形で、深さ6cmを測る。

［検出状況・埋土］検出はＸｂ層直下のⅫ層上面で、南東調査区外へ延伸する。埋土はにぶい黄褐色極粗粒砂を主体とし、下層は褐灰色の粗粒砂・シルトが堆積する。

［出土遺物］土師器１点（138）、須恵器２点（139・140）を図示した。138はＳ字状口縁台付甕（以下Ｓ字甕）Ｄ類、139は坏、140は須恵器甕である。

［時期］Ｓ字甕が出土しているが、検出層位やＳＤ１との先後関係、須恵器より古墳時代後期と考えられる。

遺構外出土遺物（第34～36図、図版17・18）

第１遺構面の包含層から出土した遺物のうち縄文土器１点、土師器32点（142～173）、須恵器６点（174～179）の計39点を図示した。141は縄文時代後期前葉の堀之内２式の深鉢である。142は埦または鉢、143は小型丸底鉢、144は器台である。145～152は高坏で、このうち148～150には脚部の透孔が認められる。153～165はＳ字甕で、166は甕、167～170は壺、171は小壺、172・173は手捏ね土器の小壺である。174～178は甕、179は壺である。

東側に見られる包含層Ｘａ・Ｘｂ層からの出土遺物は、古墳時代中期から後期の土師器・須恵器であるため遺構の検出層位と整合性がある。しかしながら、西側にのみ見られるⅪ層はＳ字甕や須恵器といった古墳時代前期から後期にかけての多様な遺物が出土し、遺構出土遺物より包含層出土遺物のほうがより古いという逆転現象が起こっている。サブトレンチ４・５により土層を観察した結果、このⅪ層は版築を行いながら盛り上げた人為的な層の可能性が考えられる。

第２項　第２遺構面（第17図）

ＳＫ４（第18図、図版８）

［位置・重複］グリッドＣ－42・43。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状はほぼ円形で、長軸41cm、短軸39cmを測る。断面形状は皿形で、深さ７cmを測る。

［検出状況・埋土］検出はⅫ層直下のⅫｂ層上面である。埋土は暗褐色シルト質粘土が主体で、明赤褐色シルトが混じる。

［出土遺物］土師器細片１点が出土したが、図示し得るものではない。

［時期］検出層位や出土遺物より古墳時代前期と考えたい。

ＳＫ５（第18図、図版８）

［位置・重複］グリッドＥ－42。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状はほぼ円形で、長軸37cm、短軸33cmを測る。断面形状はＶ字形で、深さ14cmを測る。

［検出状況・埋土］検出はⅫ層直下のⅫｂ層上面である。埋土は小礫を含む黒褐色シルト質粘土を主体とする。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

ＳＫ６（第 18 図、図版８）

［位置・重複］グリッドＥ－ 42。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は不整楕円形で、長軸 63㎝、短軸 47㎝を測る。断面形状は漏斗形で、深さ 28㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅫ層直下のⅩⅢｂ層上面である。埋土上層は明赤褐色極細粒砂、下層は黒褐色シルト質粘土を主体とする。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

ＳＫ７（第 18 図、図版８）

［位置・重複］グリッドＥ－ 41。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は楕円形と想定され、短軸 57㎝を測る。断面形状は皿形で、深さ 19㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅫ層直下のⅩⅢｂ層上面である。サブトレンチ２と重複したため正確な値は計測できていないが、長軸は 68㎝程度と想定される。埋土は黒褐色シルト質粘土を主体とするが下層へ向け徐々に赤みを増し、最下層では極暗赤褐色となる。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

ＳＫ８（第 18 図、図版８）

［位置・重複］グリッドＥ－ 41。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は楕円形で長軸 73㎝、短軸 45㎝を測る。断面形状は椀形で、深さ 24㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅫ層直下のⅩⅢｂ層上面である。埋土は黒褐色シルト質粘土主体だが、下層に褐色極細粒砂が見られる。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

ＳＫ９（第 18 図、図版８）

［位置・重複］グリッドＤ－ 43。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は不整楕円形で長軸 59㎝、短軸 47㎝を測る。断面形状は皿形で、深さ 14㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅫ層直下のⅩⅢｂ層上面である。埋土は黒褐色シルト質粘土主体で、極暗赤褐色シルトが斑に混じる。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

ＳＫ 10（第 18 図、図版８）

［位置・重複］グリッドＤ－ 42。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は楕円形で長軸 65㎝、短軸 49㎝を測る。断面形状は皿形で、深さ 11㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅫ層直下のⅩⅢｂ層上面である。遺構中心に長さ約 40㎝の礫が直立するが性格は不明。埋土は黒褐色シルト質粘土で、極暗赤褐色シルトが斑に混じる。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

ＳＫ 11（第 18 図、図版９）

［位置・重複］グリッドＤ－ 42。重複する遺構はない。

［形状・規模］平面形状は楕円形で長軸 72㎝、短軸 55㎝を測る。断面形状は皿形で、深さ 11㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅫ層直下のⅩⅢｂ層上面である。埋土は暗赤褐色シルト質粘土主体で、極暗赤褐色シルトが斑に混じる。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

ＳＫ 12（第 18 図、図版９）

［位置・重複］グリッドＥ－ 42。ＳＫ 13 に先行する。

［形状・規模］平面形状は不整楕円形で長軸 47㎝、短軸 40㎝を測る。断面形状は椀形で、深さ 13㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅫ層直下のⅩⅢｂ層上面である。埋土は黒褐色シルト質粘土主体で、にぶい黄褐色シルト質粘土が斑に混じる。切合いのあるＳＫ 13 と似た埋土だが、混入するにぶい黄褐色シルト質粘

土の割合が少ない。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

ＳＫ 13（第 18 図、図版９）

［位置・重複］グリッドＤ・Ｅ－43。ＳＫ 12 に後続する。

［形状・規模］平面形状は楕円形で長軸 60㎝、短軸 45㎝を測る。断面形状は皿形で、深さ 10㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅫ層直下のⅫｂ層上面である。埋土は黒褐色シルト質粘土主体で、にぶい黄褐色シルト質粘土が斑に混じる。切合いのあるＳＫ 12 と似た埋土だが、混入するにぶい黄褐色シルト質粘土の割合が多い。

［出土遺物・時期］遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

ＳＤ６（第４・19 ～ 21・36 図、巻頭図版２、図版９・18）

［位置・重複］グリッドＦ～Ｉ－38 ～ 41。重複する遺構はない。

［形状・規模］下層部と上層部の２段階に分けられる。第１段階（下層部）はＮ－ 72°－Ｗを主軸とする直線的な溝跡で、長さ９ｍ以上、最大幅 6.7ｍを測る。断面形状は皿形で、深さ 78㎝を測る。第２段階（上層部）は南側調査区外を中心にやや弧を描く溝跡で、長さ９ｍ以上、最大幅 5.4ｍを測る。断面形状は皿形で、深さ 63㎝を測る。

［検出状況・埋土］検出はⅫ層直下のⅫｂ層上面であり、両端が調査区外に延伸する。

第１段階の埋土は小礫と酸化鉄分を含む暗赤褐色極細粒砂が主体で、底部では黒みを帯び極暗褐色となる。砂質土主体で小礫や酸化鉄分を有することから、流水を伴う河道的性格であったと考えられる。

第２段階は砂質土により埋没した第１段階の溝を掘り込むもので、埋土上層は黒褐色シルト質粘土、下層は黒色粘土を主体とする。また、拳大～人頭大の礫から成る石列状の礫群が弧を描く溝内径側立ち上がりに沿う。下層の黒褐色粘土は有機性の堆積で流水の形跡が認められないことから、周溝のような単体で完結する溝と考えられる。

［出土遺物］遺構規模に対して遺物出土量は極めて少ない。また、大半は第１段階埋土の極細粒砂層から出土で、第２段階の粘質土層からは須恵器１点と土師器細片が数点出土している。縄文土器１点（180）、土師器５点（181 ～ 185）、須恵器１点（186）の計７点を図示した。180 は縄文時代中期後半の曽利Ⅲ式の深鉢である。181・182 は高坏の脚で、182 には透孔が認められる。183 は台付甕で、口縁部に刻みが施される。184 は甕、185 は有段口縁壺、186 は須恵器の甕である。

［時期］検出層位や出土遺物より、第１段階（河道）部は古墳時代前期頃までに埋没し、その後古墳時代後期に第２段階部を新たに構築したと推定している。

遺構外出土遺物（第 36・37 図、図版 18・19）

第２遺構面の包含層の遺物密度は極めて低い。縄文土器１点（187）、土師器８点（188 ～ 195）の計９点を図示した。187 は曽利Ⅲ式の深鉢、188 はＳ字甕、189 は台付甕、190 ～ 194 は甕、195 は壺である。

サブトレンチ３（第 13 図、図版 19）

地山の確認ため南東壁沿いに設定したトレンチで、縄文土器１点（196）、土師器３点（197 ～ 199）の計４点を図示した。196 は曽利Ⅲ～Ⅳ式の深鉢、197 は小型丸底鉢、198 は台付甕、199 は甕である。

サブトレンチ４（第 21・37 図、図版７・19）

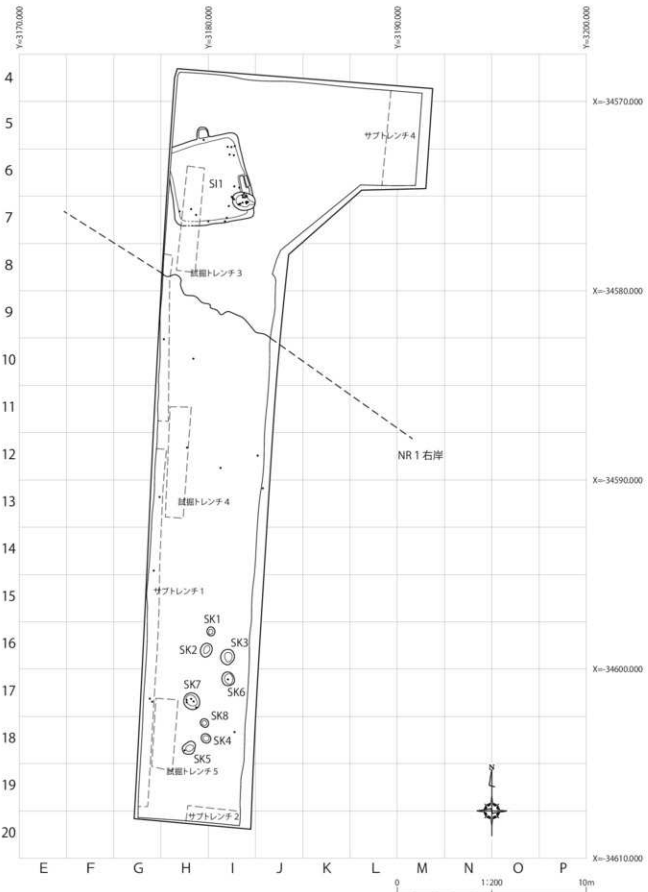
［位置］グリッドＥ・Ｆ－41。幅約 50㎝でＮ－ 61°－Ｗを軸に長さ約 2.2ｍで設定した。

［出土遺物］図示した 200 は手捏ねの小壺である。

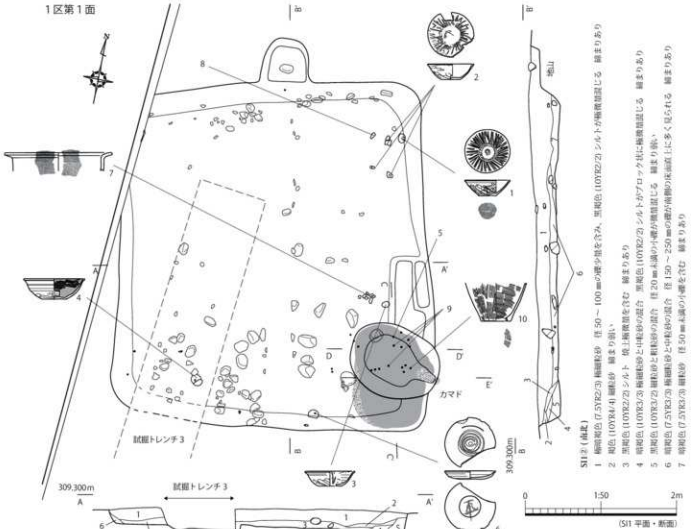
サブトレンチ５（第 21・37 図、図版７・19）

［位置］グリッドＤ～Ｆ－ 41 ～ 43。幅約 50㎝でＮ－ 37°－Ｗを軸に長さ約 4.3ｍ、Ｎ－ 52°－Ｅを軸に長さ約 5.7ｍの２本のトレンチを交差させる様に設定した。

［出土遺物］土師器２点（201・202）を図示した。201 はＳ字甕Ｂ類、202 は壺である。

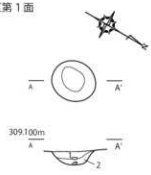


第６図　１区第１遺構面全体図



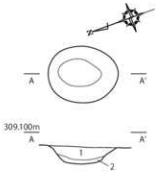
第7図　1区遺構図（1）　S11

1区第1面



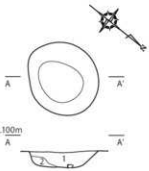
SK1

1　黒褐色（5YR3/1）中粒砂
　径8㎜未満の小礫少量を含み、
　褐灰色（7.5YR4/1）細粒砂が少量混じる
　締まりあり
2　黒褐色（10YR2/2）極細粒砂
　褐灰色（7.5YR4/1）細粒砂が極微量混じる
　締まりあり



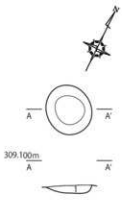
SK2

1　黒褐色（5YR3/1）中粒砂
　褐灰色（10YR4/1）粗粒砂が多量混じる
　締まりあり
2　黒褐色（10YR2/2）極細粒砂　締まりあり



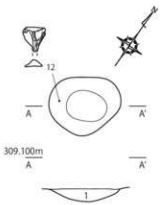
SK3

1　黒褐色（5YR3/1）中粒砂
　径15㎜未満の小礫多量を含む
　締まりあり
2　黒褐色（10YR2/2）極細粒砂
　炭化物極微量を含む　締まりあり



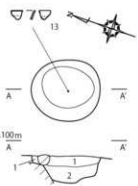
SK4

1　黒褐色（5YR3/1）中粒砂　締まりあり



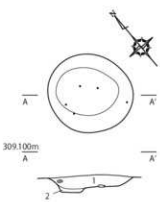
SK5

1　褐灰色（10YR4/1）粗粒砂
　黒褐色（5YR3/1）細粒砂が多量混じる
　締まりあり



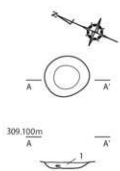
SK6

1　褐灰色（10YR4/1）粗粒砂
　径10㎜未満の小礫が微量を含み、
　黒褐色（5YR3/1）細粒砂が混じる　締まりあり
2　黒褐色（5YR3/1）極細粒砂
　径100～200㎜の礫多量を含む
　締まりあり



SK7

1　褐灰色（10YR4/1）粗粒砂
　径100㎜未満の礫極微量を含み、
　極暗赤褐色（5YR2/4）シルト多量が混じる　締まりあり
2　極暗赤褐色（5YR2/4）極細粒砂　締まりあり



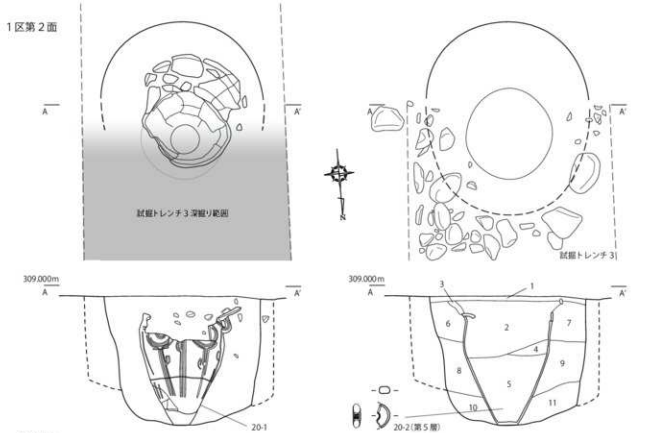
SK8

1　褐灰色（10YR4/1）粗粒砂
　径10㎜未満の小礫多量を含む　締まりあり

第8図　1区遺構図（2）SK1～8

第９図　１区第２遺構面全体図（１）遺構・遺物

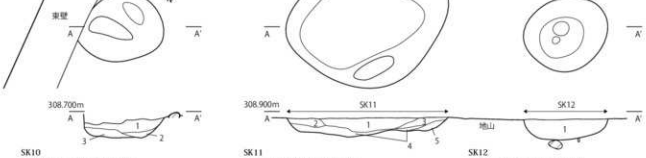
第10図　１区第２遺構面全体図（２）礫・河道



SK9(埋甕)

1 極暗褐色 (7.5YR2/3) シルト質粘土　褐色 (10YR4/6) 粘土ブロック極微量を含み、暗褐色 (10YR3/4) シルトと黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土が斑に混じる　締まりあり
2 暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂　径 15 ㎜未満の小礫少量・径 40 ～ 60 ㎜の礫微量・炭化物極微量を含む　締まりあり
3 暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂　径 5 ㎜未満の小礫極微量を含み、黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土が多量混じる　締まりあり
4 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土　締まり弱い
5 極暗赤褐色 (2.5YR2/2) シルト質粘土　径 20 ～ 40 ㎜の礫微量・土器片少量・褐色 (10YR4/6) 粘土ブロック極微量を含む
6 暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂　径 5 ㎜未満の小礫を含む　締まりあり
7 暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂　径 30 ～ 50 ㎜の礫極微量を含む
8 黒褐色 (10YR3/2) 極細粒砂　径 10 ㎜未満の小礫極微量を含む　締まりあり
9 8 層と同じ
10 黒褐色 (10YR3/2) 極細粒砂　径 10 ～ 20 ㎜の礫微量・土器片少量を含む　締まりあり
11 10 層と同じ

0　1:20　50cm
(SK9)



SK10

1 黒褐色 (7.5YR2/2) 極細粒砂
径 20 ㎜の小礫微量を含む
2 極暗褐色 (7.5YR2/3) シルト　締まりあり
3 暗褐色 (7.5YR3/4) シルト
極暗褐色 (7.5YR2/3) シルトが斑に混じる
締まりあり

SK11

1 極暗褐色 (5YR2/3) 極細粒砂
径 5 ㎜未満の小礫微量を含む　締まりあり
2 暗褐色 (7.5YR3/4) シルト　締まりあり
3 2 層と同じ
4 暗褐色 (7.5YR3/4) シルト
極暗褐色 (5YR2/3) 極細粒砂が斑に混じる　締まりあり
5 暗褐色 (7.5YR3/4) シルト
径 5 ㎜未満の小礫微量を含む　締まりあり

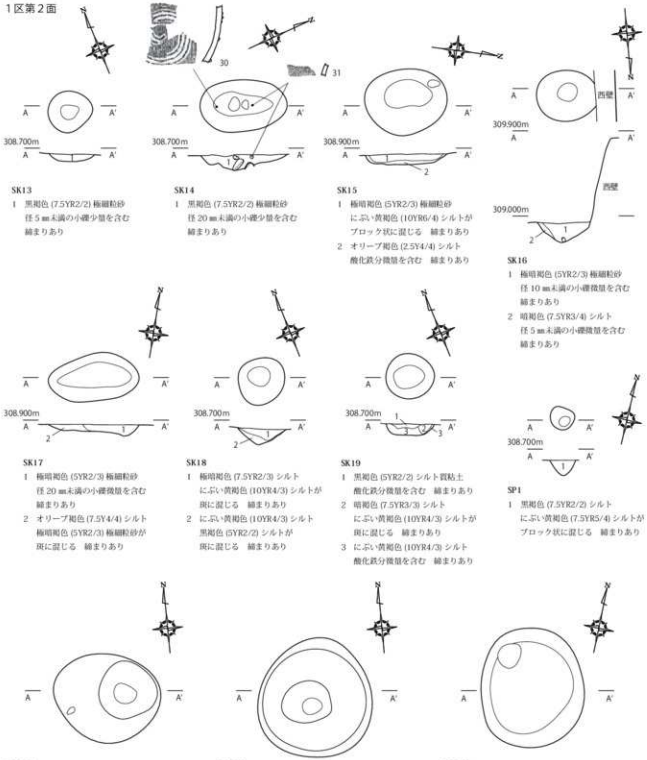
SK12

1 極暗褐色 (5YR2/3) 極細粒砂
径 10 ㎜未満の小礫少量・酸化鉄分微量を含む
締まりあり

0　1:40　1m
(SK10～12)

第11図　1区遺構図(3)ＳＫ９～12

1区第2面



SK13
1　黒褐色 (7.5YR2/2) 極細粒砂
径 5 mm未満の小礫少量を含む
締まりあり

SK14
1　黒褐色 (7.5YR2/2) 極細粒砂
径 20 mm未満の小礫少量を含む
締まりあり

SK15
1　極暗褐色 (5YR2/3) 極細粒砂
にぶい黄褐色 (10YR6/4) シルトが
ブロック状に混じる　締まりあり
2　オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト
酸化鉄分微量を含む　締まりあり

SK16
1　極暗褐色 (5YR2/3) 極細粒砂
径 10 mm未満の小礫微量を含む
締まりあり
2　暗褐色 (7.5YR3/4) シルト
径 5 mm未満の小礫微量を含む
締まりあり

SK17
1　極暗褐色 (5YR2/3) 極細粒砂
径 20 mm未満の小礫微量を含む
締まりあり
2　オリーブ褐色 (7.5Y4/4) シルト
極暗褐色 (5YR2/3) 極細粒砂が
斑に混じる　締まりあり

SK18
1　極暗褐色 (7.5YR2/3) シルト
にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトが
斑に混じる　締まりあり
2　にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト
黒褐色 (5YR2/2) シルトが
斑に混じる　締まりあり

SK19
1　黒褐色 (5YR2/2) シルト質粘土
酸化鉄分微量を含む　締まりあり
2　暗褐色 (7.5YR3/3) シルト
にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトが
斑に混じる　締まりあり
3　にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト
酸化鉄分微量を含む　締まりあり

SP1
1　黒褐色 (7.5YR2/2) シルト
にぶい黄褐色 (7.5YR5/4) シルトが
ブロック状に混じる　締まりあり

308.900m
308.900m
308.700m

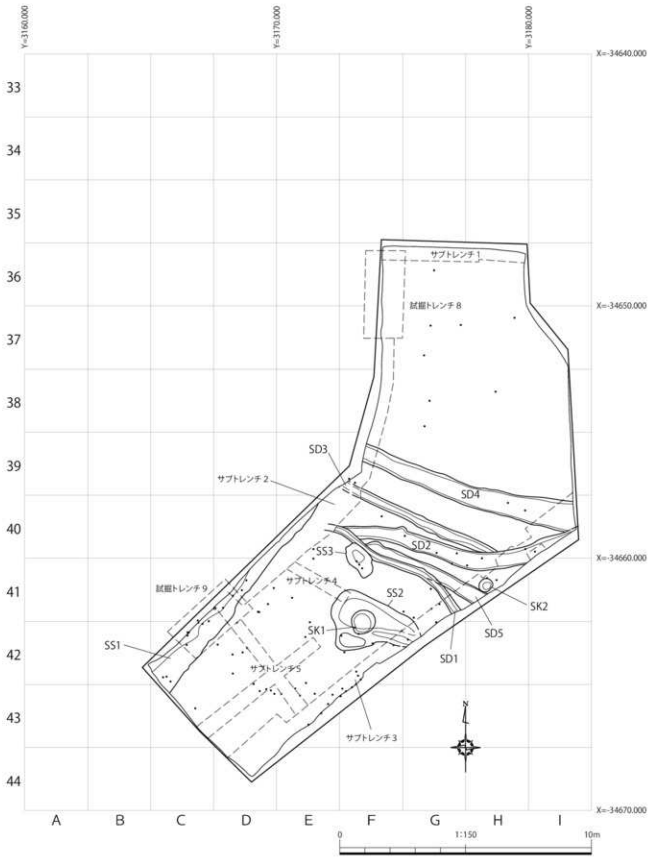
SK20
1　黒褐色 (7.5YR3/2) シルト
にぶい黄褐色 (7.5YR5/4) シルトが
ブロック状に混じる　締まりあり
2　黒褐色 (7.5YR3/2) シルト　締まりあり
3　黒褐色 (7.5YR3/2) シルト
暗褐色 (7.5YR3/4) シルトが斑に混じる
締まりあり

SK21
1　黒褐色 (7.5YR3/2) シルト
にぶい黄褐色 (7.5YR5/4) シルトが
ブロック状に混じる　締まりあり
2　黒褐色 (7.5YR3/2) シルト
暗褐色 (7.5YR3/4) シルトが斑に混じる
締まりあり
3　2 層と同じ

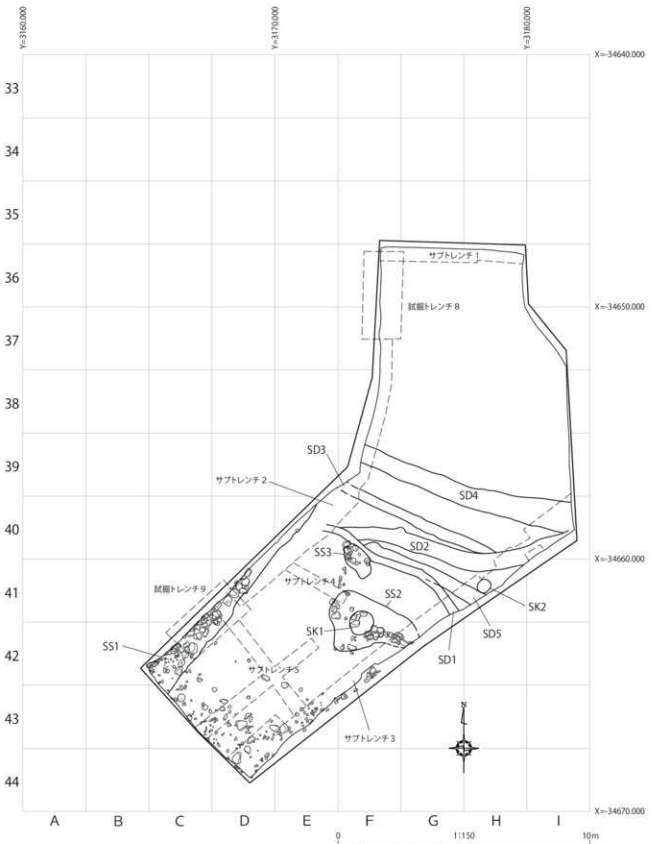
SK22
1　黒褐色 (7.5YR3/2) シルト　酸化鉄分微量を含む
にぶい黄褐色 (7.5YR5/4) シルトがブロック状に混じる
締まりあり
2　黒褐色 (7.5YR3/2) シルト
暗褐色 (7.5YR3/4) シルトが斑に混じる
締まりあり

0　1:40　1m
(SK13～22、SP1)

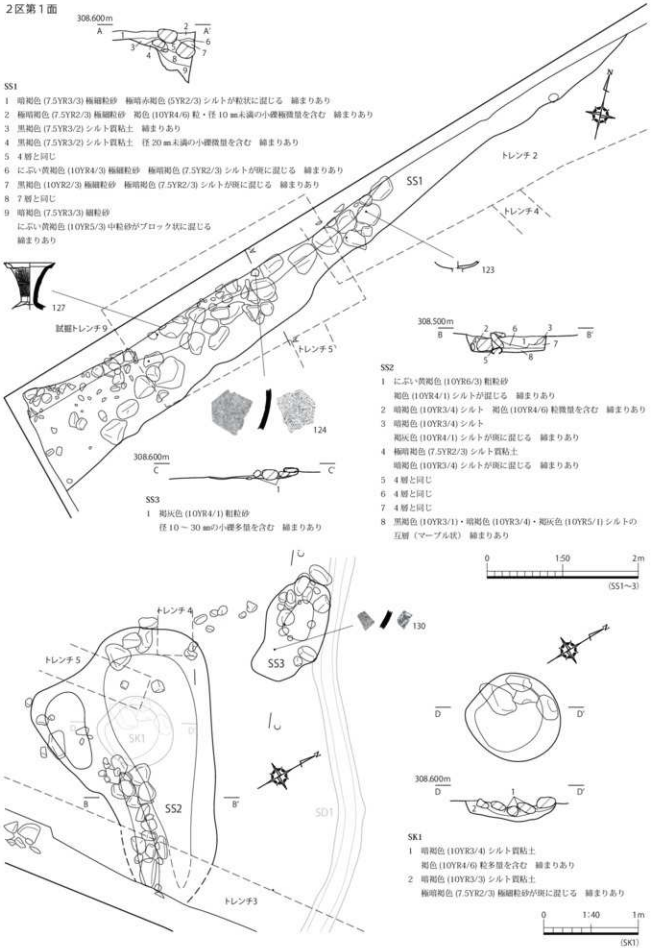
第12図　1区遺構図（4）ＳＫ13～22、ＳＰ１



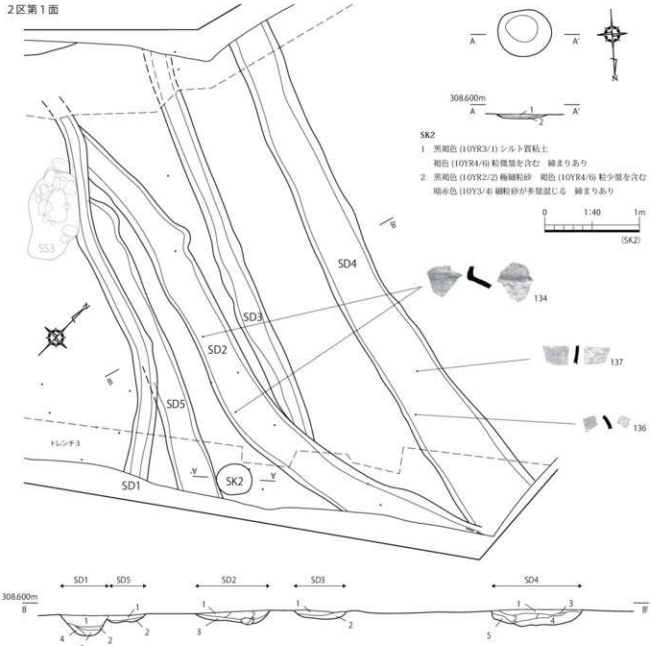
第13図　２区第１遺構面全体図（１）遺構・遺物



第14図　２区第１遺構面全体図（２）礫



第15図　２区遺構図（１）　ＳＳ１～３、ＳＫ１



SK2

1　黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土
　褐色 (10YR4/6) 粒微量を含む　締まりあり
2　黒褐色 (10YR2/2) 極細粗砂　褐色 (10YR4/6) 粒少量を含む
　暗赤色 (10Y3/4) 細粗砂が多量混じる　締まりあり

SD1

1　暗褐色 (7.5YR3/3) 粘土　褐色 (10YR4/6) 粒微量を含む　締まりあり
2　暗褐色 (10YR3/4) シルト質粘土
　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂が斑に混じる　締まりあり
3　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂
　暗褐色 (10YR3/4) 粘土が斑に混じる　締まりあり
4　黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土　締まりあり

SD2

1　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂
　暗褐色 (10YR3/4) シルト質粘土が斑に混じる　締まりあり
2　暗褐色 (7.5YR3/3) シルト質粘土
　褐色 (10YR4/6) 粒微量を含む　締まりあり
3　極暗赤褐色 (5YR2/4) シルト質粘土
　褐色 (10YR4/6) 粒少量を含む　締まりあり

SD3

1　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂　暗褐色 (10YR3/4) 粘土が斑に混じる　締まりあり
2　黒褐色 (10YR2/1) シルト質粘土　褐色 (10YR4/6) 粒微量を含む　締まりあり

SD4

1　暗褐色 (7.5YR3/3) 粘土　褐色 (10YR4/6) 粒微量を含む　締まりあり
2　暗褐色 (10YR3/4) シルト質粘土　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂が斑に混じる　締まりあり
3　黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土　褐色 (10YR4/6) 粒微量を含む　締まりあり
4　暗褐色 (10YR3/4) シルト質粘土・褐色 (10YR5/1) シルトの互層　締まりあり
5　黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土　褐色 (10YR4/6) 粒微量を含む　締まりあり

SD5

1　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 極粗粗砂　径 10 ～ 40 ㎜の礫多量を含む　締まりあり
2　褐灰色 (10YR4/1) 粗粗砂とシルトの混合
　締まりあり

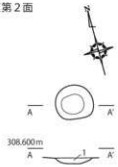
0　1:30　1m
(SD1～5断面図)

0　1:60　2m
(SD1～5平面図)

第16図　2区遺構図(2)　SK2、SD1～5

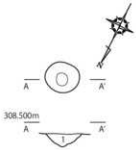
第17図　2区第2遺構面全体図

2区第2面



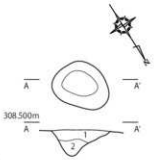
SK4

1　暗褐色（10YR3/3）シルト質粘土
　暗赤褐色（5YR3/6）シルトが斑に混じる
　締まりあり



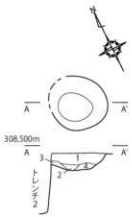
SK5

1　黒褐色（10YR2/2）シルト質粘土
　径5 mmの小礫極微量を含む
　にぶい黄色（10YR4/3）シルト質粘土が斑に混じる
　締まりあり



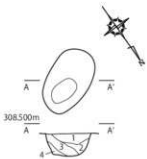
SK6

1　暗赤褐色（5YR3/6）極細粒砂
　径3 mm未満の小礫少量を含む　締まりあり
2　黒褐色（10YR2/2）シルト質粘土
　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質粘土が斑に混じる
　締まりあり



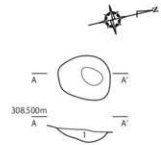
SK7

1　黒褐色（7.5YR2/2）シルト質粘土
　極暗赤褐色（2.5YR2/4）シルト多量が粒状に混じる
　締まりあり
2　極暗赤褐色（2.5YR2/4）シルト質粘土
　黒褐色（7.5YR2/2）シルト質粘土が斑に混じる
　締まりあり
3　褐色（7.5YR3/4）極細粒砂
　暗褐色（10YR3/3）極細粒砂が斑に混じる　締まりあり
4　3層と同じ



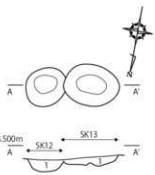
SK8

1　黒褐色（7.5YR2/2）シルト質粘土
　極暗赤褐色（2.5YR2/4）シルト多量が粒状に混じる
　締まりあり
2　黒褐色（7.5YR2/2）シルト質粘土
　極暗赤褐色（2.5YR2/4）シルト微量が粒状に混じる
　締まりあり
3　極暗赤褐色（2.5YR2/4）シルト質粘土
　黒褐色（7.5YR2/2）シルト質粘土が斑に混じる　締まりあり
4　褐色（7.5YR3/4）極細粒砂
　暗褐色（10YR3/3）極細粒砂が斑に混じる　締まりあり



SK9

1　黒褐色（7.5YR2/2）シルト質粘土
　極暗赤褐色（2.5YR2/4）シルト多量が粒状に混じる
　締まりあり



SK12

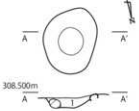
1　黒褐色（10YR2/2）シルト質粘土
　にぶい黄色（10YR4/3）シルト質粘土微量が斑に混じる
　締まりあり

SK13

1　黒褐色（10YR2/2）シルト質粘土
　にぶい黄色（10YR4/3）シルト質粘土多量が斑に混じる
　締まりあり

SK10

1　黒褐色（7.5YR2/2）シルト質粘土
　大型礫周囲に径20 mm未満の礫あり
　極暗赤褐色（2.5YR2/4）シルト質が粒状に混じる
　締まりあり



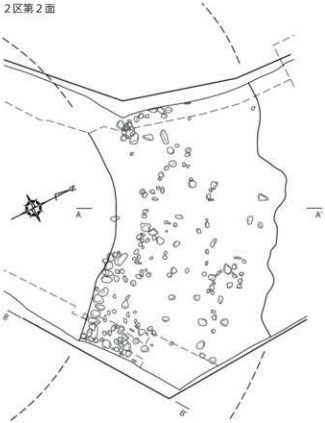
SK11

1　暗褐色（10YR3/3）シルト質粘土
　暗赤褐色（5YR3/6）シルトが斑に混じる
　締まりあり

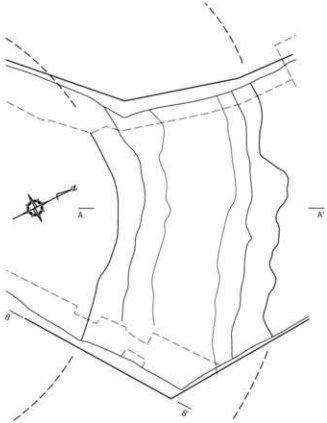
0　1:40　1m

第18図　2区遺構図（3）　ＳＫ４～13

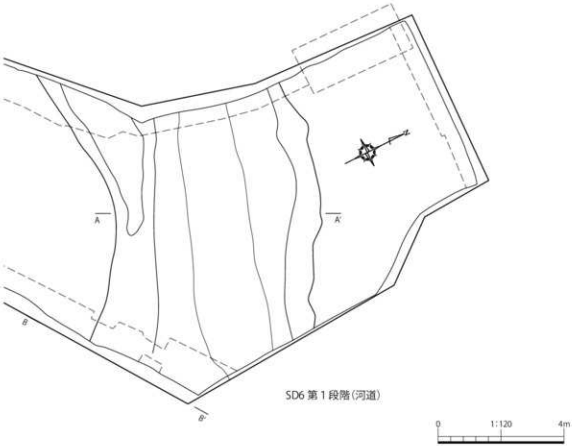
2区第２面



SD6 第２段階（礫）

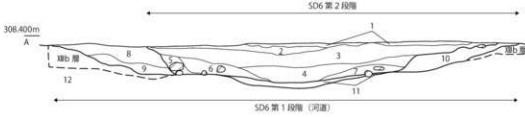


SD6 第２段階



SD6 第１段階（河道）

第19図　２区遺構図（４）　ＳＤ６平面図

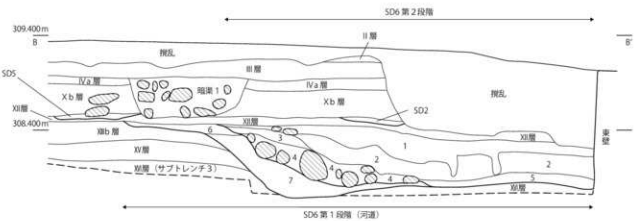


SD6 第２段階

1　黒褐色 (5YR2/2) シルト質粘土　褐色 (10YR4/6) 粒微量を含み、にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルトがブロック状に混じる　締まりあり
2　黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土　黒褐色 (5YR2/2) シルト質粘土が斑に混じる　締まりあり
3　褐色 (7.5YR4/4) シルト　層下部に酸化鉄分がわずかに見られる　締まりあり
4　黒色 (10YR2/1) 粘土　径 4 ㎜未満の小礫極微量を含む　締まりあり
5　暗赤褐色 (5YR3/3) 極細粒砂　褐色 (7.5YR4/4) シルトが斑に混じる　締まりあり
6　黒褐色 (7.5YR3/2) 極細粒砂　拳大～人頭大の礫・径 5 ㎝未満の小礫を含み、暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂が斑に混じる　締まりあり
7　黒褐色 (7.5YR3/2) 極細粒砂　径 10 ㎜未満の小礫微量を含み、暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂が斑に混じる　締まりあり

SD6 第１段階（河道）

8　暗赤褐色 (5YR3/3) 極細粒砂　酸化鉄分極微量を含み、にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトがブロック状に混じる　締まりあり
9　暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂　酸化鉄分極微量を含み、褐色 (7.5YR4/4) シルトが斑に混じる　締まりあり
10　極暗褐色 (7.5YR2/3) 極細粒砂　酸化鉄分・径 8 ㎜未満の小礫極微量を含む　締まりあり
11　暗赤褐色 (5YR3/3) 極細粒砂　酸化鉄分を含む　締まりあり

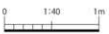


SD6 第２段階

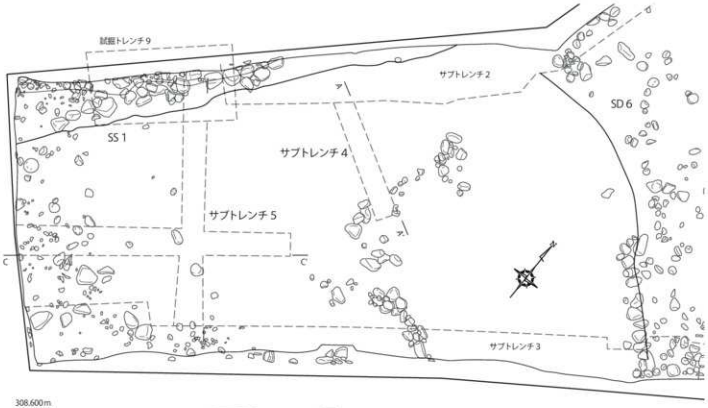
1　黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土　黒褐色 (5YR2/2) シルト質粘土が斑に混じる　締まりあり
2　褐色 (7.5YR4/4) シルト　層下部に酸化鉄分がわずかに見られる　締まりあり
3　暗赤褐色 (5YR3/3) 極細粒砂　褐色 (10YR4/6) 粒微量を含む　締まりあり
4　黒褐色 (7.5YR3/2) 極細粒砂　拳大～人頭大の礫・径 5 ㎝未満の小礫を含み、暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂が斑に混じる　締まりあり
5　黒色 (10YR2/1) 粘土　径 4 ㎜未満の小礫極微量を含む　締まりあり

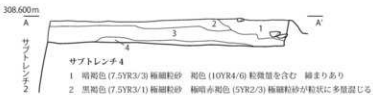
SD6 第１段階（河道）

6　極暗赤褐色 (5YR2/3) 極細粒砂　酸化鉄分・褐色 (10YR4/6) 粒極微量を含む　締まりあり
7　黒褐色 (7.5YR3/2) 極細粒砂　径 5 ㎝未満の小礫微量を含み、暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂が斑に混じる　締まりあり



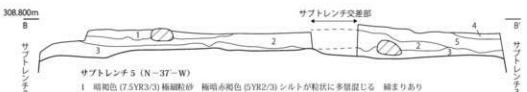
第20図　２区遺構図（５）　ＳＤ６断面図





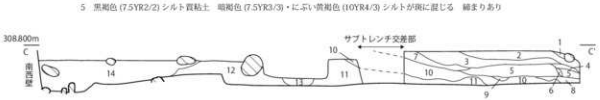
サブトレンチ4

1　暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂　褐色 (10YR4/6) 粒微塵を含む　締まりあり
2　黒褐色 (7.5YR3/1) 極細粒砂　極暗赤褐色 (5YR2/3) 極細粒砂が粒状に多量混じる　締まりあり
3　黒褐色 (7.5YR3/1) 極細粒砂　極暗褐色 (7.5YR2/3) 極細粒砂が斑に混じる　締まりあり
4　暗褐色 (10YR3/4) 極細粒砂　黒褐色 (7.5YR3/1)・極暗褐色 (7.5YR2/3)・褐色 (7.5YR4/4) 極細粒砂が斑に混じる　締まりあり



サブトレンチ5（N－37－W）

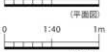
1　暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂　極暗赤褐色 (5YR2/3) シルトが粒状に多量混じる　締まりあり
2　黒褐色 (5YR2/2) シルト質粘土　径 15 ㎜未満の小礫微塵を含む　締まりあり
3　暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土　黒褐色 (5YR2/2) シルトがブロック状に混じる　締まりあり
4　黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土　極暗赤褐色 (5YR2/3) シルトが斑に混じる　締まりあり
5　黒褐色 (7.5YR2/2) シルト質粘土　暗褐色 (7.5YR3/3)・にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトが斑に混じる　締まりあり



サブトレンチ5（N－52－E）

1　極暗褐色 (5YR2/3) 粘土　炭化物極微塵を含む　極粗粒砂が混じる　締まりあり
2　暗褐色 (7.5YR3/3) シルト質粘土　明褐色 (7.5YR5/6) 粘土・極暗赤褐色 (5YR2/3) 極細粒砂が斑に混じる　締まりあり
3　黒褐色 (10YR2/3) 極細粒砂　暗褐色 (7.5YR3/3) シルトが斑に混じる　締まりあり
4　黒褐色 (10YR2/2) 粘土　褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂が粒状に混じる　締まりあり
5　黒褐色 (10YR2/2) 粘土　径 8 ㎜未満の小礫微塵を含む　締まりあり
6　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土　締まり弱い
7　黒褐色 (7.5YR2/2) シルト質粘土　暗褐色 (7.5YR3/3)・にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトが斑に混じる　締まりあり
8　暗褐色 (7.5YR3/4) シルト質粘土　黒褐色 (10YR2/3) シルトが斑に混じる　締まりあり
9　極暗褐色 (5YR2/3) シルト質粘土　褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂が斑に混じる　締まり弱い
10　黒褐色 (5YR2/2) シルト質粘土　径 15 ㎜未満の小礫微塵を含む　締まりあり
11　暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土　黒褐色 (5YR2/2) シルトがブロック状に混じる　締まりあり
12　褐色 (7.5YR4/3) シルト　暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂が粒状に混じる　締まりあり
13　極暗赤褐色 (2.5YR2/2) シルト　締まりあり
14　暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂　径 6 ～ 25 ㎝の礫多量を含む

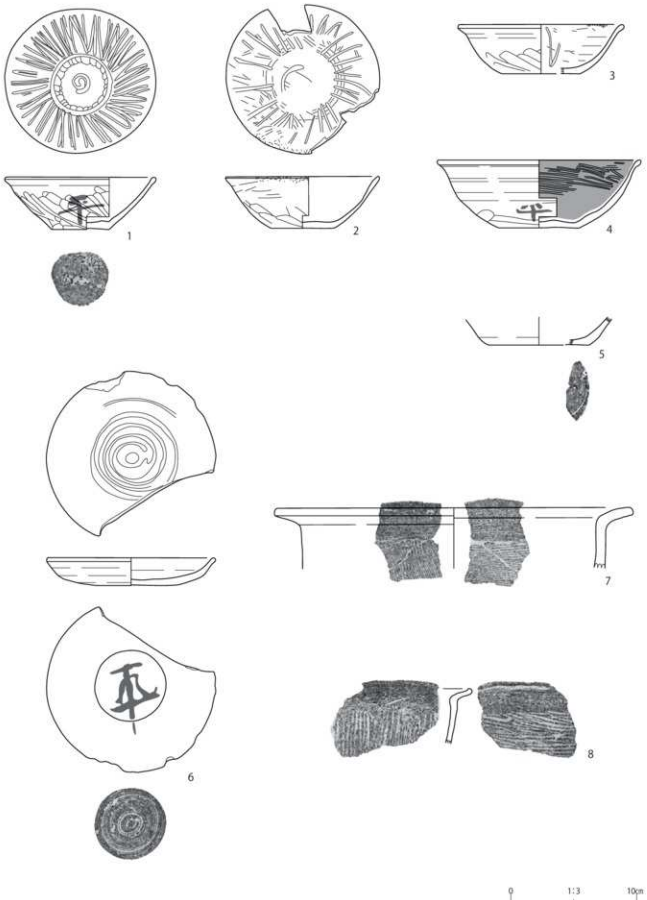
（平面図）



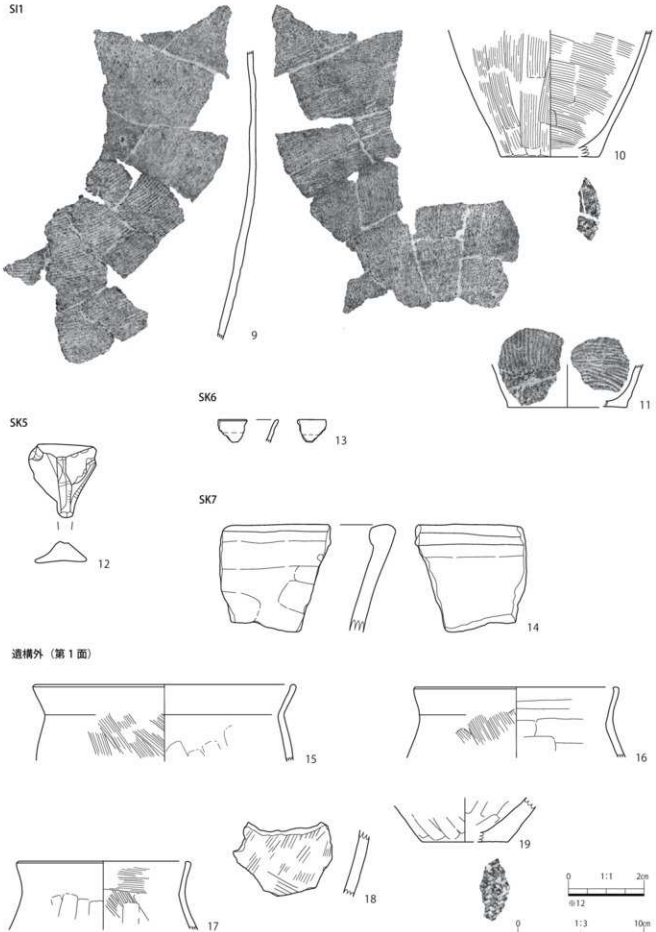
（断面図）

第21図　2区サブトレンチ4・5

SI1



第 22 図　1 区出土遺物（1）

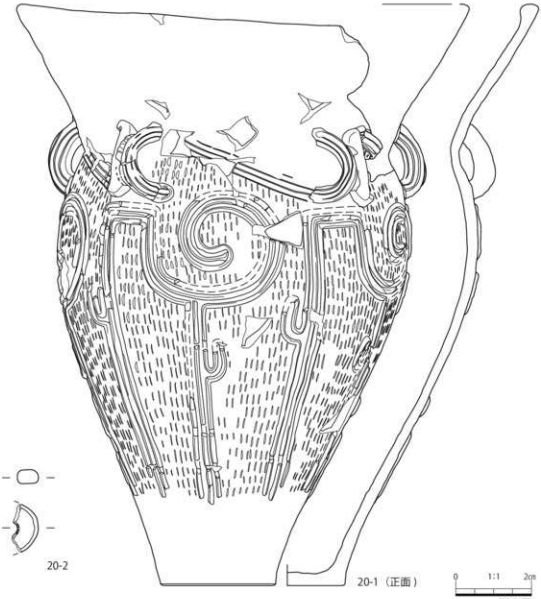


第 23 図　１区出土遺物（２）

SK9

20-1（背面）

20-2

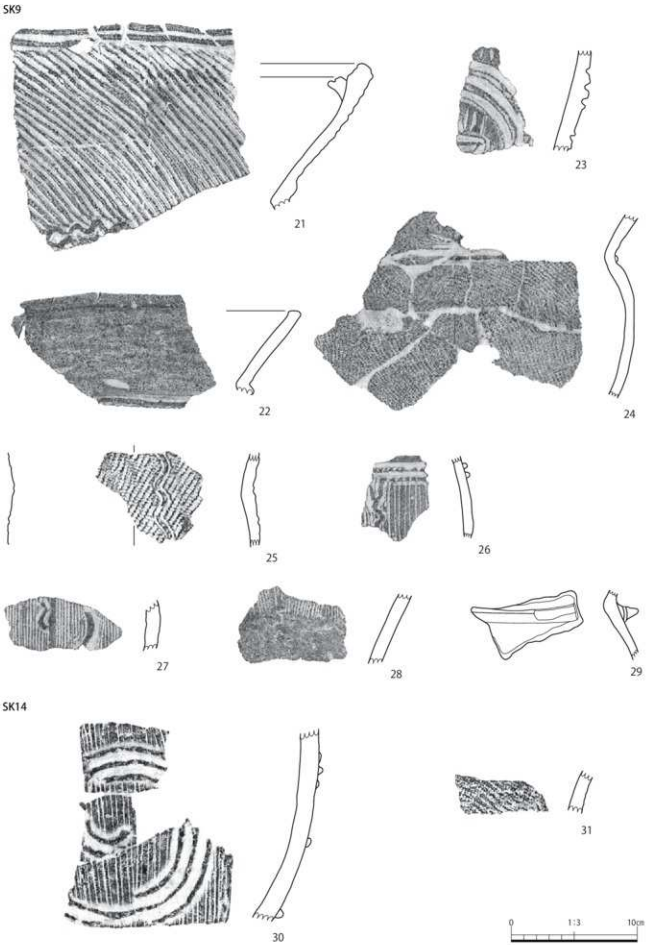


20-1（正面）

0 1:1 2cm
（20-2：玉）

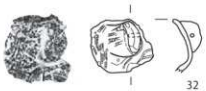
0 1:5 20cm
（20-1：壺）

第 24 図　1 区出土遺物（3）

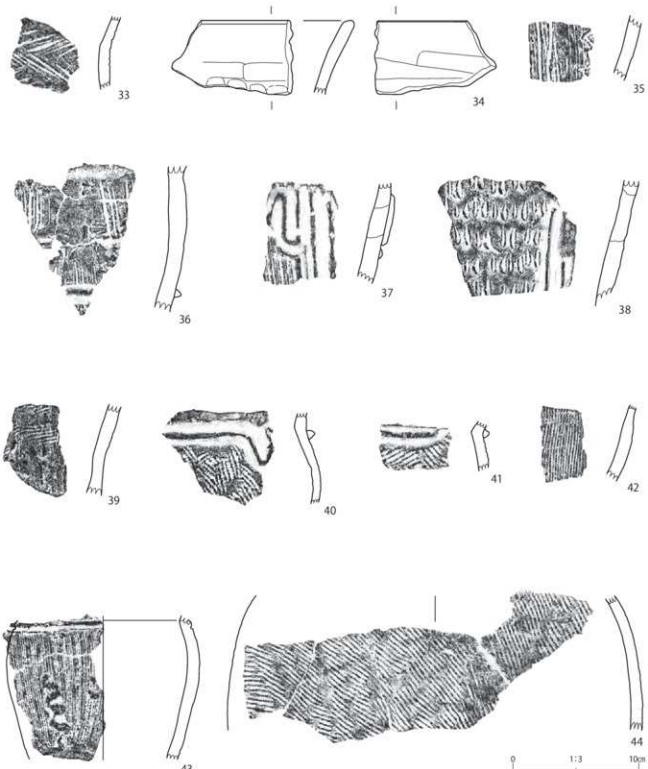


第 25 図　1 区出土遺物（4）

SK16



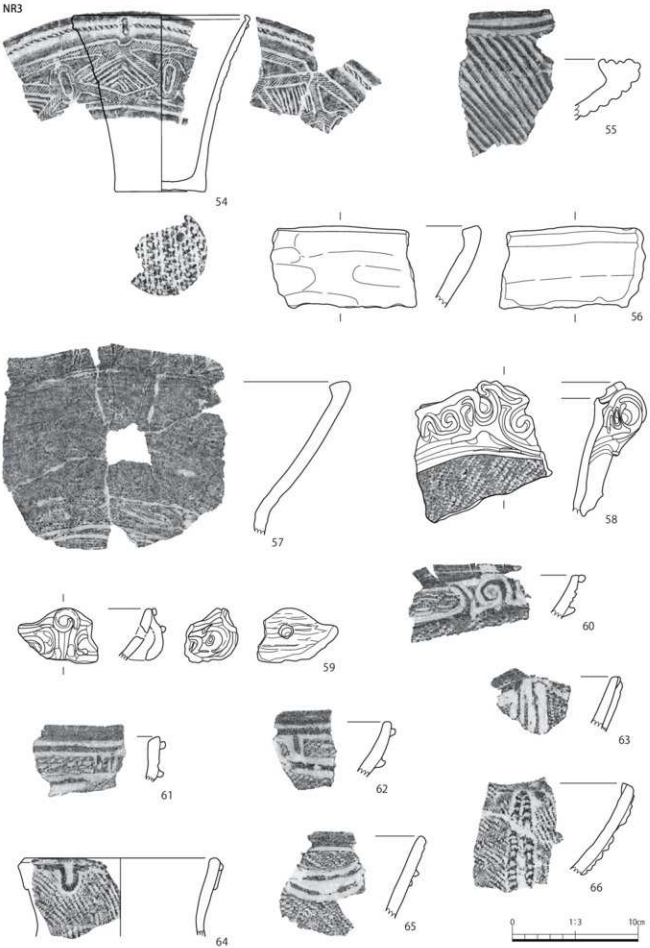
NR2



第 26 図　1 区出土遺物（5）

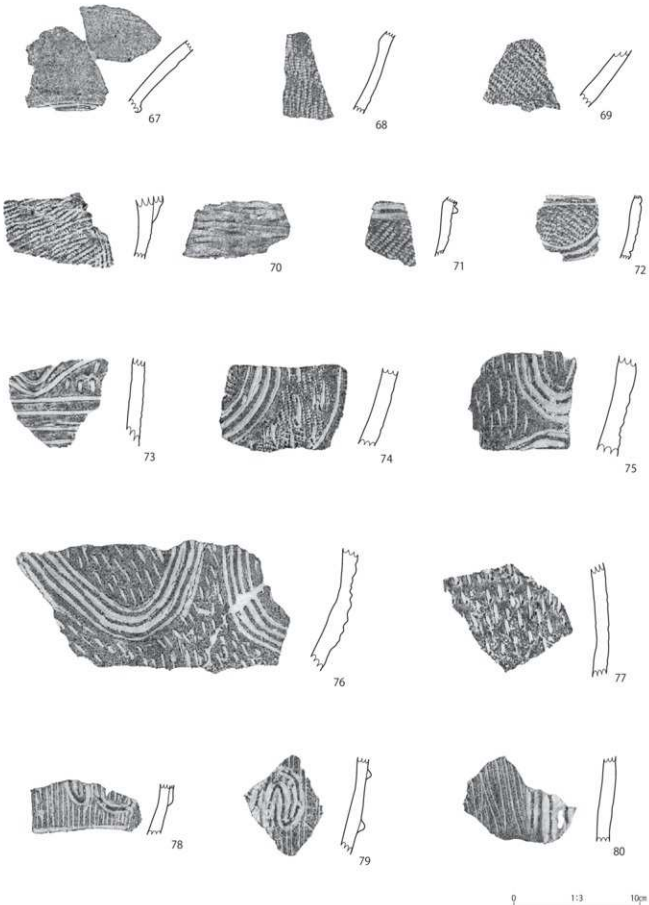
NR2

第 27 図　1 区出土遺物（6）



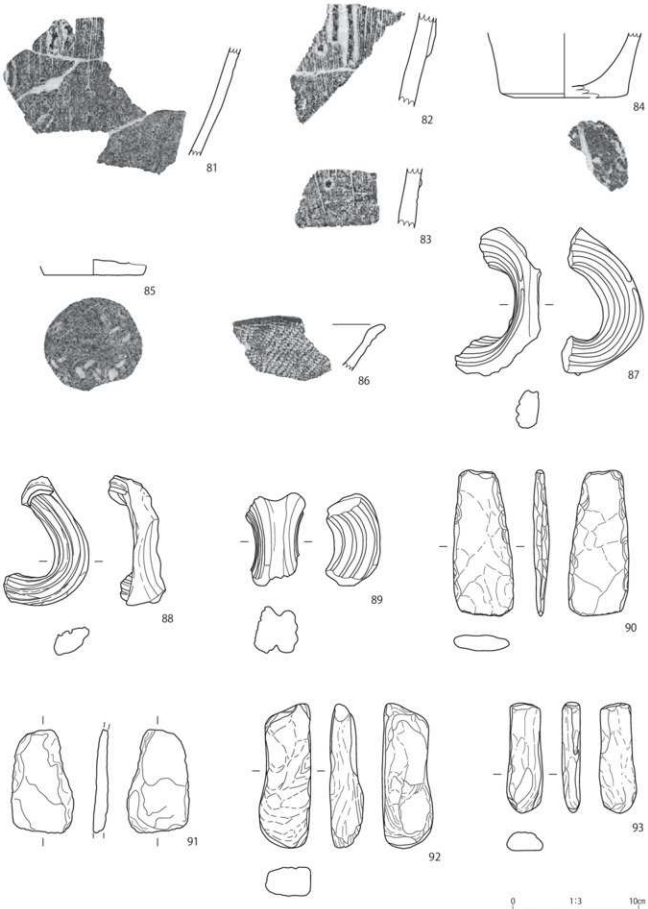
第 28 図　1 区出土遺物（7）

NR3



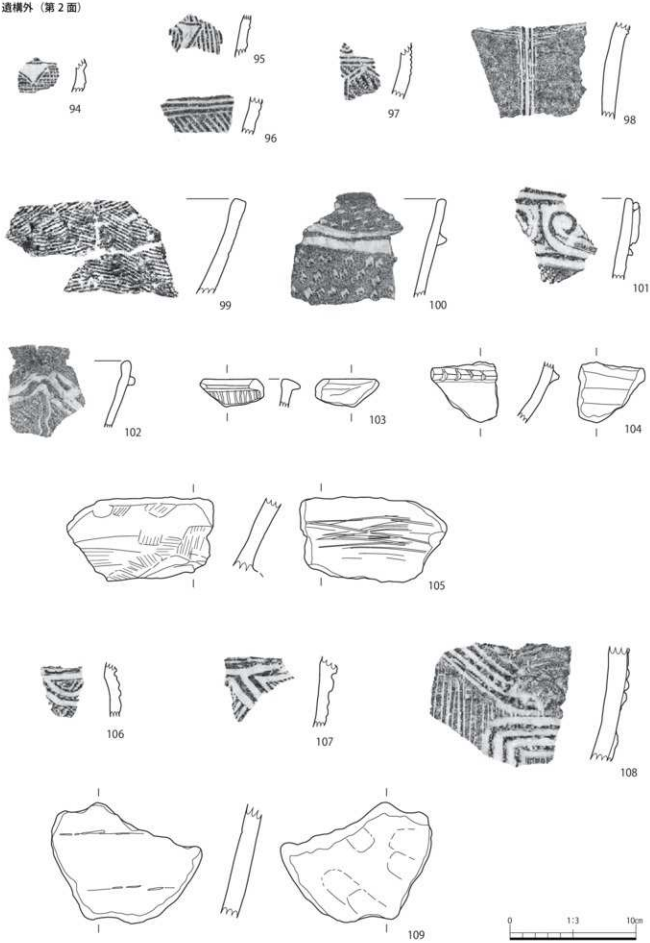
第 29 図　1 区出土遺物（8）

NR3



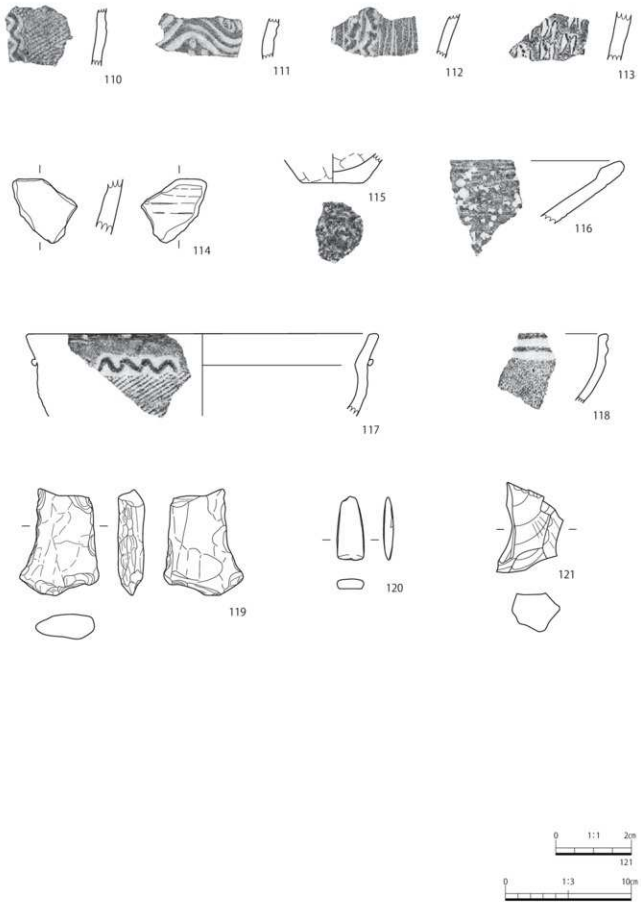
第30図　1区出土遺物（9）

遺構外（第２面）

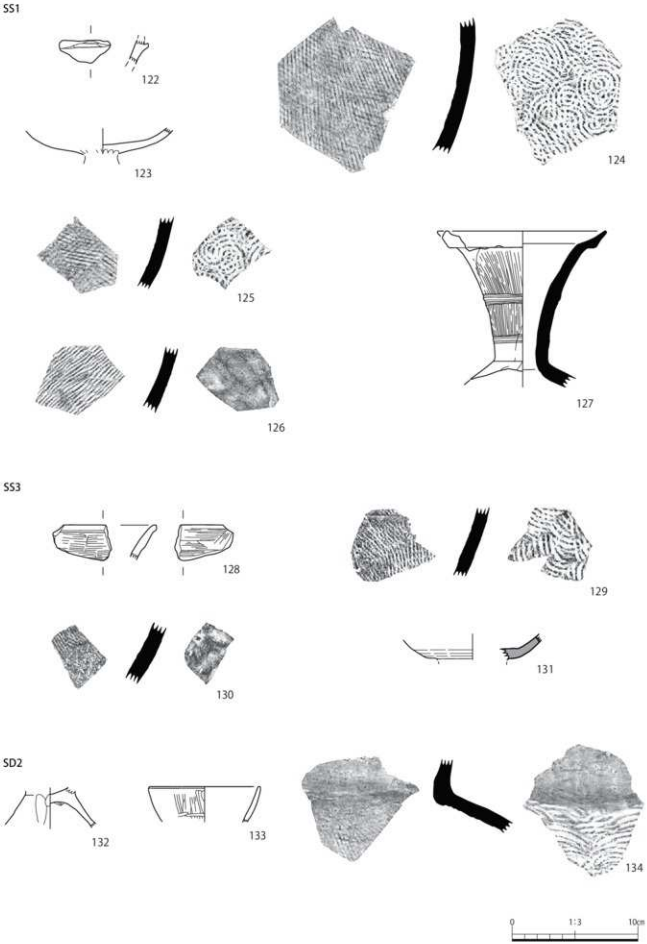


第 31 図　1 区出土遺物（10）

遺構外（第２面）

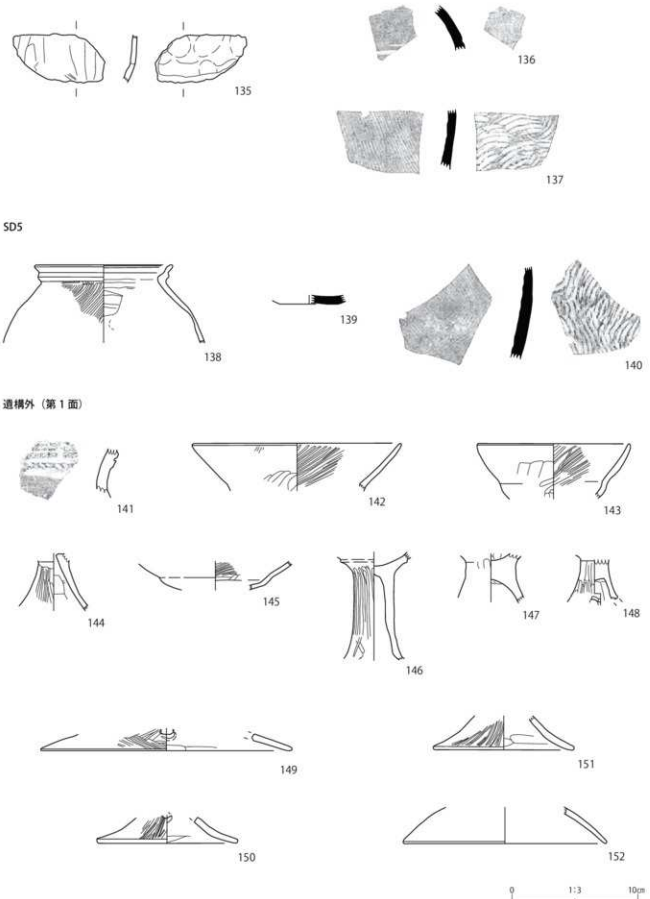


第 32 図　1 区出土遺物（11）



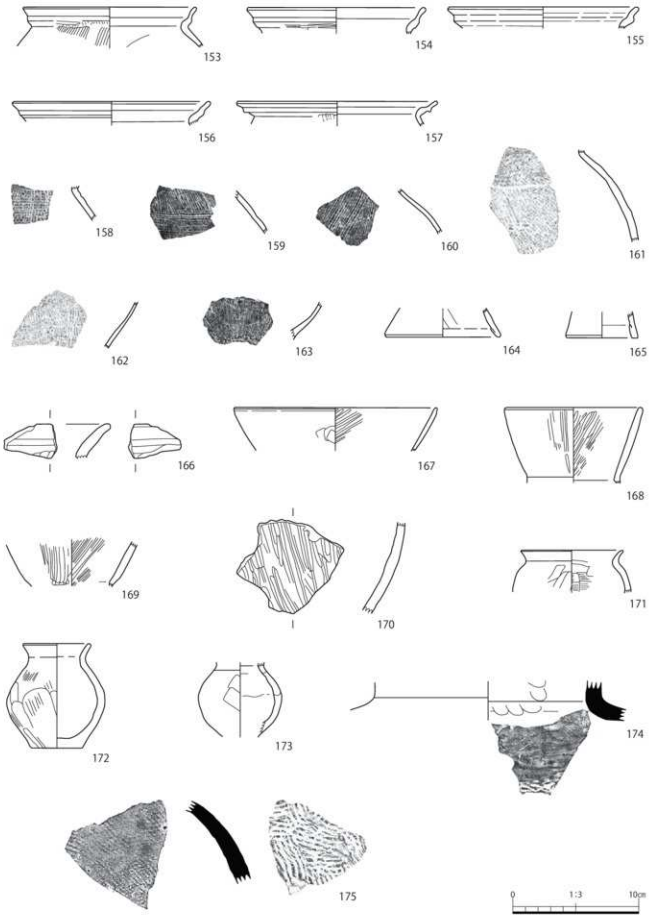
第 33 図　2 区出土遺物（1）

SD4



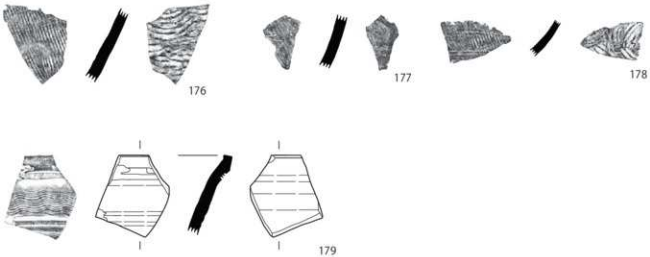
第 34 図　２区出土遺物（２）

遺構外（第１面）

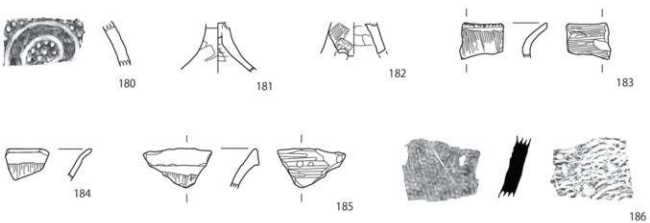


第 35 図　２区出土遺物（３）

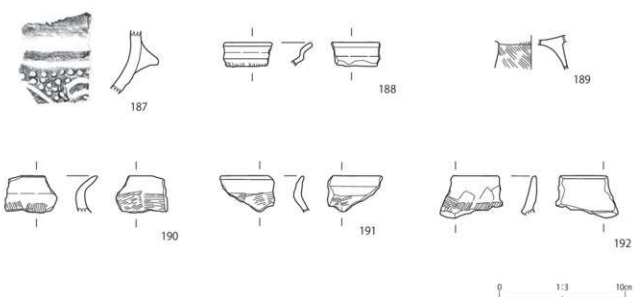
遺構外（第 1 面）



SD6

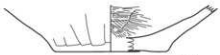


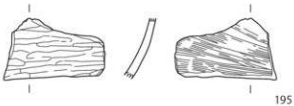
遺構外（第 2 面）



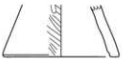
第 36 図　2 区出土遺物（4）

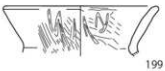
遺構外（第２面）





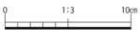
サブトレンチ３





サブトレンチ４

サブトレンチ５



第 37 図　２区出土遺物（５）

表2　出土遺物観察表1（土器類）1

＊法量（ ）は復元実測値、〈 〉は残存値である。

取物番号	挿図	写真図版	調査区	出土地点	種別	器形	法量(cm) A	法量(cm) B	法量(cm) C	部位	整形・調整技法 内面（表面）	整形・調整技法 外面（表面）	整形・調整技法 底部	胎土色調 内面	胎土色調 外面	胎土含有物	焼成	備考	推定年代
1	22	10	1区	SI1	土師器	坏（甲型）	12.0	4.5	40.2	完形	縦文	ヘラケズリ	回転糸切後ヘラケズリ	橙 5YR6/8		赤色粒	良好	外面墨書「平」	平安前期 9C後
2	22	10	1区	SI1	土師器	坏（甲型）	12.2	5.0	4.1	口縁2/3～底部	縦文、指痕	ヘラケズリ、指痕	ヘラケズリ	明赤褐 5YR5/8		赤色粒	良好	口縁部一部に煤付着	平安前期 9C後
3	22	10	1区	SI1	土師器	坏（甲型）	(13.0)	(6.2)	(3.9)	口縁1/4～底部1/2	縦文、指痕	ヘラケズリ	ヘラケズリ	明赤褐 5YR5/8		赤色粒	良好	口縁部一部に煤付着	平安前～中期 9C後～10C前
4	22	10	1区	SI1	土師器	坏（甲型）	(16.0)	6.4	5.4	口縁1/4～底部	縦文、黒色処理	ヘラケズリ	回転糸切後ヘラケズリ	黒褐2.5Y3/1	明赤褐 5YR5/6	赤色粒	良好	黒色土器 外面墨書「平」か	平安前～中期 9C後～10C前
5	22	10	1区	SI1	土師器	坏（甲型）		(8.0)	(2.2)	体部小～底部	ロクロ成形	ロクロ成形	回転糸切り	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	粗砂粒、赤色粒	良好	カマドより出土	平安前期（9C後）須史V期か
6	22	10	1区	SI1	土師器	皿（甲型）	(13.2)	5.6	2.2	口縁2/3～底部	縦文	縦文	回転糸切			赤色粒	良好	底部墨書「平」	平安前期 9C後
7	22	10	1区	SI1	土師器	甕（甲型）	(28.0)		(4.8)	口縁1/4	横ハケ目 ナデ（口縁部）	縦ハケ目 ナデ（口縁部）		にぶい赤褐 5YR4/4		雲母、長石	良好		平安前期 9C後
8	22	10	1区	SI1	土師器	甕（甲型）			(4.4)	口縁小片	横ハケ目 ナデ（口縁部）	縦ハケ目 ナデ（口縁部）		褐 7.5YR4/3		雲母、長石	良好		平安前期 9C後
9	23	10	1区	SI1	土師器	長頸壺（甲型）			(22.9)	体部	横ハケ目	縦ハケ目	木葉痕	褐 7.5YR4/3		雲母、長石	良好		平安前期 9C後
10	23	10	1区	SI1	土師器	甕（甲型）			(7.8)	(10.0)	体部小～底部	横ハケ目	縦ハケ目	赤褐 5YR4/6	赤褐 5YR4/6	粗砂粒、白色粒、雲母、黒色粒	良好	カマドより出土	平安前期（9C後）須史V期か
11	23	10	1区	SI1	土師器	甕（甲型）			(9.4)	(3.4)	底部小片	横ハケ目	縦ハケ目	褐 7.5YR4/3			良好		平安前期
13	23	10	1区	SK6	土師器	坏（甲型）				(1.8)	口縁部小	ロクロ成形	ロクロ成形	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	粗砂粒、赤色粒	良好		平安前期（9C後）須史V期か
14	23	10	1区	SK7	縄文土器	深鉢			(8.5)	口縁部小	ナデ	ナデ		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	粗砂粒、石英、長石	良好	無文、長胴型か 摩滅著しい	縄文中期後半 雅利II か
15	23	10	1区	遺構外（第1面）	土師器	甕			(20.4)	(6.1)	口縁小	ナデ	ハケ目	にぶい橙 7.5YR5/4		粗砂粒、白色粒、黒色粒	良好		古墳後期
16	23	10	1区	遺構外（第1面）	土師器	甕	(16.0)		(5.6)	口縁1/8～頸部	ナデ	ハケ目		橙 7.5YR6/6		粗砂粒、白色粒、赤色粒	良好		古墳後期
17	23	10	1区	遺構外（第1面）	土師器	甕	(13.4)			口縁小	ハケ目	ナデ		橙 7.5YR6/6		粗砂粒、白色粒、黒色粒	良好		古墳後期
18	23	10	1区	遺構外（第1面）	土師器	甕			(10.3)	体部	ナデ			灰黄褐 10YR5/2	橙 7.5YR6/6	粗砂粒、白色粒	良好		古墳後期か
19	23	10	1区	遺構外（第1面）	土師器	甕		(6.8)	(3.5)	底部1/4	ナデ	ナデ	網代痕	にぶい赤褐 5YR5/4		粗砂粒	良好		古墳後期
20-1	24	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢	(57.8)	14.8	76.5	口縁1/3～底部	ナデ	ナデ		にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄褐 10YR5/4	粗砂粒、黒色粒、白色小礫	良好	X字状把手付大型（把手1単位）地文斜条文 隆帯渦巻文・隆線懸垂文（3本単位）	縄文中期後半 雅利II式
21	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(11.0)	口縁小片	ナデ			橙 7.5YR6/6			良好	口縁外側肥厚帯、口縁内側有沈線隆帯 頸部2本単位横位波状隆帯	縄文中期後半 雅利II式
22	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(7.3)	口縁小片	ナデ			橙 5YR6/6		雲母	良好	口縁無文 頸部横位隆帯	縄文中期後半 雅利II式
23	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(8.0)	体部小片	ナデ			橙 7.5YR6/6	明黄褐 10YR7/6	長石	良好	弧状沈線	縄文中期後半 雅利II式平行
24	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(14.5)	体部小片	ナデ			明赤褐 5YR5/6		雲母、細砂粒	良好	地文縄文 頸部に横位隆帯	縄文中期後半 雅利II～III式
25	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(7.4)	頸部小	ナデ			黒褐 7.5YR2/2	黒褐 7.5YR2/2	粗砂粒、白色粒	良好	地文縄文 2本単位縦位波状沈線	縄文中期後半 雅利II～IV式
26	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(6.2)	体部小片	ナデ			にぶい黄橙 10YR6/3	褐 7.5YR6/6	雲母	良好	地文縄文 横位有刺隆帯、縦位波状隆帯	縄文中期後半 雅利II式
27	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(4.0)	体部小片	ナデ			にぶい橙 7.5YR6/4	灰黄褐 10YR5/2	雲母、細砂粒	良好	地文条線文 縦位波状隆帯	縄文中期後半 雅利II～IV式
28	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(5.5)	体部小片	ナデ			明黄褐 10YR7/6		雲母	良好	地文条線文	縄文中期後半 雅利式
29	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(5.7)	体部小片	ナデ	ナデ		灰黄褐 10YR6/2	橙 7.5YR7/6	雲母	良好	有孔鍔付土器 穿孔アリ	縄文中期後半
30	25	12	1区	SK14	縄文土器	深鉢			(15.3)	体部小	ナデ			明褐 7.5YR5/6	明褐 7.5YR5/6	粗砂粒、白色粒	良好	地文条線文 3本単位隆帯渦巻文	縄文中期後半 雅利II式
31	25	12	1区	SK14	縄文土器	深鉢			(3.4)	体部小	ナデ			赤褐 2.5YR4/6	赤褐 2.5YR4/6	粗砂粒、白色粒	良好	地文縄文	縄文中期後半

表３　出土遺物観察表２（土器類）２

＊法量（ ）は復元実測値、（ ）は残存値である。

報告番号	緯図	写真図版	調査区	出土地点	種別	器形	法量(cm) A	法量(cm) B	法量(cm) C	部位	整形・調整技法 内面（表面）	整形・調整技法 外面（表面）	整形・調整技法 底部	胎土色調 内面	胎土色調 外面	胎土含有物	焼成	備考	推定年代
32	26	12	1区	SK16	縄文土器	ミニチュア			(3.4)	口縁部	ナデ			明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	砲砂粒、白色粒	良好	ミニチュア土器 刺突文（竹管）	縄文中期後半か
33	26	12	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(5.8)	体部小	ナデ			赤褐 2.5YR4/6	赤褐 2.5YR4/6	砲砂粒、白色粒、雲母、赤色粒	良好	矢羽根状沈条集合沈線	縄文前期前半 諸磯式
34	26	12	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(5.9)	口縁部小	ナデ	ナデ		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	砲砂粒、白色粒、雲母	良好		縄文中期後半 誉利Ⅱ式前後
35	26	12	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(5.1)	体部				にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	砲砂粒、白色粒、雲母	良好	地文条縄文、縦位波状沈線	縄文中期後半 誉利Ⅱ式
36	26	12	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(11.5)	体部小	ナデ			赤褐 5YR4/6	赤褐 5YR4/6	砲砂粒、白色粒	良好	地文条縄文、横位隆帯	縄文中期後半 誉利Ⅱ式
37	26	12	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(8.0)	体部小	ナデ			赤褐 5YR4/6	赤褐 5YR4/6	砲砂粒、白色粒、雲母	良好	地文条縄文、3本単位縦位隆帯	縄文中期後半 誉利Ⅱ式
38	26	12	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(10.0)	体部				明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	砲砂粒、白色粒	良好	地文刺突文、縦位隆帯 輪積痕	縄文中期後半 誉利Ⅱ式
39	26	13	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(6.2)	体部小				明赤褐 5YR5/6	黒褐 5YR3/1	砲砂粒、石英、長石	良好	地文縄文 内面炭化物付着	縄文中期
40	26	13	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(7.2)	体部小	ナデ			橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	砲砂粒、石英、長石	良好	地文縄文、隆帯懸垂文	縄文中期後半 誉利Ⅱ～Ⅲ式
41	26	13	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(3.9)	頸部小/～体部小	ナデ			にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	砲砂粒、白色粒	良好	地文縄文、横位隆帯	縄文中期後半 誉利Ⅲ式
42	26	13	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(6.0)	口縁部小	ナデ			にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	砲砂粒、白色粒	良好	地文条縄文	縄文中期後半 誉利式後半
43	26	13	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(11.4)	体部	ナデ			明赤褐 5YR5/6	灰褐 7.5YR4/2	砲砂粒、白色粒	良好	地文条縄文、縦位波状隆帯	縄文中期後半 誉利Ⅲ式
44	26	13	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(10.7)	体部	ナデ			にぶい褐 5YR5/6	明赤褐 7.5YR5/4	砲砂粒、白色粒	良好	地文条縄文	縄文中期後半
45	27	13	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(4.6)	体部	ナデ			明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	砲砂粒、石英、長石	良好	地文刺突文、3本単位沈線（渦巻文か）	縄文中期後半 誉利Ⅲ式
46	27	13	1区	NR2	縄文土器	深鉢		(8.0)	(1.9)	底部1/4	ナデ	ナデ	網代痕	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	砲砂粒、白色粒、雲母	良好		縄文中期か
47	27	13	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(1.4)	底部1/2	指頭痕	ヘラナデ	網代痕	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	砲砂粒、白色粒、雲母	良好		縄文中期後半 誉利式
48	27	13	1区	NR2	縄文土器	台付土器			(2.8)	脚部小	ナデ			橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	砲砂粒、白色粒	良好	3本単位縦位沈線、横位波状隆帯	縄文中期後半 誉利Ⅲ式か
49	27	13	1区	NR2	縄文土器	両耳壺			(4.0)	体部小				橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	砲砂粒、白色粒	良好	地文縄文	縄文中期後半 誉利Ⅳ（加曽利EⅣ系）
54	28	13	1区	NR3	縄文土器	深鉢 （鉢部形）	13.7	(7.1)	15.0	口縁2/3～底部2/3	ナデ		網代痕	にぶい赤褐 5YR5/4		砲砂粒	良好	口縁沙見前海岸段隆帯、北縁垂れ区画（区画内米刃縄状集合沈線・交叉沈線縄文）	縄文後期前葉 堀之内２式古段階
55	28	13	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(4.8)	口縁小片	ナデ			橙 7.5YR6/6		小礫	良好	口縁外側斜行条線 口唇部側3本単位沈線	縄文中期後半 誉利Ⅲ式
56	28	13	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(6.5)	口縁小	ナデ			橙5YR6/6		砲砂粒、白色粒、赤色粒、雲母	良好	地文条縄文、隆帯	縄文中期後半 誉利Ⅲ式
57	28	13	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(12.2)	口縁小片	ナデ			明赤褐 5YR5/6		雲母、長石	良好	頸部横位沈線	縄文中期後半
58	28	13	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(11.3)	口縁小片	ナデ			橙 7.5YR6/6	明褐 7.5YR5/6		良好	地文縄文、波状口縁	縄文中期後半 誉利Ⅰ式（大木8a系）
59	28	13	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(4.3)	口縁	ナデ			にぶい褐 5YR5/4	黒褐 7.5YR3/2	砲砂粒、白色粒、雲母	良好	波状口縁	縄文中期後半 誉利Ⅰ式（大木8a系）
60	28	13	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(3.5)	口縁小片	ナデ			橙 5YR6/6	橙 7.5YR7/6	雲母、細砂粒	良好	地文縄文 口縁部文様帯（沿枠状か）内に刺突文	縄文中期後半 誉利Ⅱ（加曽利EⅡ系）
61	28	13	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(3.6)	口縁小片	ナデ			橙 7.5YR6/6		雲母	良好	地文縄文 口縁部文様帯（長方形区画か）内に刺突文	縄文中期後半 誉利Ⅱ（加曽利EⅡ系）
62	28	13	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(4.4)	口縁小片	ナデ			橙 7.5YR6/6			良好	地文縄文 口縁部文様帯（沿枠状か）内に刺突文	縄文中期後半 誉利Ⅱ（加曽利EⅡ系）
63	28	13	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(4.4)	口縁小片	ナデ			明褐 7.5YR5/6		雲母、長石	良好	地文縄文、隆帯、波状口縁	縄文中期後半 誉利Ⅲ式
64	28	13	1区	NR3	縄文土器	深鉢	(15.2)		(6.2)	口縁1/8～体部	ナデ			明赤褐5YR5/6		砲砂粒、白色粒、雲母	良好	地文縄文 口縁構位隆帯（一部でU字懸垂）	縄文中期後半 誉利Ⅱ～Ⅲ式か
65	28	13	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(6.0)	口縁小片	ナデ			にぶい橙 7.5YR6/4		雲母、細砂粒	良好	地文縄文、2本単位隆帯垂弧文	縄文中期後半 誉利Ⅲ式

表4　出土遺物観察表3（土器類）3

＊法量（ ）は復元実測値、〈 〉は残存値である。

報告番号	挿図	写真図版	調査区	出土地点	種別	器形	法量(cm) A	法量(cm) B	法量(cm) C	部位	整形・調整技法 内面（表面）	整形・調整技法 外面（表面）	整形・調整技法 底部	胎土色調 内面	胎土色調 外面	胎土含有物	焼成	備考	推定年代
66	28	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(8.0)	口縁小～体部	ナデ			明赤褐5YR5/6		細砂粒、白色粒	良好	地文縄文 縦位隆帯（羊歯状管の押圧あり）	縄文中期後半 曽利Ⅱ～Ⅲ式
67	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(5.7)	体部小片	ナデ			橙 5YR6/6	にぶい褐 7.5YR5/4	雲母、長石	良好	頸部横位沈線	縄文中期後半 曽利Ⅱ～Ⅲ式
68	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(6.6)	体部小片	ナデ			橙 7.5YR6/6			良好	地文縄文	縄文中期か
69	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(4.6)	体部小片	ナデ			灰褐 7.5YR4/2	にぶい橙 7.5YR6/4	雲母、長石	良好	地文縄文	縄文中期か
70	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(5.0)	口縁～体部	ナデ			橙7.5YR6/6		細砂粒、白色粒、雲母	良好	地文縄文 突起（欠損）あり、把手か	縄文中期後半 曽利後半
71	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(4.2)	体部小片	ナデ			にぶい黄橙 10YR6/4	褐灰 7.5YR4/1	雲母、細砂粒	良好	地文縄文、横位隆帯	縄文中期後半 曽利Ⅱ～Ⅲ式
72	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(5.0)	体部小片	ナデ			明褐 7.5YR5/6	灰褐 7.5YR4/2	雲母、細砂粒	良好	地文縄文、横位沈線 2本単位沈線重弧文	縄文中期後半 曽利Ⅲ頃か
73	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(7.0)	体部	ナデ			褐灰 10YR4/1	明赤褐 5YR5/6	細砂粒、白色粒	良好	沈線２種（うち一つは2本単位） 刺突	縄文中期後半 曽利式か
74	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(6.2)	体部小片	ナデ			にぶい橙 7.5YR6/4		雲母、長石	良好	地文縄文・刺突文、3本単位隆帯（渦巻文か）	縄文中期後半 曽利Ⅱ式（新）
75	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(8.0)	体部小片	ナデ			暗赤褐 5YR5/6		細砂粒	良好	地文刺突文、3本単位沈線	縄文中期後半 曽利Ⅱ式（新）
76	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(9.7)	体部小片	ナデ			橙 7.5YR7/6		長石、細砂粒	良好	地文刺突文、3本単位沈線	縄文中期後半 曽利Ⅱ式（新）
77	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(9.0)	体部	ナデ			褐 7.5YR4/3	明赤褐 5YR5/6	雲母	良好	地文刺突文	縄文中期後半 曽利Ⅱ～Ⅲ式
78	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(4.0)	体部小片	ナデ	ナデ		暗褐 7.5YR5/8			良好		縄文中期後半 曽利Ⅱ～Ⅲ式
79	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(7.7)	体部小片	ナデ			明赤褐 5YR5/6	黒褐 10YR3/1	雲母、長石	良好	地文縄文、隆帯	縄文中期後半 曽利Ⅱ式
80	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(6.7)	体部小片	ナデ			明赤褐 5YR5/6			良好	地条縄文、縦位隆帯（3本単位か）	縄文中期後半 曽利Ⅱ式
81	30	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(8.5)	体部小片	ナデ			暗褐 7.5YR5/6	にぶい黄橙 10YR5/4	雲母	良好	地文条縄文 縦位波状隆帯（2本単位か）	縄文中期後半 曽利Ⅱ式
82	30	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(7.5)	体部	ナデ			にぶい橙 7.5YR6/3	橙7.5YR6/6	細砂粒、白色粒、雲母	良好	地文条縄文、3本単位隆帯	縄文中期後半 曽利Ⅱ式
83	30	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(5.7)	体部小	ナデ			橙5YR6/6		細砂粒、白色粒	良好	地文条縄文、ボタン状貼付	縄文中期後半 曽利Ⅱ～Ⅲ式
84	30	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(5.1)	底部小片	ナデ	ナデ	網代痕か	橙 7.5YR6/6		長石、小礫	良好		縄文中期か
85	30	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢		7.8	(1.2)	底部			網代痕	橙 7.5YR6/6		細砂粒	良好		縄文中期後半
86	30	15	1区	NR3	縄文土器	浅鉢			(3.7)	口縁小片	ナデ			にぶい橙 7.5YR6/4		雲母	良好	地文縄文	縄文中期後半
87	30	15	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(11.7)	X字把手				橙 7.5YR6/6		雲母、細砂粒	良好		縄文中期後半 曽利Ⅱ～Ⅲ式
88	30	15	1区	NR3	縄文土器	深鉢	10.3	6.7	2.2	X字把手				橙 5YR6/6		細砂粒、白色粒、赤色粒	良好		縄文中期後半 曽利Ⅱ～Ⅲ式
89	30	15	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(7.4)	X字把手				明赤褐 5YR5/6		雲母	良好		縄文中期後半 曽利Ⅱ～Ⅲ式
94	31	15	1区	遺構外 （第２面）	縄文土器	深鉢			(2.7)	体部小	ナデ			赤褐 5YR4/6		細砂粒、白色粒	良好	沈線による格子目文	縄文中期初頭 五領ヶ台Ⅰ式
95	31	15	1区	遺構外 （第２面）	縄文土器	深鉢			(3.4)	体部	ナデ			明赤褐 5YR5/6		細砂粒、白色粒、黒色粒	良好	地文縄文 玉抱き三叉状モチーフか	縄文中期初頭 五領ヶ台Ⅰ式
96	31	15	1区	遺構外 （第２面）	縄文土器	深鉢			(3.0)	体部	ナデ			明赤褐 5YR5/6		細砂粒、白色粒、赤色粒、黒色雲母	良好	条縄文、横位平行沈線（2本単位か） 摩滅著しい	縄文前期初頭 五領ヶ台Ⅰ式
97	31	15	1区	遺構外 （第２面）	縄文土器	深鉢			(4.4)	体部	ナデ			明赤褐 5YR5/6		細砂粒、白色粒、黒色粒	良好	地文縄文、沈線によるY字状文	縄文中期初頭 五領ヶ台Ⅰ新～Ⅱ古
98	31	15	1区	遺構外 （第２面）	縄文土器	深鉢			(7.6)	体部	ナデ			にぶい橙 7.5YR6/4		細砂粒、白色粒、雲母	良好	沈線によるクランク状懸垂文	縄文中期初頭 五領ヶ台Ⅱ（新）式か
99	31	15	1区	遺構外 （第２面）	縄文土器	深鉢			(7.5)	口縁部小	ナデ			にぶい赤褐 5YR4/4	にぶい赤褐 5YR4/4	細砂粒含、白色粒、雲母、赤色粒	良好	地文縄文	縄文中期か

表5　出土遺物観察表4（土器類）4

＊法量（ ）は復元実測値、（ ）は残存値である。

報告番号	挿図	写真図版	調査区	出土地点	種別	器形	法量(cm) A	法量(cm) B	法量(cm) C	部位	整形・調整技法 内面（黒色）	整形・調整技法 外面（赤色）	整形・調整技法 底部	胎土色調 内面	胎土色調 外面	胎土含有物	焼成	備考	推定年代
100	31	15	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢			(7.8)	口縁小片	ナデ			明赤褐 5YR5/6		雲母	良好	地文刻突文、つなぎ弧文	縄文中期後半 曹利Ⅱ～Ⅲ式
101	31	15	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢			(6.4)	口縁小片	ナデ			にぶい橙 7.5YR6/4		砂砂粒、白色粒	良好	地文縄文 口縁部文様帯（渦巻つなぎ弧文）	縄文中期後半 曹利Ⅲ～Ⅳ（大木系）
102	31	15	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢			(5.2)	口縁小片	ナデ			黒褐 10YR3/2		砂砂粒	良好	地文縄文、横位隆帯（波状か） 縦位2本単位平行波状沈線	縄文中期か
103	31	15	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢			(2.2)	口縁小	ナデ			にぶい橙 7.5YR6/6		砂砂粒、白色粒	良好	地文縄文	縄文中期後半 曹利Ⅱ頃
104	31	15	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢			(4.8)	体部	ナデ	ナデ		にぶい橙 7.5YR5/4		砂砂粒、白色粒	良好		
105	31	15	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢				体部小	ナデ	ナデ		明赤褐5YR5/6		砂砂粒、白色粒、金色雲母	良好	剥離痕（X字把手型） 外面レ字状者	縄文中期後半 曹利Ⅱ式か
106	31	15	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢			(4.3)	体部	ナデ			にぶい橙 5YR5/4	橙 5YR6/6	砂砂粒、白色粒	良好	地文縄文	縄文中期後半 曹利Ⅱ～Ⅲ式
107	31	15	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢			(5.6)	体部	ナデ			橙 5YR6/6		砂砂粒、白色粒、赤色粒、雲母	良好		縄文中期後半 曹利Ⅱ～Ⅲ式
108	31	16	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢			(9.1)	体部	ナデ			にぶい橙 7.5YR6/3	橙 7.5YR6/6	砂砂粒、白色粒、雲母	良好	地文縄文、隆帯・隆線懸垂文（3本単位）、刻縄痕（X字状把手付き か）	縄文中期後半 曹利Ⅱ式
109	31	16	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢			(9.2)	体部小	輪積痕	ナデ		赤褐 2.5YR4/6	にぶい橙 7.5YR6/4	砂砂粒、白色粒、赤色粒、雲母	良好	内面）タール状付着物	
110	32	16	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢			(4.6)	体部小片	ナデ			にぶい黄橙 10YR6/3	橙 7.5YR6/6	雲母、長石	良好	地文縄文、縦位波状隆帯	縄文中期後半 曹利Ⅱ～Ⅲ式
111	32	16	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢			(3.2)	体部小片	ナデ			褐 7.5YR4/4		長石	良好	地文刻突文、沈線	縄文中期後半 曹利Ⅱ～Ⅲ式
112	32	16	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢			(3.5)	体部小片	ナデ			にぶい褐 2.5YR5/4	明赤褐 5YR5/6	雲母、長石	良好	地文縄文 縦位2本単位平行波状隆帯	縄文中期後半 曹利Ⅱ～Ⅲ式
113	32	16	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢			(3.8)	体部小	ナデ			明赤褐2.5Y5/6	にぶい橙 7.5YR6/4	砂砂粒、白色粒	良好	地文刻突文	縄文中期後半 曹利Ⅱ～Ⅳ式
114	32	16	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢			(4.4)	体部	輪積痕、ナデ	ナデ		明赤褐5YR5/6		砂砂粒、白色粒	良好		
115	32	16	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢		(4.8)	(2.3)	底部1/2	ナデ	ナデ	網代痕か	明赤褐 5YR5/6		砂砂粒、白色粒、赤色粒	良好		
116	32	16	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	浅鉢			(6.9)	口縁小	ナデ			にぶい赤褐 5YR5/3		砂砂粒、白色粒	良好	地文刻突文	縄文中期後半
117	32	16	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	鉢	(27.6)		(6.6)	口縁～体部	ナデ			橙 5YR6/6		砂砂粒、白色粒、雲母	良好	地文縄文、頸部横位波状	縄文中期 曹利後半
118	32	16	1区	遺構外（第2面）	縄文土器	鉢			(5.5)	口縁小	ナデ			橙 5YR7/6	にぶい橙 7.5YR6/3	砂砂粒、白色粒、赤色粒、雲母	良好	横位2本単位平行沈線 摩滅著しい（水流によるか）	縄文晩期 水ノ江か
122	33	16	2区	SS1	土師器	高坏（身）			(1.9)	体部小	ナデ	ナデ		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	砂砂粒、赤色粒、白色粒	良好	**須恵器高坏の模倣**	古墳後期
123	33	16	2区	SS1	土師器	高坏			(2.0)	体部	ナデ	ナデ		明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	砂砂粒、白色粒、赤色粒	良好		古墳後期か
124	33	16	2区	SS1	須恵器	壺			(10.7)	体部	当具痕（同心円）	タタキ目（格子）		灰 N5/	灰 N5/	砂砂粒、白色粒	良好		古墳中期～後期
125	33	16	2区	SS1	須恵器	壺			(5.7)	体部小	当具痕（同心円）	タタキ目（格子）		灰褐 10YR4/1	黒褐 10YR3/1	砂砂粒、白色粒	良好		古墳中期～後期
126	33	16	2区	SS1	須恵器	壺			(5.2)	体部小	ロクロ整形	タタキ目（平行）		灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1	砂砂粒、白色粒	良好		古墳中期～後期
127	33	16	2区	SS1	須恵器	壺	(13.4)		(12.4)	口縁小～頸部				褐灰 7.5YR6/1	褐灰 7.5YR6/1	砂砂粒、黒色粒	良好	継の可能性あり	古墳後期
128	33	16	2区	SS3	土師器	壺			(2.8)	口縁部小	ハケ目	ハケ目		にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい赤褐 5YR4/3	砂砂粒、長石、赤色粒	良好		古墳中期か
129	33	16	2区	SS3	須恵器	壺			(5.4)	体部	当具痕（波状）	タタキ目（平行）		灰 N4/0	灰 N4/0	砂砂粒、長石	良好		古墳中期～後期
130	33	16	2区	SS3	須恵器	壺			(4.8)	体部		タタキ目（平行）		灰 N6/0	灰 N6/0	砂砂粒、長石	良好		古墳後期か
131	33	16	2区	SS3	瓦質陶器	鍋			(2.1)	底部		ロクロナデ		灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1		良好		奈良・平安
132	33	17	2区	SD2	土師器	台付皿			(3.2)	脚部	ナデ	ケズリ、ナデ		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	雲母	良好		古墳前期 4C後～5C前

表6　出土遺物観察表5（土器類）5

＊法量（ ）は復元実測値、（ ）は残存値である。

取物番号	挿図	写真図版	調査区	出土地点	種別	器形	法量(cm) A	法量(cm) B	法量(cm) C	部位	整形・調整技法 内面（裏面）	整形・調整技法 外面（表面）	整形・調整技法 底部	胎土色調 内面	胎土色調 外面	胎土含有物	焼成	備考	推定年代
133	33	17	2区	SD2	須恵器	蓋口径	(8.8)		(2.8)	口縁部	ナデ	ミガキ		にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/3	雲母	良好		古墳中期 5C中葉
134	33	17	2区	SD2	須恵器	壺			(5.7)	頸部	当具痕（篦状）	タタキ目（格子）		灰 5Y4/1	褐灰 7.5YR6/1		良好	外）スス付着	古墳中期 5C後～6C前
135	34	17	2区	SD4	土師器	壺			(3.8)	体部	指頭痕、輪積痕	ハケ後ヘラミガキ		褐灰 7.5YR4/1	にぶい褐 7.5YR5/4	雲母・長石	良好		古墳中期 5C前葉か
136	34	17	2区	SD4	須恵器	蓋杯（蓋）			(3.6)	体部	ロクロ成形	ロクロ成形 沈線		褐灰 7.5YR5/1	褐灰 7.5YR5/1		良好		古墳中期～後期
137	34	17	2区	SD4	須恵器	壺			(4.8)	体部	当具痕（篦状）	タタキ目（平行）		褐灰 7.5YR4/1	褐灰 7.5YR4/1		良好		古墳中期～後期
138	34	17	2区	SD5	須恵器	台付壺（S字状口縁）	(11.0)		(6.2)	口縁～体部	ハケ後ヘラケズリ 指頭痕	ハケ目		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	雲母	良好	S字状口縁（D類）	古墳前期 4C後～5C前
139	34	17	2区	SD5	須恵器	坏		(4.6)	(0.7)	底部	ロクロ成形	ロクロ成形	ヘラ削り	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1		良好		古墳中期～後期
140	34	17	2区	SD5	須恵器	壺			(7.2)	体部	当具痕（篦状）	タタキ目（平行）		褐灰 10YR5/1	褐灰 10YR5/1		良好		古墳中期～後期
141	34	17	2区	遺構外（第1面）	縄文土器	深鉢			(3.9)	口縁部小	ナデ	沈線		橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	長石	良好	有刻隆線	縄文後期前葉 堀之内2式
142	34	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	甕または鉢	(16.4)		(3.8)	口縁部小	ヘラミガキ	ヘラケズリ ハケ目		橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6		良好		古墳前期
143	34	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	小型丸底鉢	(12.0)			口縁小片	ヘラミガキ	ヘラケズリ ナデ		にぶい褐 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR6/4		良好		古墳前期 (4C後～5C前)
144	34	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	器台			(4.6)	脚部	ヘラケズリ	ミガキ		橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6		良好	脚頂部に穿孔	古墳前期
145	34	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	高坏			(2.2)	体部小	クズリ後ミガキ	ナデ		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6		良好		古墳前期
146	34	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	高坏			(8.6)	脚部	ナデ	ヘラミガキ		橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6		良好		古墳中期 5C前葉か
147	34	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	高坏			(3.8)	脚部	指頭痕 ヘラケズリ	ヘラケズリ		橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	長石	良好		古墳前期
148	34	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	高坏			(3.2)	脚部大	ヘラケズリ	ヘラミガキ		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4		良好	穿孔あり	古墳前期
149	34	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	高坏		(20.0)	(1.8)	脚部小	ロクロナデ	ヘラミガキ		明褐 7.5YR5/6	橙 7.5YR6/6	雲母	良好	穿孔あり	古墳前期
150	34	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	高坏		(11.0)	(2.2)	脚部小	ヘラケズリ	ヘラミガキ		橙 5YR6/8	橙 5YR6/8		良好	穿孔あり	古墳前期
151	34	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	高坏		(11.0)	(2.7)	脚部小片	ヘラケズリ	ヘラミガキ		橙 5YR6/6	橙 5YR6/6		良好		古墳前期
152	34	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	高坏		(9.0)	(2.9)	脚部小	ナデ	ナデ		橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	雲母	良好		古墳中期
153	35	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	台付壺（S字状口縁）	(13.6)		(3.2)	口縁部小	ナデ	ハケ目		橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6		良好	S字状口縁（D類）	古墳前期 4C後～5C前
154	35	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	台付壺（S字状口縁）	(14.0)		(2.1)	口縁小片	ヘラナデ	ケズリ、ナデ		にぶい黄橙 10YR5/4	にぶい黄橙 10YR5/4		良好	S字状口縁	古墳前期
155	35	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	台付壺（S字状口縁）	(15.0)		(1.7)	口縁部小	ヘラケズリ	ナデ		褐 7.5YR4/4	褐 7.5YR4/4	雲母	良好	S字状口縁	古墳前期
156	35	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	台付壺（S字状口縁）	(15.4)		(1.9)	口縁小片	ナデ	ナデ		灰褐 7.5YR5/2	灰褐 7.5YR5/2		良好	S字状口縁	古墳前期
157	35	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	台付壺（S字状口縁）	(15.8)		(2.0)	口縁小片	ナデ	ハケ目		橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	雲母	良好	S字状口縁 外）スス付着	古墳前期
158	35	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	台付壺（S字状口縁）			(2.8)	体部小片	ナデ	ハケ		褐 10YR4/4	橙 7.5YR6/8	長石	良好	S字状口縁台付壺（B類）か	古墳前期(4C中)
159	35	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	台付壺（S字状口縁）			(3.5)	体部小片	ナデ	ハケ		にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	雲母	良好	S字状口縁台付壺（B類）か	古墳前期(4C中)
160	35	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	台付壺（S字状口縁）			(3.4)	体部小片	ナデ	ハケ		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4		良好	S字状口縁（D類）か	古墳前期
161	35	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	台付壺（S字状口縁）			(8.4)	体部小	ナデ	ハケ目		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	雲母	良好	S字状口縁（D類）か	古墳前期
162	35	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	台付壺（S字状口縁）			(3.7)	体部小	ナデ	ハケ目		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	雲母	良好	S字状口縁か	古墳前期

表7　出土遺物観察表6（土器類）6

＊法量（ ）は復元実測値、〈 〉は残存値である。

報告番号	縮図	写真図版	調査区	出土地点	種別	器形	法量(cm) A	法量(cm) B	法量(cm) C	部位	整形・調整技法 内面（黒色）	整形・調整技法 外面（赤色）	整形・調整技法 底部	胎土色調 内面	胎土色調 外面	胎土含有物	焼成	備考	推定年代
163	35	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	台付鉢（S字状口			(3.0)	体部小片	ナデ	ハケ目		明赤褐 2.5YR5/6	橙 5YR6/6		良好	S字状口縁か	古墳前期
164	35	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	台付鉢（S字状口		(16.1)	(2.3)	脚部小片	ナデ	ナデ	台下端折り返し	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	雲母	良好	S字状口縁か	古墳前期
165	35	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	台付鉢（S字状口		(5.6)	(2.7)	脚部小片	ナデ	ナデ	台下端折り返し	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	雲母・長石	良好	S字状口縁か	古墳前期
166	35	17	2区	遺構外（第1面）	土師器	壺			(2.7)	口縁部小	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラケズリ		橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6		良好	（外）スス付着	古墳中期～後期
167	35	18	2区	遺構外（第1面）	土師器	直口壺	(16.0)		(3.4)	口縁小片	ミガキ	ヘラケズリ ナデ		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4		良好		古墳前期～中期
168	35	18	2区	遺構外（第1面）	土師器	直口壺	(10.6)		(6.0)	口縁部小	ミガキ	ミガキ		黒褐 7.5YR7/8	黒褐 7.5YR7/8	赤色粒	良好		古墳前期 4C中
169	35	18	2区	遺構外（第1面）	土師器	直口壺			(3.6)	体部小	ミガキ	ミガキ		橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6		良好		古墳前期
170	35	18	2区	遺構外（第1面）	土師器	壺			(7.3)	体部小	ロクロナデ	ミガキ		橙 7.5YR6/6	明赤褐 5YR5/8	雲母・長石	良好		古墳中期～後期
171	35	18	2区	遺構外（第1面）	土師器	小壺	(8.0)		(3.4)	口縁小片	ハケ目 ヘラケズリ	ヘラケズリ		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	雲母	良好		古墳前期～中期
172	35	18	2区	遺構外（手捏ね）	土師器（手捏ね）	小壺	(5.2)	4.0	8.3	口縁部1/3～底部完	ナデ	ハケ後ナデ		橙 5YR6/8	橙 5YR6/8		良好		古墳後期
173	35	18	2区	遺構外（第1面）	土師器（手捏ね）	小壺			(5.9)	体部小片	ナデ、輪積痕	ヘラケズリ ナデ		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	雲母	良好		
174	35	18	2区	遺構外（第1面）	須恵器	壺			(3.1)	頸部1/8	ロクロナデ 当具痕、指頭痕	ロクロ		灰 N5/	灰 N5/	細砂粒、白色粒	良好		古墳中期～後期
175	35	18	2区	遺構外（第1面）	須恵器	壺			(6.5)	体部小	当具痕（同心円）	タタキ目（格子）		灰 N4/	灰 N4/	細砂粒、白色粒	良好		古墳中期～後期
176	36	18	2区	遺構外（第1面）	須恵器	壺			(5.9)	体部小	当具痕（篠状）	タタキ目（平行）		オリーブ黒 5Y3/1	赤灰 2.5YR4/1	細砂粒、白色粒、赤色粒	良好		古墳中期～後期
177	36	18	2区	遺構外（第1面）	須恵器	壺			(4.3)	体部小		タタキ目		灰 N7/	灰 N7/	細砂粒、白色粒	良好		古墳中期～後期
178	36	18	2区	遺構外（第1面）	須恵器	壺			(2.8)	体部小	当具痕（篠状）	ロクロ後 タタキ目（平行）		オリーブ黒 5Y3/1	赤灰 2.5YR4/1	細砂粒、白色粒、赤色粒	良好		古墳中期～後期
179	36	18	**2区**	遺構外（第1面）	**須恵器**	**壺**			**(6.3)**	**口縁部小**	**ロクロナデ**	**櫛型波状文**		**灰 N4/**	**灰 N4/**	**細砂粒、白色粒**	**良好**		古墳中期～後期
180	36	18	2区	SD6	縄文土器	深鉢			(3.6)	体部小	ナデ			褐灰 10YR4/1	明赤褐 5YR5/6	細砂粒、長石	良好	地紋刺突文、沈線清巻貝文	縄文中期後半 曽利Ⅳ式
181	36	18	2区	SD6	土師器	高坏			(3.8)	脚部	ナデ	ヘラナデ		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	細砂粒、長石	良好		古墳前期
182	36	18	2区	SD6	土師器	高坏			(2.5)	脚部	ナデ	ハケ目		橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	細砂粒、長石	良好	穿孔あり	古墳前期
183	36	18	2区	SD6	土師器	台付鉢			(2.8)	口縁部	横ハケ目	縦ハケ目		橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	細砂粒、長石	良好	口縁部にキザミ	古墳前期 3C後～4C前
184	36	18	2区	SD6	土師器	壺			(2.7)	口縁部小	ナデ	縦ハケ目		橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	細砂粒、石英	良好		古墳前期 4C後～5C前
185	36	18	2区	SD6	土師器	壺			(3.1)	口縁部小	横ミガキ	縦ハケ目		橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	細砂粒、長石	良好		古墳前期 4C前
186	36	18	2区	SD6	須恵器	壺			(5.0)	体部小	当具痕（篠状）	タタキ目（縄目）		褐灰 10YR5/1	褐灰 10YR5/1	細砂粒、長石	良好		古墳中期～後期
187	36	18	2区	遺構外（第2面）	縄文土器	深鉢			(5.1)	体部小				にぶい橙 10YR7/3	赤褐 5YR4/6	細砂粒、白色粒	良好	地文刺突文、沈線清巻貝文	縄文中期後半 曽利Ⅳ～Ⅴ式
188	36	18	2区	遺構外（第2面）	土師器	台付鉢（S字状口縁）			(1.9)	口縁部小		ヘラナデ ハケ目		灰褐 7.5YR4/2	灰褐 7.5YR4/2	細砂粒、白色粒	良好	S字状口縁	古墳前期 4C後～5C前
189	36	18	2区	遺構外（第2面）	土師器	台付鉢			(2.8)	脚部	ナデ	ハケ目		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	細砂粒、石英、長石	良好		古墳前期
190	36	18	2区	遺構外（第2面）	土師器	壺			(2.9)	口縁部小	横ハケ目	縦ハケ目		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	細砂粒、白色粒	良好		古墳前期か
191	36	18	2区	遺構外（第2面）	土師器	壺			(2.9)	口縁部小	横ハケ目	横ハケ目		にぶい赤褐 5YR4/4	にぶい赤褐 5YR4/4	細砂粒、白色粒、黒色粒	良好		古墳前期
192	36	18	2区	遺構外（第2面）	土師器	壺			(3.4)	口縁部小	ナデ	斜ハケ目		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	細砂粒、白色粒、赤色粒	良好		古墳前期か

表8　出土遺物観察表7（土器類）7

＊法量（ ）は復元実測値、〈 〉は残存値である。

報告番号	挿図	写真図版	調査区	出土地点	種別	器形	法量(cm) A	法量(cm) B	法量(cm) C	部位	整形・調整技法 内面（表面）	整形・調整技法 外面（裏面）	整形・調整技法 底部	胎土色調 内面	胎土色調 外面	胎土含有物	焼成	備考	推定年代
193	37	18	2区	遺構外（第2面）	土師器	壺			(4.0)	口縁部小	横ハケ目	縦ハケ目		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	細砂粒、白色粒	良好		古墳前期か
194	37	18	2区	遺構外（第2面）	土師器	壺	(9.0)		(3.7)	底部1/3	横ハケ目	ヘラナデ		にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	細砂粒、白色粒、赤色粒	良好		古墳中期 5C中
195	37	18	2区	遺構外（第2面）	土師器	壺			(4.8)	体部小	ハケ目	ミガキ		にぶい橙 5YR5/4	にぶい橙 5YR5/4	細砂粒、白色粒	良好		
196	37	19	2区	トレンチ3	縄文土器	深鉢			(5.0)	口縁部	ナデ	沈線、ハケ目		橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	雲母・長石	良好	地文縦位条線、口縁：沈線消巻弧文	縄文中期後半 曽利Ⅲ～Ⅳ式
197	37	19	2区	トレンチ3	土師器	小型丸底鉢	(13.5)		(3.2)	口縁部	ミガキ	ナデ		橙 5YR6/6	橙 5YR6/6		良好		古墳前期 4C後～5C前
198	37	19	2区	トレンチ3	土師器	台付甕		(9.0)	(4.1)	脚部	ナデ	ハケ目 ヘラケズリ		にぶい橙 7.5YR5/3	橙 7.5YR6/6	雲母	良好		古墳前期
199	37	19	2区	トレンチ3	土師器	壺	(12.0)		(4.0)	口縁部	ハケ目、キザミ	ハケ目、キザミ		橙 7.5YR6/8	橙 7.5YR6/8	雲母・長石	良好		古墳中期 5C中
200	37	19	2区	トレンチ4	土師器（手捏ね）	小壺	(4.2)		(4.3)	口縁～体部	ナデ	ナデ		橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	雲母・長石	良好		古墳中期
201	37	19	2区	トレンチ5	土師器	台付甕（S字状口縁）			(4.2)	体部	ハケ目	ヨコナデ ナナメハケ目		褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	雲母	良好	S字状口縁台付甕（B類）か	古墳前期 4C中
202	37	19	2区	トレンチ5	土師器	壺			(2.8)	体部	ナデ	ミガキ、ハケ目		にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/8		良好		古墳中期か

表9　出土遺物観察表8（石製品）

＊法量（ ）は復元実測値、〈 〉は残存値である。

報告番号	挿図	写真図版	調査区	出土地点	分類1	分類2	法量(cm) A	法量(cm) B	法量(cm) C	重量(g)	特徴・備考
12	23	10	1区	SK5	黒曜石	石鏃？	(2.0)	(1.8)	(0.55)	1.62	先端部欠損
20-2	24	11	1区	SK9	石製品	小玉	(1.3)	(0.7)	(0.4)	0.26	緑泥岩製 内径部に原孔時の痕迹痕
50	27	13	1区	NR2	石製品	打製石斧	(18.9)	(10.0)	(2.2)	491.9	
51	27	13	1区	NR2	石製品	打製石斧	(4.6)	(3.2)	(0.7)	11.9	
52	27	13	1区	NR2	石製品	磨＋敲石	15.6	5.4	3.8	444.3	
53	27	13	1区	NR2	石製品	磨＋敲石	12.7	8.8	4.9	996.3	
90	30	15	1区	NR3	石製品	打製石斧	11.6	4.7	1.2	89.5	
91	30	15	1区	NR3	石製品	打製石斧	(8.2)	(4.9)	(1.2)	57.5	
92	30	15	1区	NR3	石製品	打製石斧	11.5	4.1	2.6	164.8	粘板岩
93	30	15	1区	NR3	石製品	打製石斧	8.8	2.9	1.4	59.4	
119	32	16	1区	遺構外（第2面）	石製品	打製石斧	8.4	6.3	2.0	131.3	
120	32	16	1区	遺構外（第2面）	石製品	磨製石斧	5.1	2.1	0.8	17.1	
121	32	16	1区	遺構外（第2面）	黒曜石	剥片石器	(2.4)	(1.8)	(1.0)	3.17	

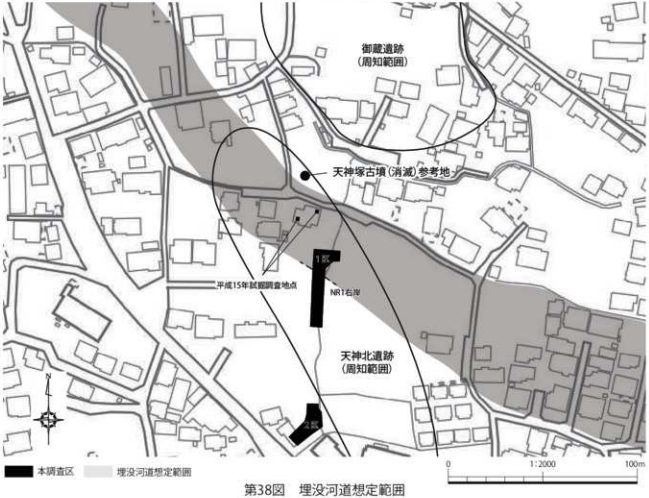
第５章　総括

天神北遺跡では、過去に２度の試掘調査が実施されたのみで、今回の調査が初の本格的な発掘調査であった。発掘調査の成果や近隣住民への聞き取りで得られた情報をまとめ、今後の調査への一助としたい。

第１節　１区の調査成果と今後の課題（第 38 図）

本調査で検出した平安時代の竪穴住居ＳＩ１は埋没河道の上に構築され、遺構の埋土状況からＳＩ１もまた洪水により一息に埋没したと考えられる。天神北遺跡のほぼ中央に位置する１区においてＳＩ１以南からは同時期の遺構を一切検出できないことから、本調査で検出したＳＩ１は天神北遺跡における最南端の平安時代の住居である可能性があり、集落の中心は北側に展開することが想定される。天神北遺跡北側に隣接する御蔵遺跡は古墳・平安時代遺跡と周知されているが、調査事例は皆無であり、今後実施される発掘調査によってＳＩ１と同時期の集落が発見される可能性に期待したい。その際、現在周知されている天神北遺跡範囲の北端においては、平安期の遺構確認面直上の遺物包含層に該当する堆積土が「遺物が皆無に等しい分厚い砂層」である可能性が非常に高いため、分厚い砂層を地山と誤認したり、旧河道の下に遺構が遺存する可能性を排除してしまわないよう注意が必要である。平成 15 年の試掘調査では現地表下約 30 ～ 60㎝と約 60㎝以下に続く２層の砂層が確認されており、これらは本調査におけるⅤ・Ⅵ層に該当する可能性がある。

近隣住民への聞き取りから「地域の古老が言うには天神北遺跡の北端を横断する道路はかつて河道であったと伝わる」といい、恐らく１区北端で確認したＮＲ１がこの河道右岸の立ち上がりと考えられる。調査では最大幅約 15ｍを測ってなお、左岸の立ち上がりが確認できなかったことから、幅 30ｍを超える大規模な河道であったことが想定される。このような大規模河道であったからこそ、その存在が今日まで伝わった可



第38図　埋没河道想定範囲

能性と、当該道路直下には名残となる川筋がある程度後世まで存続していた可能性がある。

調査区の所在する千塚地域の西側縁辺を沿い南流する荒川は、『甲斐国志』に「荒ノ言ハ暴ナリ其ノ水暴流スルヨリ起リシ名ナルベシ」とある暴れ川であり、「河灌汎クコレヲ飯田河原ト称シタリ（略）」と称された範囲に千塚地域は属している。また、「武田ノ時大ニ防河ノ役ヲ興シテ横流ヲ治ム（略）」と信虎、信玄の甲斐国統治期に大規模な水害対策を行っているとある。このように荒川は上流の荒川ダム完成以前は古くから水害をもたらしていたと伝わる。今回の調査では、縄文時代の遺構を埋没河道の下で検出し、この河道を埋没させた砂層から検出した平安時代の住居もまた河川氾濫土により埋没していることから、洪水被害と切り離せない土地柄であったことを再確認することとなった。

第２節　２区で確認したⅪ層と溝跡の関連性（第３・４・28・39図）

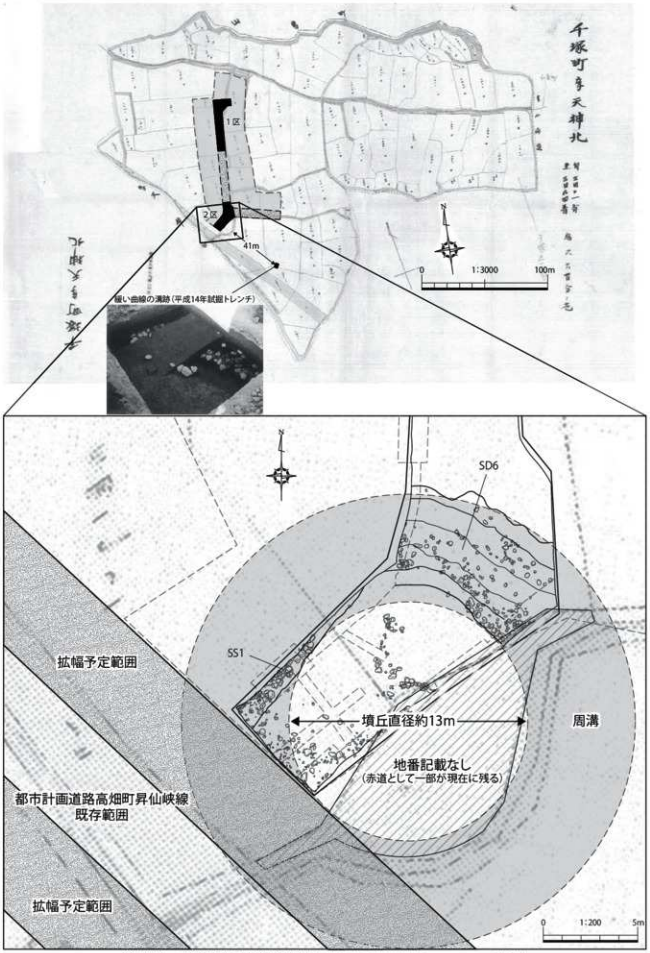
２区においては、甲府市教育委員会実施の試掘調査トレンチ９で水田床土（Ⅲ層）直下より古墳時代後期から平安時代の土師器・須恵器を含む堆積層が確認されたことから、本調査ではⅢ層までを表土掘削の対象とした。しかしながら、試掘トレンチ９付近で行った人力による包含層掘削では、Ⅲ層直下層からはＳ字状口縁台付甕（Ｓ字甕）や器台・有透孔高坏といった古墳時代前期の遺物を主体に包含する堆積層（Ⅺ層）が広がり、Ⅺ層直下より須恵器などの古墳時代後期の遺物を伴う遺構を検出するという矛盾が生じている（第３・４図）。２か所のサブトレンチ４・５を設定して堆積土層を観察した結果、各々層厚５～20㎝程度の良く締まる堆積層が少なくとも３層以上重ねられていることと、層末端部に土止め状の礫を伴うことを確認した。このことから、このⅪ層は版築により人為的に盛り上げられた層であると考えられる（第21図）。なお、試掘トレンチ９で確認された古墳時代後期の遺物を含む堆積は、礫を伴う溝ＳＳ１の埋土であった。

ＳＤ６（第19・20図）は、埋没状況から２段階に分けられる溝跡で、上部の２段階目にあたる緩やかな弧を描く溝は、内径側立ち上がりに沿って石列状の礫群を伴うという特徴がある。遺構埋土の観察により、下層部の黒褐色粘土はゆるやかに沈殿した有機堆積で流水の形跡が認められないことから、周溝のような単体で完結する溝と考えられる。検出範囲から算出した溝の延伸部の予測線は内径約13m、外径約24mとなり、この予測線内にはＳＤ６第２段階と同様にやや弧を描き並ぶ石列状の礫群を伴う溝ＳＳ１とサブトレンチ５（Ｎ－52'－Ｅ）14層が納まる（第21図）。２区の堆積土層は、計４条の擁壁と暗渠によって分断・有段化されていたため同時期の遺構でも標高差が生じていたが、遺構埋土や遺物内様からＳＤ６第２段階とＳＳ１は互いに延伸部の関係である可能性がある。このような版築を見せるⅪ層や弧を描き単体で完結する溝ＳＤ６・ＳＳ１などは古墳の存在を窺わせる。

同地域に所在する加年那塚古墳は、古墳時代後期の横穴室石室をもつ円墳で外部施設として葺石が確認されている。このことから、ＳＤ６の内径やＳＳ１に見られる礫も古墳の葺石である可能性があるが、残念ながら今回の調査では埴輪などの古墳と決定づける遺物が出土していないため、あくまで溝跡としての報告とした。しかし、昭和20年複写の地籍図（第39図）において、半円形をした地番未記載地とＳＤ６の延伸部予測線が重なることから古墳が存在した可能性は大いにあり得る。その場合の規模・形状は墳丘直径約13mで幅約５mの周溝を伴う円墳を想定している。

本調査で検出したＳＤ６・ＳＳ１や平成14年の試掘調査で確認された溝跡は「緩い弧を描く」「礫を伴う」という共通点を持ち、出土遺物から古墳時代後期の円墳の周溝の可能性を窺わせるが、一部分のみの検出にとどまるため確証を得るものではない。また、平成14年試掘検出の溝については、古墳周溝と当時の考察もあるが地籍図と重ねると地境と重複することから、区画溝の可能性も有している。

本調査区の西側に面する都市計画道路高畑町昇仙峡線では、道路拡幅等の街路事業に伴う発掘調査が平成25年から順次実施されている。本調査区付近においても既存道路の両袖が幅約５ｍずつ公有化が進んでおり、これら「緩い弧を描く」「礫を伴う」溝の延伸部が発掘調査の対象範囲に含まれることは確実と言えることから、今後実施される調査によって検出されるであろう溝跡の持つ可能性の一つとして古墳を提示し、



第39図　古墳の位置と推定規模（『千塚町字天神北地籍図（昭和20年複写）』に加筆）

いずれ遺構の性格が解明されることを期待する。その際は、本地点で古墳時代前期の遺物も少なからず出土していたため、周囲に古墳時代前期の遺構が存在する可能性も考える必要がある。

引用・参考文献

論文・地誌等

秋山敬　2003『甲斐の荘園』甲斐新書刊行会

磯貝正義　1984「古代の甲府 - 青沼・表門ノ郷を中心として -」

『甲府市史研究　創刊号』甲府市市史編さん委員会

小林健二　2015「甲斐の古墳時代と土器 - 編年と移動を考える - 」

『山梨県考古学協会誌　第 23 号　特集：移動を考える』山梨県考古学協会

一蓮寺過去帳刊行会　2006『影印校訂　一蓮寺過去帳』地人館

こうふ開府 500 年記念誌編集委員会　2019『甲府歴史ものがたり』

甲府市水道局水道史編さん委員会　1988『甲府市水道史　歴史編』

甲府市市史編さん委員会　1991『甲府市史　通史編　第一巻　原始　古代　中世』

甲府市史編さん委員会　1992『甲府市史　資料編　第一巻　原始　古代　中世』

甲府市市史編さん委員会　1993『甲府市史　別編Ⅲ　甲府の歴史』

甲府市文化財調査審議委員会編　1981『甲府の歴史と文化』

甲府市役所　1918『甲府略誌』

編集委員会（編集委員長　石原孝徳）　2018『千塚・湯村温泉の歴史～遺跡（史跡）と文化遺産～』

松平定能　文化 11 年（1814）『甲斐国志』（大日本地誌体系［雄山閣版　1968-1982］収録「甲斐国志」第一～五巻）

山梨教育会西山梨郡支会　1926『西山梨郡誌』

山梨県　1938『山梨県史　資料編 1　原始・古代 1　考古（遺跡）』

山梨県　1999『山梨県史　資料編 2　原始・古代 2　考古（遺構・遺物）』

山梨県考古学協会　2021「曽利式土器とその周辺（山梨県考古学協会 2021 年度研究集会　資料集）」

山梨県立博物館　2018『文字が語る古代甲斐国』

報告書

甲府市教育委員会　2006『甲府市内遺跡Ⅲ』甲府市文化財調査報告　31

甲府市教育委員会　2007『甲府市内遺跡Ⅳ』甲府市文化財調査報告　35

甲府市教育委員会　2008『甲府市内遺跡Ⅴ』甲府市文化財調査報告　38

甲府市教育委員会　2009『甲府市内遺跡Ⅵ』甲府市文化財調査報告　41

甲府市教育委員会　2010『甲府市内遺跡Ⅶ』甲府市文化財調査報告　49

甲府市教育委員会　2011『甲府市内遺跡Ⅷ』甲府市文化財調査報告　59

甲府市教育委員会　2018『甲府市内遺跡Ⅸ』甲府市文化財調査報告　98

甲府市教育委員会　1973『上石田遺跡 - 甲府盆地底部の平坦面遺文遺跡 - 発掘調査報告書』

甲府市教育委員会　2001『米草遺跡 - 山宮町土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 - 』甲府市文化財調査報告　14

甲府市教育委員会　2006『八幡東遺跡 - 宅地造成に伴う発掘調査報告書 - 』甲府市文化財調査報告　77

甲府市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所　2016

『榎田遺跡 - 計画道路高畑町昇仙峡線街路事業に伴う発掘調査報告書 - 』甲府市文化財調査報告　84

甲府市教育委員会・昭和測量株式会社　2016

『榎田遺跡 - 計画道路高畑町昇仙峡線街路事業に伴う発掘調査報告書 - 』甲府市文化財調査報告　91

甲府市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所　2017

『榎田遺跡 - 宅地造成工事に伴う甲府市千塚 5 丁目 3001-1・3002 番地の発掘調査 - 』甲府市文化財調査報告　95

甲府市教育委員会・昭和測量株式会社　2018

『榎田遺跡 - 計画道路高畑町昇仙峡線街路事業に伴う発掘調査報告書 - 』甲府市文化財調査報告　100

甲府市教育委員会　2004

『塩部遺跡Ⅱ - 山梨県都市計画道路「塩部堀田橋線」道路改良工事に伴う発掘調査報告書 - 』甲府市文化財調査報告　24

甲府市教育委員会　2005

『塩部遺跡Ⅲ - 学校法人聖心学園聖心甲府小学校建設に伴う発掘調査報告書 - 』甲府市文化財調査報告　30

甲府市教育委員会・昭和測量株式会社　2019

『塩部遺跡Ⅲ - 学校法人聖心学園聖心甲府中学校建設に伴う発掘調査報告書 - 』甲府市文化財調査報告　105

甲府市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所　2019

『緑が丘二丁目遺跡 - 県道天神平甲府線道路改良に伴う発掘調査報告書 - 』甲府市文化財調査報告　104

甲府市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所　2022

『食糧工場遺跡 - 都市計画道路太田町蓬沢線外 2 路線街路事業に伴う発掘調査報告書 - 』甲府市文化財調査報告　124

財団法人山梨文化財研究所　2002

『平石遺跡 - 都市計画道路「愛宕町下条線」道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』

菲崎市教育委員会　1988

『坂井南 - 山梨県菲崎市坂井南遺跡発掘調査報告書 - 』

北杜市教育委員会　2008

山梨県教育委員会　1984『穂坂路』山梨県歴史の道調査報告書　第 1 集

『梅之木遺跡Ⅷ - 縄文時代中期の集落遺跡確認調査報告書 - 』北杜市埋蔵文化財調査報告　第 26 集

山梨県埋蔵文化財センター　1993

『迫山広遺跡 - 第 1 ～ 3 次調査 - 』山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 79 集

山梨県埋蔵文化財センター　1996

『塩部遺跡 - 県立甲府工業高等学校改築に伴う発掘調査報告書 - 』山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 123 集

山梨県埋蔵文化財センター　1997

『西田遺跡 - 第 2 次発掘調査報告書 - 』山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 138 集

1 区 1 面　全体完掘状況（オルソモザイク写真）

1 区 1 面　SI1 礫検出状況・土層断面　北から

1 区 1 面　SI1 カマド検出状況　北西から

1 区 1 面　SI1 カマド支脚・遺物（9 甲類型長胴甕）出土状況　北西から

1 区 1 面　NR1（河道）埋没土除去状況・北壁断面　南から

1 区 1 面　SI1 完掘状況　東から

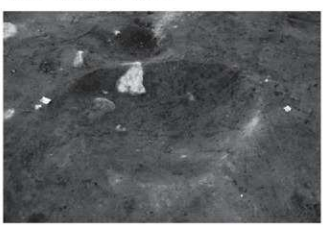
図版 2

1 区 1 面　SK1 完掘状況　北東から

1 区 1 面　SK2 完掘状況　北西から

1 区 1 面　SK3 完掘状況　北東から

1 区 1 面　SK4 完掘状況　南から



1 区 1 面　SK5 完掘状況　南東から

1 区 1 面　SK6 完掘状況　西から

1 区 1 面　SK7 完掘状況　南西から

1 区 1 面　SK8 完掘状況　西から

1 区 2 面　全体完掘状況（オルソモザイク写真）

1 区 2 面　SK9 土層断面　北から

1 区 2 面　SK9 埋甕内土壌除去状況　北から

1 区 2 面　SK9 完掘状況　北から

1 区 2 面　SK10 完掘　北から

1 区 2 面　SK11 完掘　東から

図版 4

1 区 2 面　SK12 半截状況　東から

1 区 2 面　SK13 半截状況　南から

1 区 2 面　SK14 半截状況　東から

1 区 2 面　SK15 完掘状況　東から

1 区 2 面　SK16 半截状況　北から

1 区 2 面　SK17 完掘状況　南から

1 区 2 面　SK18 完掘状況　南から

1 区 2 面　SK19 完掘状況　南から

1 区 2 面　SK20 完掘状況　南から

1 区 2 面　SK21 完掘状況　南から

1 区 2 面　SK22 完掘状況　南から

1 区 2 面　SP1 完掘状況　南から

1 区 2 面　NR2 遺物出土状況　北西から

1 区 2 面　NR3 遺物出土状況　北西から

1 区 2 面　NR3 下層確認　東から

1 区 2 面　完掘状況　南東から

図版6

2区1面　全体完掘状況（オルソモザイク写真）

2区1面　SS1 礫検出状況　西から

2区1面　SS1 土層断面　東から

2区1面　SS1 遺物（127 須恵器壺）出土状況　南東から

2区1面　SS2 礫検出状況　南から

2区1面　SS3 礫検出状況　北東から

2区1面　SK1 完掘状況　南東から

2 区 1 面　SK2 完掘状況　北西から

2 区 1 面　SD1 ～ 5 完掘状況　南東から

2 区 1 面　SD1・5 土層断面　南東から

2 区 1 面　SD2 土層断面　南東から

2 区 1 面　SD3 土層断面　南東から

2 区 1 面　SD4 土層断面　南東から

2 区 1 面　サブトレンチ 4 土層断面　南から

2 区 1 面　サブトレンチ 5 土層断面　西から

図版8

2区2面　全体完掘状況（オルソモザイク写真）

2区2面　SK4 完掘状況　南から

2区2面　SK5 完掘状況　北西から

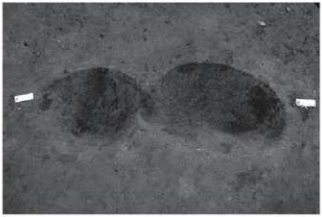
2区2面　SK6 完掘状況　北東から

2区2面　SK7 半截状況　南から

2区2面　SK8 完掘状況　北東から

2区2面　SK9（左）・10（右）半截状況　東から

2区2面　SK11 半截状況　北から



2区2面　SK12（左）・13（右）完掘状況　北から

2区2面　SD6 第2段階土層断面　東から

2区2面　SD6 第2段階礫検出状況　南東から

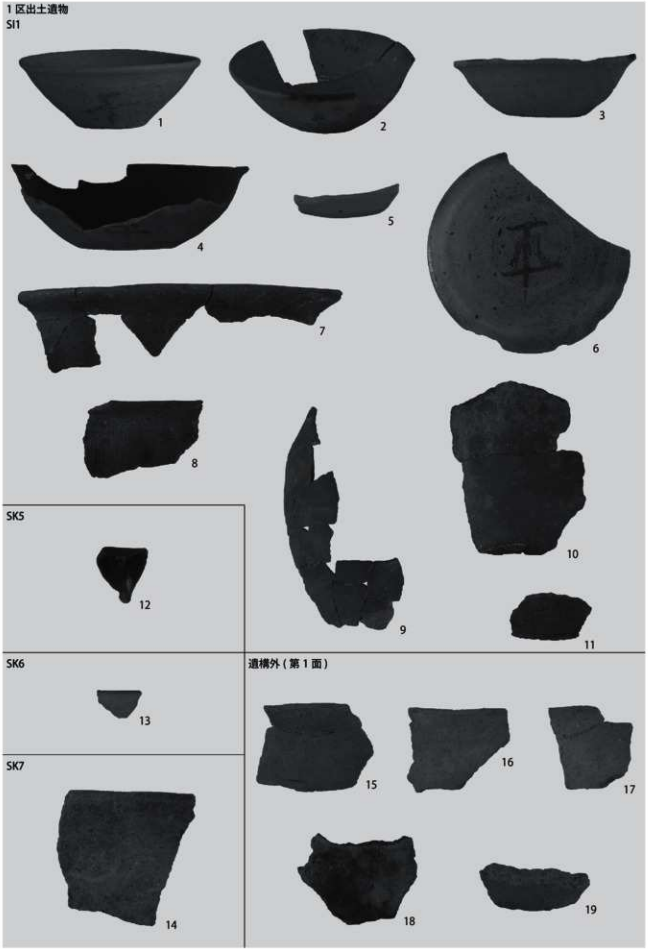
2区2面　SD6 第1段階（河道）土層断面　東から

2区2面　SD6 完掘状況　南東から

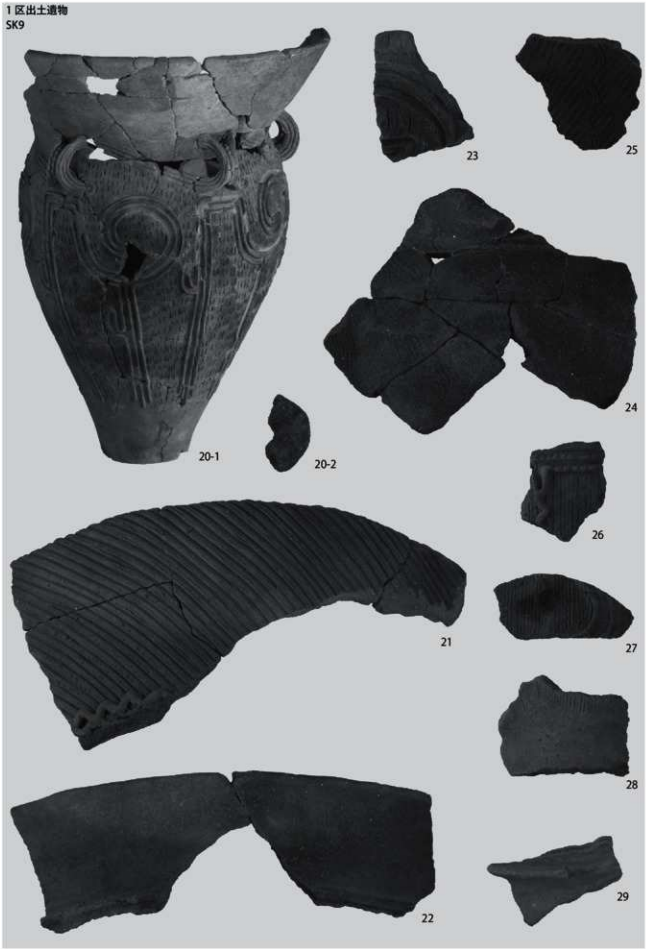
2区2面　SD6 南壁土層断面　北から

2区2面　完掘状況　南東から

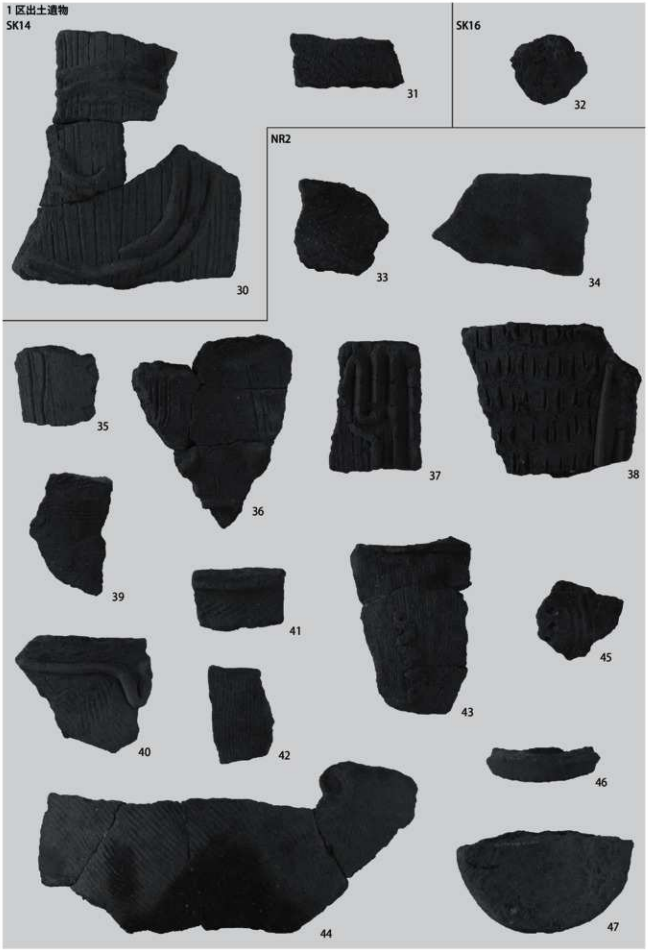
図版 10


1 区出土遺物
SI1
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
SK5
12
SK6
13
SK7
14
遺構外（第 1 面）
15
16
17
18
19

1 区出土遺物
SK9



図版 12


1 区出土遺物
SK14
30
31
SK16
32
NR2
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47

1 区出土遺物

NR2

48

50

52

49

51

53

NR3

54

55

56

57

58

60

61

64

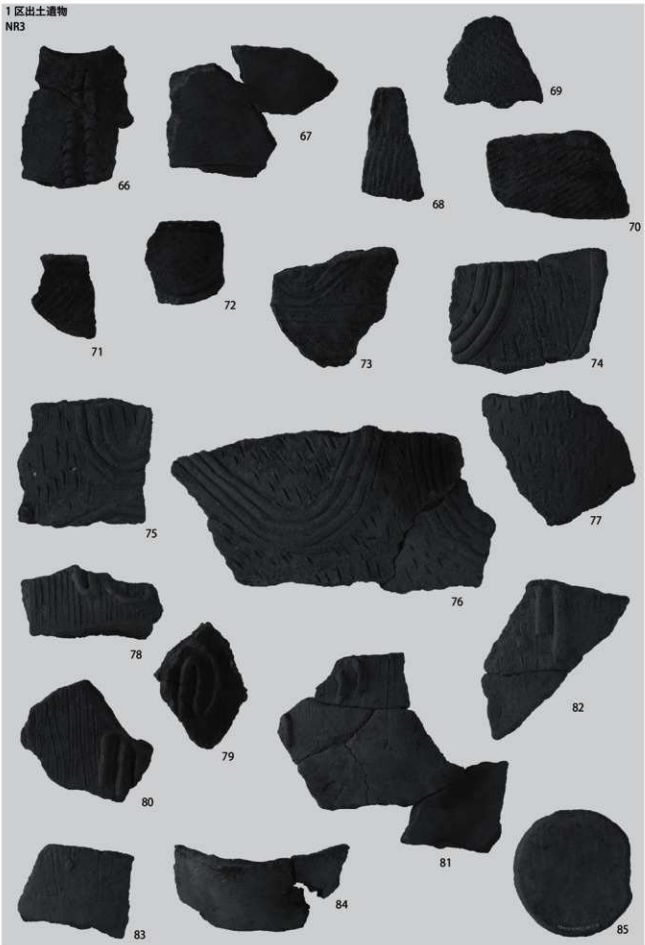
59

62

63

65

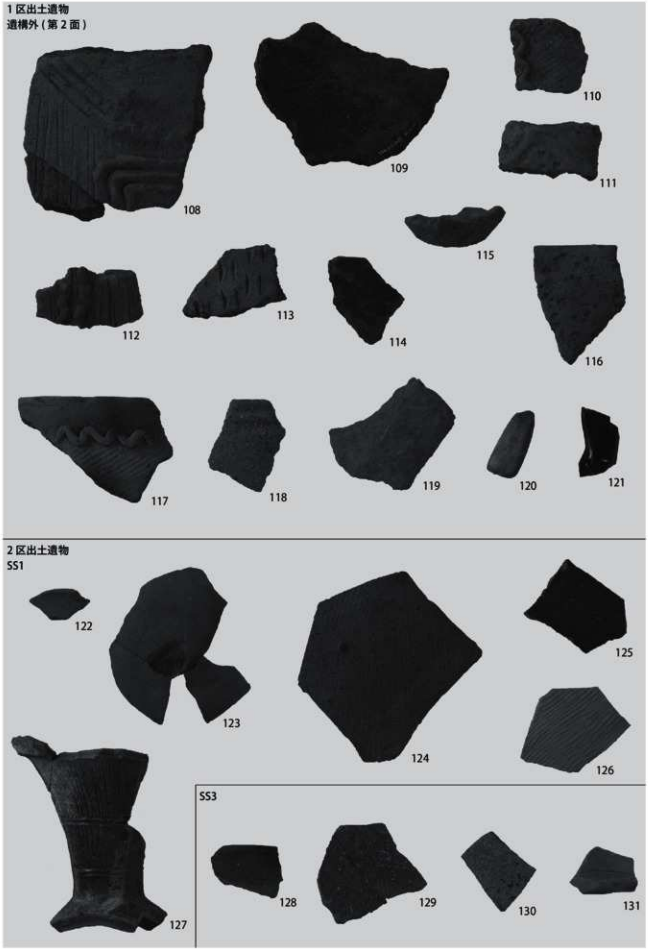
図版 14

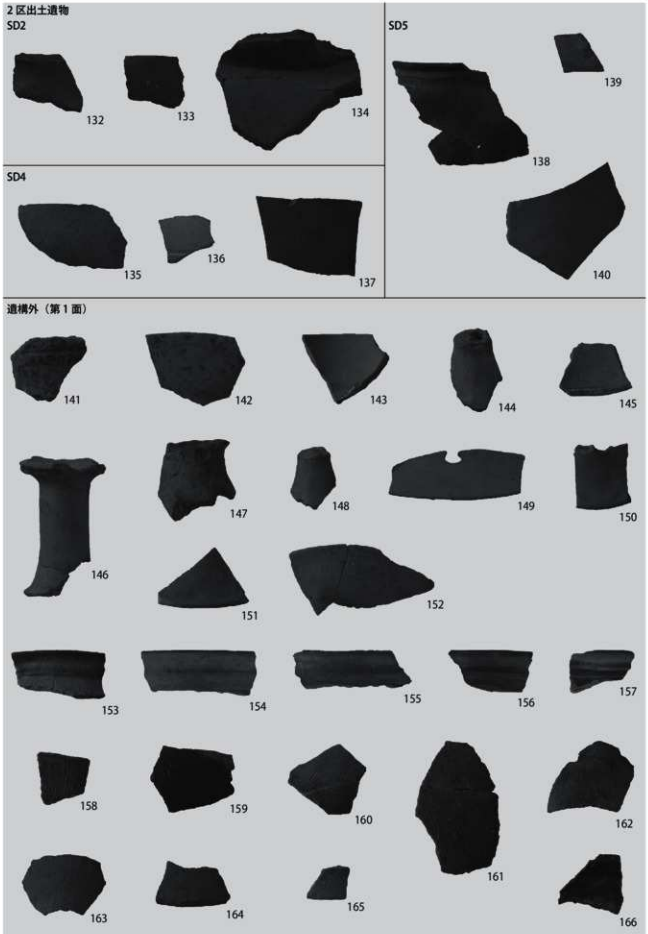


1 区出土遺物
NR3

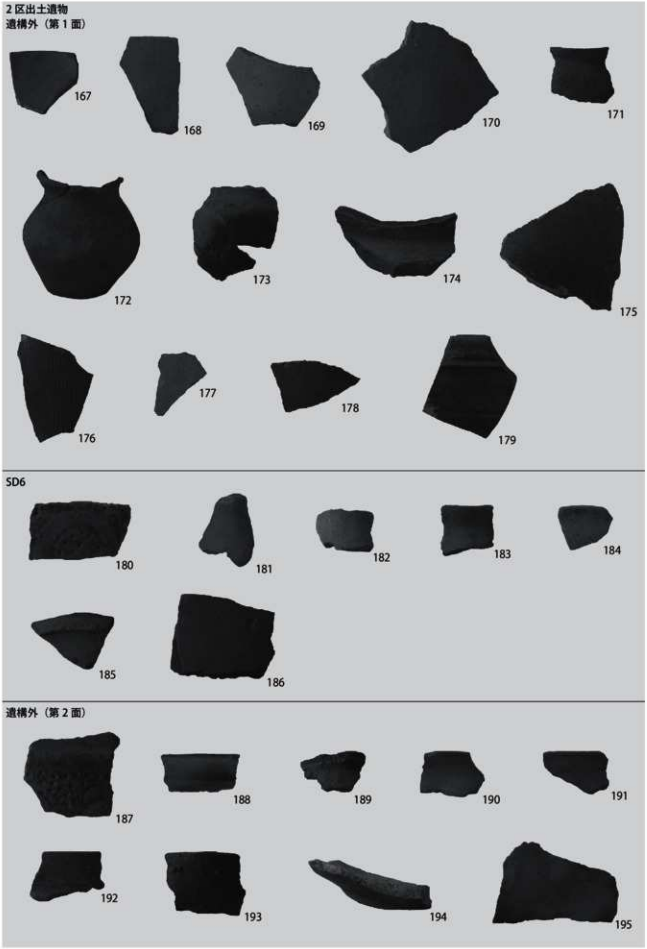
遺構外（第 2 面）

図版 16


1 区出土遺物
遺構外 (第 2 面)
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
2 区出土遺物
SS1
122
123
124
125
126
127
SS3
128
129
130
131


2 区出土遺物
SD2
132
133
134
SD4
135
136
137
SD5
138
139
140
遺構外（第 1 面）
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166

図版 18


2 区出土遺物
遺構外（第 1 面）
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
SD6
180
181
182
183
184
185
186
遺構外（第 2 面）
187
188
189
190
191
192
193
194
195

2 区出土遺物

サブトレンチ 3

196

197

198

199

サブトレンチ 4

200

サブトレンチ 5

201

202

報告書抄録

ふりがな	てんじんきたいせき（やまなしけんこうふしちづか５ちょうめ3416ばん３ほかちてん）
書名	天神北遺跡（山梨県甲府市千塚５丁目3416番３ほか地点）
副書名	宅地造成工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	130
編著者	望月健太・志村憲一
編集機関	昭和測量株式会社
所在地	〒400-0032　山梨県甲府市中央３丁目11番27号　TEL055-235-4448
発行年月日	2022(令和４)年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	世界測地系 北緯	 東経	調査期間	調査面積	調査原因
てんじんきたいせき 天神北遺跡	やまなしけんこうふしちづかちょうめ3416ばんほか 山梨県甲府市 千塚5丁目3416番3ほか	19201	15	35°41′17″	138°32′06″	20211022 ～20211220	約495㎡ 1区：約330㎡ 2区：約165㎡	宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
天神北遺跡	散布地	縄文時代 古墳時代 平安時代	埋甕・土坑・小穴 竪穴住居・溝跡 旧河道	縄文土器・石製小玉 打製石斧・磨製石斧 土師器・墨書土器 須恵器	天神北遺跡における初の本格的な発掘調査。

要約

甲府市西端に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である天神北遺跡の発掘調査である。天神北遺跡ではこれまで２度の試掘調査が行われたのみで、今回の調査が初の本格的発掘調査となる。

１区では、縄文時代中期の埋甕・土坑、古墳時代後期の土坑、平安時代中期初頭の竪穴住居のほか、計３条の旧河道を確認した。縄文時代の埋甕は曽利Ⅱ式のＸ字状把手付大甕を正位で埋納したものであり、甕内部下層から石製小玉が出土したことから埋葬または祭祀に関わる可能性がある。また、洪水被害により廃絶した平安時代の竪穴住居は、埋没河道に堆積する砂層を掘り込み構築されていた。

２区では、古墳時代前・中期の土坑・溝跡、古墳時代後期の土坑・溝跡・石列・集石を確認した。緩やかな曲線を描く古墳時代後期の溝跡は単体で完結する内径約13m外径24mの円形をした周溝状と推定され、内径側立ち上がりに沿う石列と、円中心付近では版築状の堆積層が認められた。推定される規模が地籍図に見られる半円状の地番未記載地と重複することは、当地に古墳時代後期の葺石を有する円墳が存在した可能性を窺わせるものである。

甲府市文化財調査報告130

天神北遺跡

（山梨県甲府市千塚５丁目3416番３ほか地点）
―宅地造成工事に伴う発掘調査報告書―

2022(令和４)年９月30日　発行
編　集　昭和測量株式会社
〒400-0032　山梨県甲府市中央３丁目11番27号
TEL　055-235-4448
発　行　西甲府住宅株式会社・甲府市教育委員会・昭和測量株式会社
印　刷　株式会社内田印刷所